

長野県松本市

松本城三の丸跡

KOYANAGIMACHI

小 柳 町

—第2次発掘調査報告書—



2009.3

松本市教育委員会

長野県松本市

松本城三の丸跡

KOYANAGIMACHI

小 柳 町

—第2次発掘調査報告書—

2009.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成19年9月18日～12月18日に実施された松本市大手3丁目84-1、84-2、78-イ-2ほかに所在する松本城三の丸跡小柳町第2次発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は(株)マリモによるマンション建設に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆はⅠ:事務局、Ⅲ-2-(1):小山貴弘、同(2):横井 奏、同(3):三村竜一、同(4)木製品:宮島義和、同(4)骨角器・(6):吉井 理、その他を竹原 学が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記:百瀬二三子
土器・陶磁器接合:白鳥文彦、中澤温子、前沢里江
土器・陶磁器実測・トレース:竹内直美、竹平悦子、中澤温子、八坂千佳
石器実測・トレース:横井 奏
木製品整理・実測・トレース:久根下三枝子
金属製品整理・実測・トレース:洞澤文江
遺構図調整・トレース:荒井留美子
遺物写真:宮嶋洋一
総括・編集:竹原 学
- 5 本書で使用した略号は以下のとおりである。
土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝
- 6 本調査で使用した測量基準点(NS=0,EW=0)の国家座標値はX26300.839,Y-47592.206(世界測地系)である。ただし、第4・5図に示した調査時の測量方眼は任意の方向に設定したものである。また、本書の遺構各図に示した方位は真北を示している。
- 7 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒390-0823長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に収蔵している。

目 次

例言

目次

I 調査の経緯

- 1 調査に至る経過……………1
- 2 調査体制……………1

II 調査の概要

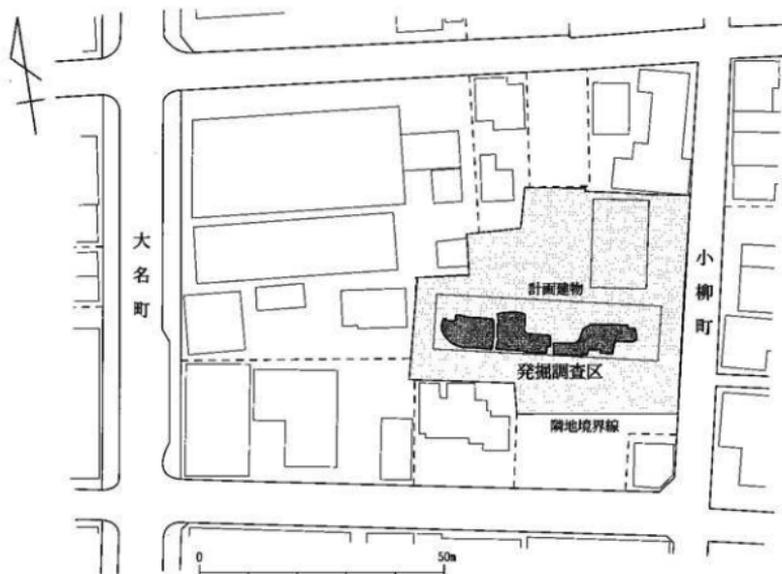
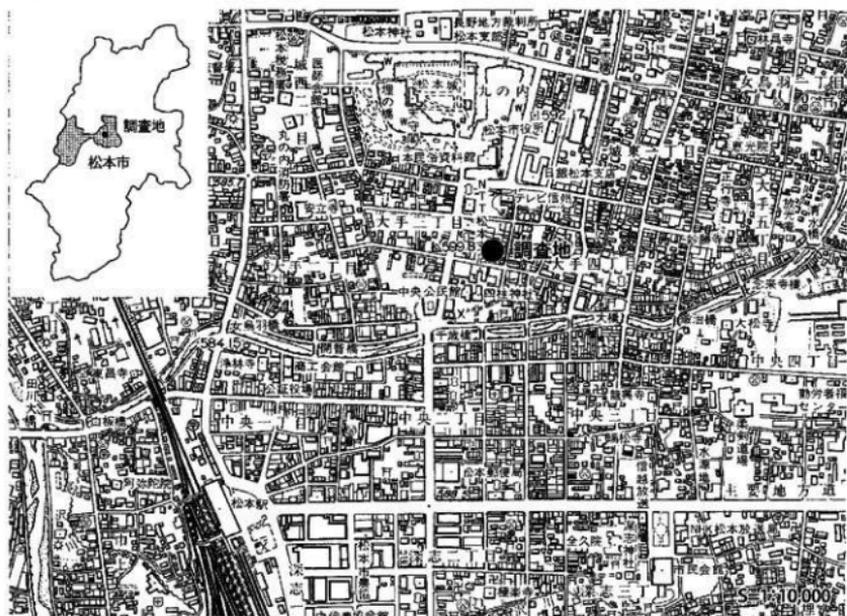
- 1 調査地と遺跡の概要……………2
- 2 調査地の地形と基本土層……………2
- 3 調査方法……………2
- 4 調査成果の概要……………6

III 調査の結果

- 1 検出遺構……………9
- 2 出土遺物
(1) 土器・陶磁器・土製品、瓦……………22
(2) 石器……………55
(3) 金属製品……………57
(4) 木製品・骨角器……………62
(5) 自然遺物……………73

IV 調査のまとめ……………76

写真図版
報告書抄録



第1図 調査地の位置

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

松本城跡は現存する国宝松本城天守・史跡松本城を中心に松本市街地一帯に広がる近世城郭遺跡である。これまで、史跡整備事業や近年の市街地再開発事業などに伴って50箇所におよぶ発掘調査が行われ、多くの遺構・遺物が確認されてきた(第1表)。

こうしたなか、松本市大手3丁目84-1外において、株式会社マリモによるマンション建設事業が計画された(平成19年4月27日付、文化財保護法第93条に基づく届出書)。事業予定地は、松本城三の丸小柳町の武家屋敷跡にあたり、開発事業が実施された場合には埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。このため松本市教育委員会は、平成19年6月5日～6月22日にかけて試掘確認調査を実施した。この結果、開発事業によって埋蔵文化財が破壊されることが明らかとなったため、協議のうえ発掘調査を実施して記録保存を行うこととし、平成19年9月18日付で株式会社マリモと松本市市長菅谷昭との間で当該遺跡に関する発掘調査委託契約を締結して、松本市教育委員会が発掘調査を実施することとした。発掘調査は平成19年9月18日～12月18日に実施し、調査終了後平成19年12月20日付で長野県教育委員会に終了報告書を、また同日付で松本警察署長あてに埋蔵物発見届を提出した。平成19年12月27日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物および現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行い、本報告書を作成するに至った。

2 調査体制

調査団長 伊藤 光

調査担当 竹原 学、小山貴弘、横井 奏、吉井 理

調査員 森 義直

協力者 荒井留美子、飯田三男、井口方宏、入山正男、折井完次、久根下三枝子、沢柳 博、清水陽子、下条ちか子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞澤文江、前沢里江、待井敏夫、宮澤文雄、百瀬二三子、八坂千佳、渡辺順子

事務局 松本市教育委員会 教育部 文化財課

宮島吉秀(課長・～H20.3)、小穴定利(同・H20.4～)、上嶋乙正(部課長)、塩崎 裕(課長補佐・H20.10～)、横山泰基(埋蔵文化財担当係長・～H20.3)、大竹永明(同・H20.4～)、直井雅尚(主査)、関沢 聡(同)、三村竜一(同)、小山高志(主任・H20.4～)、櫻井 了(主事)、柳澤希步(嘱託)

第1表 松本城発掘調査一覧(城下町・開発行為に伴う試掘調査を除く)

No.	調査年度	調査場所	発掘区	調査原因	発掘文献
1	昭和54	二の丸(二の丸御殿)	二の丸1	史跡整備事業	『松本城二の丸御殿跡』
2	昭和55	二の丸(二の丸御殿)	二の丸1	史跡整備事業	『松本城二の丸御殿跡』
3	昭和56	二の丸(二の丸御殿)	二の丸1	史跡整備事業	『松本城二の丸御殿跡』
4	昭和67	二の丸(二の丸御殿)	二の丸1	史跡整備事業	『松本城二の丸御殿跡』
5	昭和58	二の丸(二の丸御殿)	二の丸1	史跡整備事業	『松本城二の丸御殿跡』
6	昭和59	二の丸(二の丸御殿)	二の丸1	史跡整備事業	『松本城二の丸御殿跡』
7	昭和61	二の丸(南階櫓)	二の丸2	中央公園入口公衆電話ボックス設置	『史跡松本城南階櫓付近』
8	昭和61	総堀(西不明門付近)		松本地方事務所・松本保健所跡地整備	立会い調査
9	昭和61	外堀(西外堀)	西外堀1	市道排水路工事	立会い調査
10	昭和62・63	本丸(黒門)	本丸1・2	史跡復原工事	『史跡松本城黒門併形内』 『史跡松本城本丸黒門併形二の門・同袖壁復原工事』
11	昭和63	外堀(北外堀)	外堀1	市道宮新上金井線改良工事	『史跡松本城北外堀外堀土塁』
12	昭和53	三の丸(西馬出し)	西馬出し1	税務署改築	松本市文化財調査報告No.79
13	平成元	三の丸(葵馬場)	三の丸葵馬場1	市道宮新上金井線改良	
14	平成3	外堀(北外堀)	外堀2	市道宮新上金井線改良	『史跡松本城築藩土塁・北外堀外堀土塁』 (文書協が調査・報告)
15	平成3	三の丸(地蔵清水井戸)	地蔵清水井戸	遺構確認調査	『地蔵清水井戸跡』
16	平成3	三の丸(土居戻)	土居戻1	市営大庁駐車場建設	
17	平成3	三の丸(西馬出し)	西馬出し2	丸の内消防移築	
18	平成3	三の丸(作事所)	作事所1	市道宮新上金井線改良	
19	平成3	三の丸(柳町)	柳町1	市役所東庁舎別棟新築	
20	平成3	二の丸	二の丸3	松本城400年祭開催	
21	平成2・3	二の丸(太鼓門)	二の丸4	太鼓門石垣改修工事	『史跡松本城二の丸太鼓門併形』 『史跡松本城太鼓門併形』
22	平成3	総堀(東総堀)		市道宮新上金井線改良	『史跡松本城東築藩土塁・北外堀外堀土塁』 (調査者:文書協)
23	平成4	本丸	本丸3	松本城管理事務所改築	
24	平成4	三の丸(作事所)	作事所2	中央公園公衆トイレ移築	
25	平成4	総堀(北総堀土塁)	総堀1	市道宮新上金井線改良	
26	平成4	二の丸	二の丸5	松本城400年祭開催	
27	平成8	三の丸(小柳町)	小柳町1	商業施設(映画館)建設	
28	平成8	外堀(南外堀)	外堀3	遺構確認調査	
29	平成11	総堀(西総堀土塁)	総堀2	市道四環線改良	
30	平成12～13	三の丸(土居戻)	土居戻2	中央地区公民館移築	
31	平成13	外堀(北外堀)	外堀4	石垣復原工事	
32	平成13	外堀(北外堀)	外堀5	石垣復原工事	
33	平成14	二の丸(東北隅櫓及び土塀)		史跡整備事業	松本市文化財調査報告No.197
34	平成14～15	二の丸(東北隅櫓及び土塀)	二の丸6	史跡整備事業	松本市文化財調査報告No.197
35	平成15	三の丸(十層戻)	土居戻3	事務所改築	
36	平成15	三の丸(柳町)	柳町2	事務所兼個人住宅改築	
37	平成15	総堀(東総堀)		史跡修復工事	松本市文化財調査報告No.186
38	平成15	三の丸(十層戻)	土居戻4	事務所兼個人住宅改築	
39	平成16	総堀(東総堀)		史跡修復工事	松本市文化財調査報告No.186
40	平成16	二の丸(東北隅櫓及び土塀)	二の丸7	史跡整備事業	松本市文化財調査報告No.197
41	平成17	二の丸(東北隅櫓及び土塀)	二の丸8	史跡整備事業	松本市文化財調査報告No.197
42	平成17	三の丸(大名町)	大名町1	店舗建設	松本市文化財調査報告No.184
43	平成18	総堀(西総堀土塁)	西総堀土塁1	史跡整備事業	確認調査、本報告書
44	平成18	内堀(南内堀)	内堀1	史跡整備事業	確認調査
45	平成18	外堀(南外堀)	南外堀2	史跡整備事業	確認調査
46	平成18	築堀土塁	築堀土塁1	個人住宅建設	重要遺跡確認調査
47	平成18	総堀(東総堀土塁)		地区公民館建設	重要遺跡確認調査
48	平成19	三の丸(小柳町)	小柳町2	マンション建設	
49	平成19	外堀(西外堀)	西外堀2	史跡整備事業	確認調査
50	平成20	総堀(西総堀土塁)	西総堀土塁2	史跡整備事業	確認調査、本報告書
51	平成20	内堀(西内堀)	内堀2	史跡修復事業	
52	平成20	三の丸(土居戻)	土居戻5	店舗業共同住宅	西総堀土塁確認調査

Ⅱ 調査の概要

1 調査地と遺跡の概要

今回の調査地は松本城三の丸の南東部にあたる。ここには三の丸の中央を南北に貫く大名町通りから東に約100m、近世以来小柳町と称する通りがある。小笠原貞慶による女鳥羽川以南の城下町整備以前、すなわち深志城の時代において、現在の市役所周辺の大柳町から小柳町までの一帯は泥町と呼ばれる町人町として賑わい、藩政時代の小柳町は中級武家地が連なっていた。ちなみに松本藩家中附によると、戸田氏時代の小柳町には22家の屋敷が存した。その禄高は3石～400石、うち諸士は65石～400石の13家で主に中級武士が住まう地域であった。今回の調査地点は通りに面した西側一帯で、対象となる敷地は南北45m×東西54m、現況は飲食店建物とその駐車場である。これを「享保十三年秋改松本城下図」にあてはめると、現況道路は絵図とよく整合し、調査地は小柳町に東面する志賀治左衛門の屋敷地から南中小路に面する板橋竹左衛門の屋敷地裏手に及んでいることがわかる(第2図)。

これらのことから、今回の調査では泥町時代の遺構確認と松本城時代の屋敷割境界遺構の確認と絵図との整合性の検討が主要な目的となった。

2 調査地の地形と基本土層

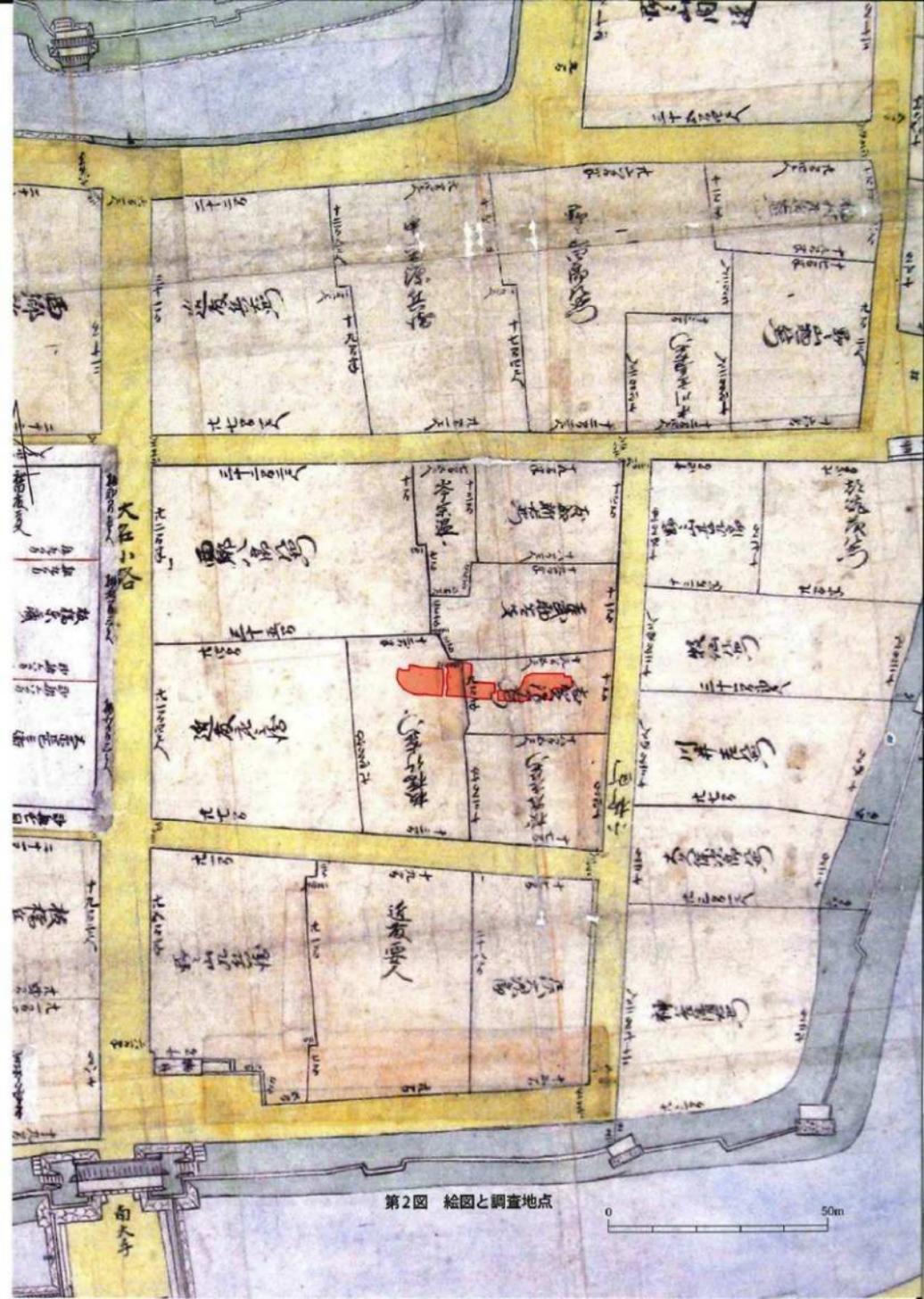
調査地付近の旧地形は基本的に北高南低であり、地山である女鳥羽川起因の粘質土・シルト質土は緩い傾斜面をなす。しかし東西方向においては複雑で、地山面は平坦面をなさず、B区を底とし東西で高い窪地状地形をなしている。この地形の形成要因はわからないが、C区においてはむしろ北側で深く、それを覆う整地土各面も一様に窪み水平面をなしていない。従ってこの部分では明確な遺構も見当たらない。なお、この地山表面は旧表土と考えられる腐植したアシ・ヨシなどの繊維を多く含むシルトが覆っており、窪地の形成要因が城郭整備による人為的な掘り下げによるものではないことは明らかである。

地山面を最大2m近く覆う土壌は、すべて戦国時代末期～現代までの整地客土層である。その基本構成は、現地表から-1mまでが砕石等現代の客土、以下-1.4mまでが明治・大正期の建物の攪乱・パイル杭等建築基礎構造物および客土、それ以下が明治初期以前の整地土層である。整地土層は上位から第1検出面(19C前葉～中葉)、第2検出面(19C前葉)、第3検出面(17C)、第4検出面(16C後葉～17C前葉)が確認されるが、2検と3検の間にはギャップがある。またB区の屋敷境遺構を挟み東西で武家地が異なるため、整地面の形成時期は必ずしも同時とはいえない。従って同遺構より西側を西〇検、東側を東〇検と呼称して遺構・遺物の所属を区別した。なお、C区の東側のみ存する粘質土層(第20・28～30層)は4検以前の古い整地土の可能性もあるが、その時期・性格は明らかにならなかった。

3 調査方法

開発対象地内には南北2棟の集合住宅棟の建設が予定された。うち、北棟は現飲食店建物上にあり、その建設時及びそれ以前に存した地下重油タンクによって遺構が破壊されていることが判明している。従って、今回は南棟が予定される現駐車場を対象に5箇所の試掘トレンチ調査を実施し、大半の地点で上層は破壊を受けるものの、下層に近世の整地層および遺構が存することを確認した。

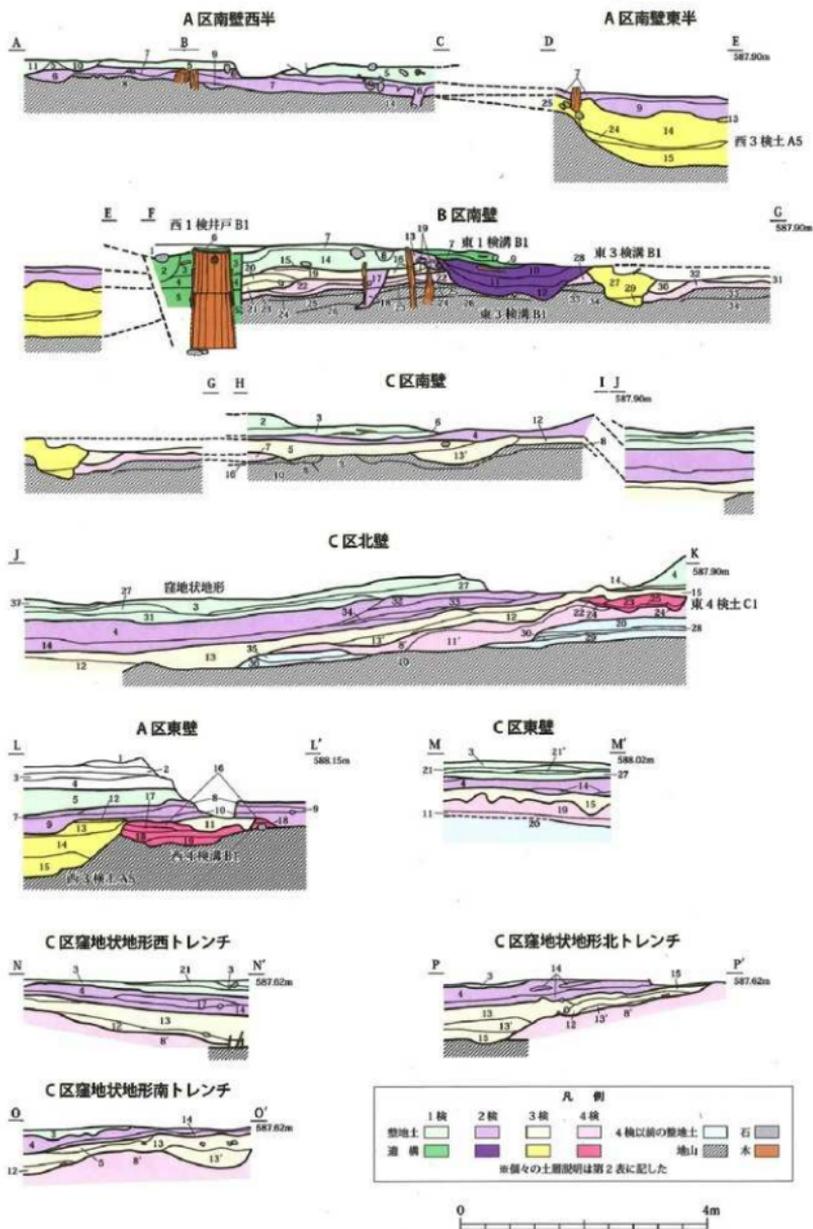
そこで、今回の調査は南棟建設部分から下水管の敷設部分を除いた約650㎡を面的に調査することとし、現飲食店が営業を継続していることから3回に分けて実施した。これを便宜上A・B・C区としている。それぞれの地点では遺構面までの掘削はバックホーを用い、B・C区では旧飲食店建物の鉄筋コンクリート基



第2圖 絵圖と調査地点

0 50m

南大手



第3図 調査区土層断面

礎が縦横に走っていたため油圧ブレーカでこれを破壊し撤去した。これら上層の攪乱により、C区では江戸後期～明治期の生活面は非常に残りが悪く、実質的な調査は不可能であった。

最終的に各調査区では4面の検出面を確認し、B区では南北に走る屋敷境遺構が生活面を東西に分断していることが判明した。調査は上層の生活面から順次行い、基本的には人力で整地土層を掘り下げた。また、最深部は地表下3m近くまで及んだため、安全確保上調査範囲を狭くした。各面の遺構等の記録は、松本城二の丸御殿跡に設置済みの国家座標基準点より導いた仮設点を原点に、任意方向の3m方眼を設定して行った。なお、基準点NS=0,EW=0の座標値はX26300.839,Y-47592.206(世界測地系)である。

4 調査成果の概要

調査期間 平成19年9月18日～12月18日

調査面積 702㎡(1～4検のべ調査面積)

検出遺構

西第1検出面(19C前葉～中葉※)

井戸(埋設桶) 3基

水道(竹管) 2基

西第2検出面(19C前葉)

土坑 1基

西第3検出面(17C)

土坑 4基

西第4検出面(16C末葉～17C前葉)

土坑 3基

ピット 6基

溝状遺構 2基

東第1検出面(19C前葉～中葉)

杭列 1基

溝状遺構 1基

東第2検出面(19C前葉)

土坑 1基

溝状遺構 1基

東第3検出面(17C)

土坑 5基

ピット 3基

集石 1基

溝状遺構 1基

東第4検出面(16C後葉～17C前葉)

土坑 3基

1検から3検にまたがる遺構

屋敷境遺構

※遺構と検出面の年代は必ずしも一致しない。

出土遺物

土器：灯明皿・搦鉢・内耳鍋・焙烙鍋・涼
炉・焜炉等

瓦器：火鉢・植木鉢等

石器：蓋・搦鉢・急須・風炉

陶器：碗・天目茶碗・皿・蓋・仏飯具・餌
猪口・向付・片口鉢・植木鉢・搦鉢・
灯明受皿・香炉・火鉢・神酒徳利・
徳利・壺・茶入・小瓶・瓶・花瓶・
水注・土瓶・壺・鍋・行平鍋・水滴・
双六駒等

軟質施釉陶器：蓋・皿・鉢等

磁器(青磁・白磁・染付)：碗・小杯・蓋・
仏飯具・皿・蕎麦猪口・鉢・段重・
香炉・急須・瓶・徳利・仏花瓶・水
滴・蓮華・紅猪口等

土製品：ミニチュア

瓦：丸瓦・平瓦・棧瓦・袖瓦

石器：硯・石盤・砥石・火打石等

鉄製品：柄付刃物・釘・塵取り・鎖・鍋等

銅製品：キセル(雁首・吸口)・ジョウロ・
把手・吊金具・刀具・切羽・小柄・
箆筒錠・目貫・針金・銭等

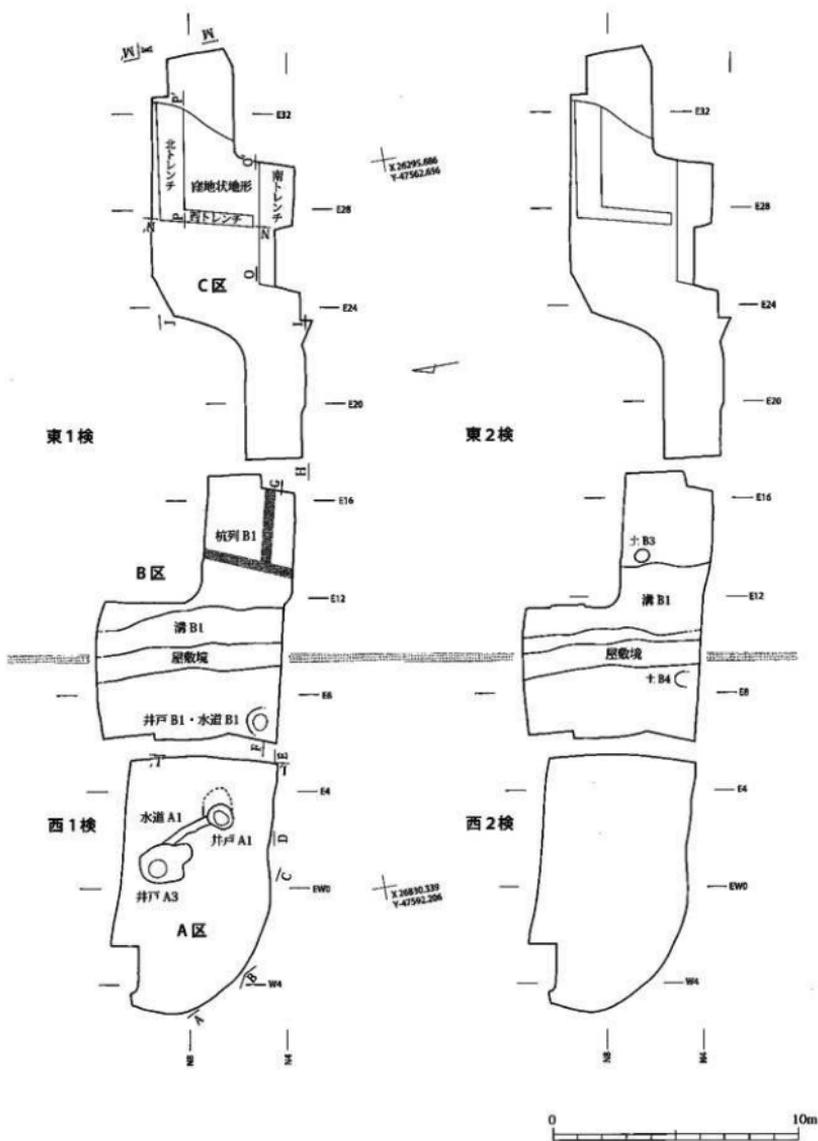
木製品：漆椀・漆椀蓋・蓋・栓・狭匕・匙・
箸・杓子・傘・曲物・柄杓・指物・
円板・下駄・躰・都知・荷札・紐
締め具・人形・鍬等

骨角器：櫛払・笠鞆・篋等

自然遺物：種子・動物骨

1 検

2 検



第4図 遺構配置 (1)

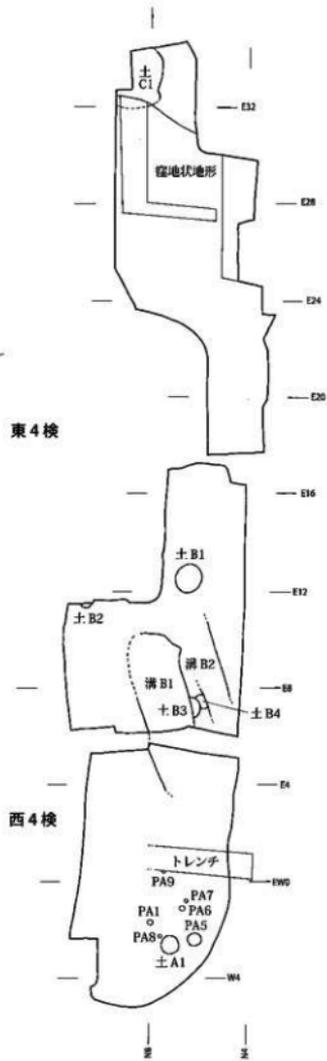
3 検

4 検



東 3 検

東 4 検



西 3 検

西 4 検



第 5 図 遺構配置 (2)

Ⅲ 調査の結果

1 検出遺構（第2表・第3～12区）

B区中央に存する屋敷境遺構を境に、それより西側、「享保十三年秋改城下図」に記される板橋竹左衛門屋敷地の調査面を西1～4検、東側、志賀治左衛門屋敷地を東1～4検とした。屋敷地が異なるため、それぞれの検出面は必ずしも同時に構築されたわけではないが、概ね対応はしている。

(1) 西第1検出面（19C前葉～中葉）

屋敷地裏手にあり、西から東に向かいゆるく傾斜する低地となっている。そのため、井戸・水道などの遺構が集中的に検出された。しかし、建物跡や塵芥廃棄土坑（ゴミ穴）はほとんど検出されなかった。

井戸 南東から北西方向に3～4mの間隔を置いて3基の井戸跡が検出された。井戸A3は元々掘り抜き・石積みみの井戸であつたらしく、最終段階で桶枠・自噴式の井戸に改修されているようである。井戸A1も数回の改修を経て最終段階で桶1段の埋設による自噴式の井戸となったようである。井戸A3の桶枠は腐食が激しく、井戸A1より早くに放棄されたと考えられる。井戸A1は桶内部に廃棄された遺物から明治初期まで継続使用されたと考えられる。井戸B1は2段重ねの桶枠井戸で2段目以下は掘り抜きになっている。上面は粘土で密封された桶底板で閉じられ、外縁の1箇所に方形の通気孔が切り抜かれる。そのため井戸内部は上端から2mまでは空洞の状態であった。桶上部側面には竹管が挿入されている（水道B1）ので、ここから南側に送水されたもの推定される。

水道（竹管） 2基が検出された。いずれも竹管である。水道A1は井戸A1とA2の間を連絡するもので、長さ2.1mの一本物である。溝状の掘り方に粘質土で埋設した後、小礫で覆っている。勾配は1:0.12で井戸A2側が低い。竹管は両井戸の桶枠に直接連結せず、直前で切れているため、両井戸の最終段階では既に放棄されていたと考えられる。水道B1は上記のように井戸B1上部に接続し、南側調査区外に延びるものである。桶との接続部は短い木製の管を挟んで密封・固定する。

(2) 西第2検出面（19C前葉）

本検出面の段階は、下層の3検段階とは時期的な開きが大きく、その間をつなぐ古い整地（生活）面を削平したか、あるいは2検段階まで整地による生活面の上昇は顕著でなかったものと考えられる。

土坑 A区においてこの検出面は判然としない。検出遺構はB区屋敷境西側から覆土内に礫を含む円形の土B4が検出されたのみである。

(3) 西第3検出面（17C）

本検出面は土坑A5・B9以西では地山面が上昇するため整地土はほとんど形成されない。出土遺物からみた遺構の帰属時期には幅がある。

土坑 A区からB区にかけて4基の土坑が集中する。いずれも底面は地山を掘り込む。A区南東の土A3・5・7は土A5→土A3→土A7の前後関係で切り合う。土A3は浅い溝状を呈し、土A5と重なる東縁には細い木材を横たえる。土A5は大型で深く掘り込まれる土坑である。全形はわからないが、北東隅が張り出し、一辺2.5m以上の隅丸方形を呈するものと推定される。覆土上面には木材、中層には植物繊維を多量に含んだ間層が見られた。また覆土中から陶磁器類のほか、管・鋏等の木製品が出土した。土A7は2段に掘り込まれる円形土坑で、埋土中に20cm前後の礫が多い。鍍金を施したキセル吸口が出土した。土A5・A7は17C

中葉～後葉に位置付く。土B9は5.3×2.2mの長方形を呈するが、南壁のみ屈曲する。この長軸方位は屋敷境遺構とは斜交し、むしろ4検の溝B1・B2と共通する。底面は平坦だが特に硬化面や内部施設は見られない。遺物は底面付近から一括性の高い陶器（天目茶碗、志野向付、黄瀬戸皿、灰釉皿）、土器（灯明皿）、漆碗蓋、曲物、下駄、キセル、釘等が得られ、土器・陶磁器類は概ね16C末～17C前葉のものが主体である。

(4) 西第4検出面（16C後葉～17C前葉）

土坑 この検出面では後に触れる屋敷境遺構が存在しないため、厳密には東西の検出面の区別はない。検出された3基はいずれも円形土坑である。なお、土A1は遺物から見て3検段階に帰すべき遺構と考える。

ピット 土A1付近に6基の円形ピットがある。いずれも単独で建物等を構成しているものではない。これらは土A1同様、上位の検出面に帰属する遺構の可能性もある。

溝状遺構 B区の屋敷境遺構直下より2条が検出された。溝B1は3検土B9に西接し、掘り込み上部をわずかに切られる。形態は長辺6.5m以上の長方形を呈すると考えられ、西端を3検土A5に切られる。遺物は土器（灯明皿）、銅製品（刀具）、木製品（下駄・鉢・傘等）が出土している。形態や軸方位等のあり方は3検土B9との共通点が多く、連続的に構築された遺構の可能性が高い。いずれも堅穴状遺構と呼称すべきものかもしれない。溝B2は溝B1の西に並走するが、3検土B9や本検溝B1に比すと幅が狭い形態である。これら3基の遺構は、そのあり方に強い近似性が認められ、短い時間幅の中で連続的に構築されたものと考えてよいであろう。

(5) 東第1検出面（19C前葉～中葉）

杭列 B区東半部で検出された。この付近は細い角杭が集中しているが、それらの中に東西方向に2列平行かつ直線的に連なるものがある。西側では列間に木材が横たわっていた。またこれと直交方向に東に向けて直線的に連なる列もある。全体としてT字状に杭の集中が見られる。

溝状遺構 屋敷境遺構に併走する溝B1がある。幅1～1.5mで浅い掘り込みを有し、屋敷境に東接する側溝と捉えられる。覆土中には土器（灯明皿等）・陶器（皿・急須・鍋・蓋等）・磁器（碗・小杯・皿・蓋等）、石器（硯、石盤・砥石・火打石等）、金属製品（キセル吸口・箆筭錠・鍋・刀具等）、木製品（漆碗・蓋・栓・柄杓・円板・下駄等）および木片等が多量に含まれ、塵芥の廃棄場として二次利用された状況が窺える。とりわけ北寄りの底面には鉄鍋が木蓋を被せた状態で正位に据えられ、それに蓋の上には箆筭錠が置かれるように存していた。単純な廃棄とは捉えにくい状況であった。本遺構から出土した陶磁器類は19C前葉～中葉のものが主体的に見られるが、下層の2検溝B1の遺物が混入するので19C中葉、おそらく明治期に至ってから埋没したものと捉えられる。

(6) 東第2検出面（19C前葉）

西第2検出面と同様、本検出面も下層の3検段階とは時期的な開きがあり、古い整地（生活）面を削平したか、あるいは新たな客土がほとんど行われなかったものと考えられる。

土坑 円形で掘り込みの深い土B3がある。

溝状遺構 屋敷境の側溝として溝B1が検出された。幅2.9m、深さ0.6mを測り、1検溝B1と比較して大型である。覆土内には1検溝B1と同様、多量の陶器（碗・皿・播鉢・土瓶・德利・仏花瓶等）、磁器（碗・小杯・皿等）、石器（硯・砥石・火打石）、金属製品（キセル雁首・吸口等）、木製品（漆碗・栓・匙・膳・荷札等）が含まれており、19C前葉の短い時間幅で塵芥の廃棄が行われたと考えられる。

(7) 東第3検出面 (17C)

土坑 B区東部に集中して5基が検出された。土B3・B5・B10は浅い円ないし楕円形の堀込みを有する。土B6は全形不明で、集石B1に切られる。南縁部は直線的に延びており、溝状遺構かもしれない。土B7は溝B1に切られる。

ピット B区の土坑群周辺から2基の円形ピットが検出された。また、C区東壁下からは栗石状に小角礫が詰まった浅い皿状の円形ピットが検出された。

集石 B区東部から浅い掘り方を有し、覆土上面に拳大以下の礫が集中する集石B1が検出された。北部が調査区外に広がり西部も溝B1に切られるため全形は不明だが、掘り方は整然とした方形を呈している。礫の集中は東側の掘り方外にまで広がり、中央部に木材が横たわる。銅製品(小柄)が出土している。

溝状遺構 3検からも屋敷境に並走する溝B1が検出された。1・2検に比べ屋敷境からはやや距離を置く。幅1.2×深さ0.6mで、覆土中の遺物はきわめて少なく詳細な時期を特定できない。

(8) 東第4検出面 (16C後葉～17C前葉)

土坑 3基が検出された。土B1はすり鉢状の円形土坑である。内部には木片が多く含まれ、塵芥廃棄坑と考えられる。遺物は木製品(漆碗・柄杓・蓋等)が多い。土C1は隅丸方形を呈し、一辺2.5m以上を測る。底面は軟弱だが平坦な床状を呈し、竅穴状遺構とすべき形態である。底面直上は薄い炭層に覆われ、東壁にもたれかかるように内耳納の大形破片が遺存していた。他に覆土中から土器(灯明皿)、陶器(志野碗、搦鉢等)の破片が出土、16C末～17C前葉の資料を得た。

(9) 屋敷境遺構

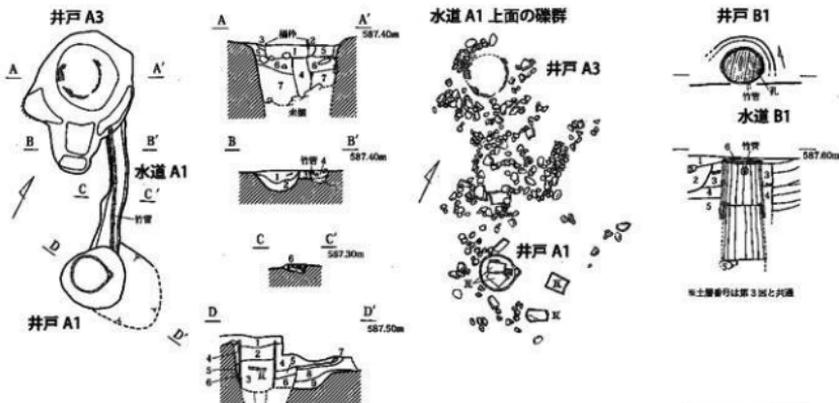
B区中央から享保13年秋改松本城下図の記載に一致して、南北方向に延びる屋敷境遺構が検出された。4本の断ち割りトレンチでの断面観察の結果、本遺構は土止め板・杭を伴った土手状を呈するものであったことが判明した。その構築過程は、3検段階においてシルト、粘質土を版築状に盛って構築され、東西の武家地の整地・客土に対応して数回の改修が行われている。その過程において、西3検段階において西側に土止めの杭列が設けられている。杭は5～8cm程の芯持ち材を一列に密に打ち込む。

3検段階から2検段階は出土遺物から窺われる整地層の形成時期に大きな隔りがあり、本来はその間を埋める数面の整地(生活)面が存していたものと推察される。従って2検段階では古い整地地面を削平して大規模な改修を行っているものと考えられ、屋敷境も上部は改変を受けている可能性が高い。しかし、平面的な位置は変化しておらず、屋敷割そのものの変更はこの間行われなかったと考えられる。2検段階の改修では屋敷境の東側、溝B1に面して土止め板が設けられている。土止め板は削り材・角材や芯持ち材で太さ10～15cmの杭を矢板のように密に一列に打ち込んで固定している。

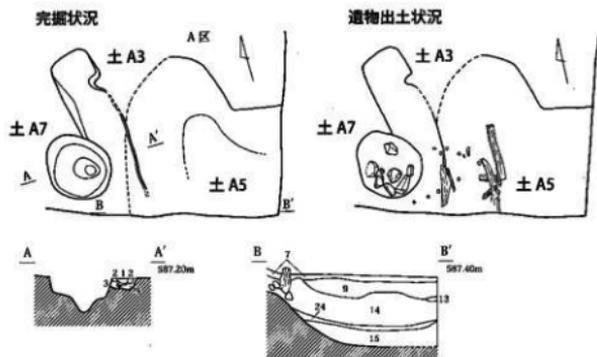
最終的に1検段階では土止め板は埋没し、溝B1は浅く幅の狭いものに移行する(改めて構築されたものか)。遺構の上面には建築材等再利用木材が横たえられ、部分的に円礫を敷き詰めている。また横たえた木材に沿って細い杭や長さ1mを超える太い角杭が列状に打ち込まれている。この1検段階において屋敷境はその役目を終え、この後明治以降の客土で厚く覆われる。

なお、屋敷境の地上構築物は残存せず不明である。一般的に武家地の屋敷境には生垣や堀溝、塀等が多く見られるといわれるが、本址では上述の1検段階における根太状の木材やそれに伴う杭列の存在から、これらを基礎とした塀が存在していた可能性が高い。東1・2検では上述のように屋敷境に沿って溝状遺構が存在した。これらは覆土の堆積状況から水を湛えた溝としてはほとんど機能しておらず、専ら塵芥廃棄場として利用され埋没している。

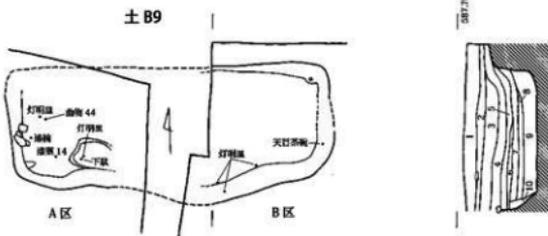
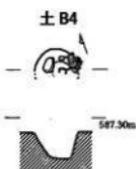
西1 検の遺構



西3 検の遺構

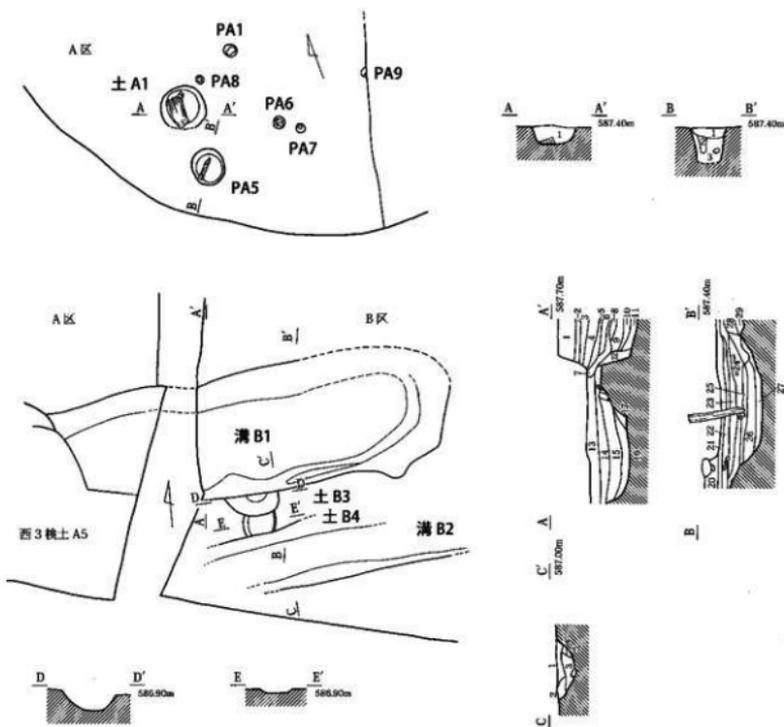


西2 検の遺構

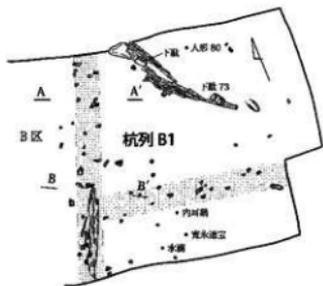


第6図 検出遺構 (1)

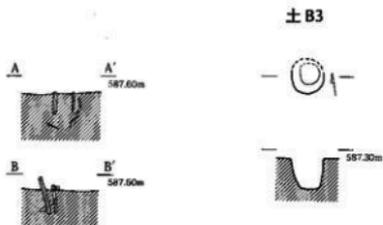
西4検の遺構



東1検の遺構

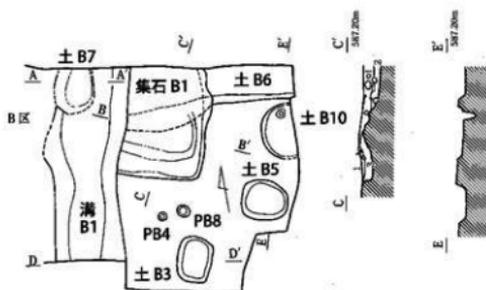


東2検の遺構

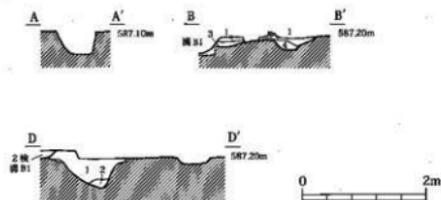
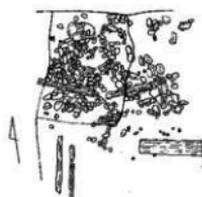


第7図 検出遺構 (2)

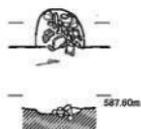
東 3 検の遺構



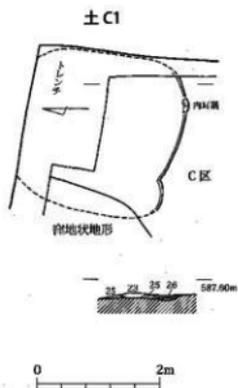
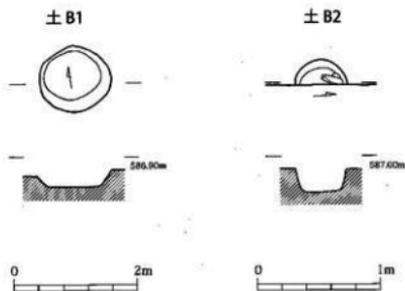
集石 B1 礫出土状況



PC1

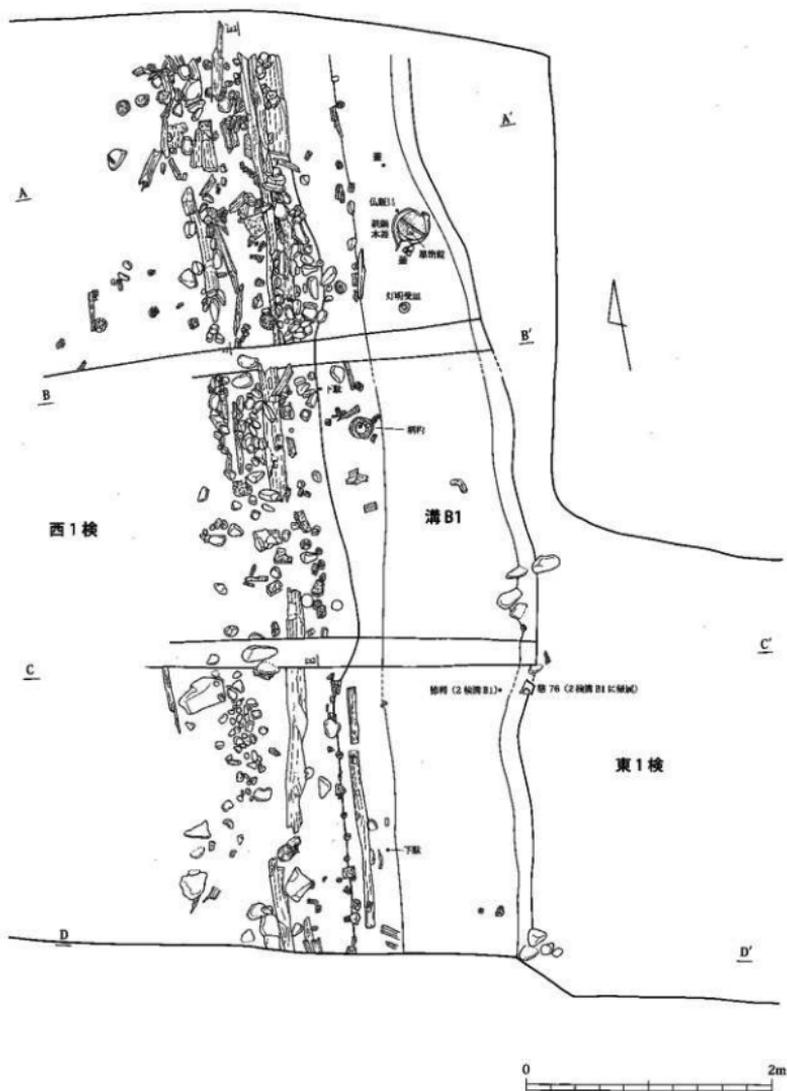


東 4 検の遺構



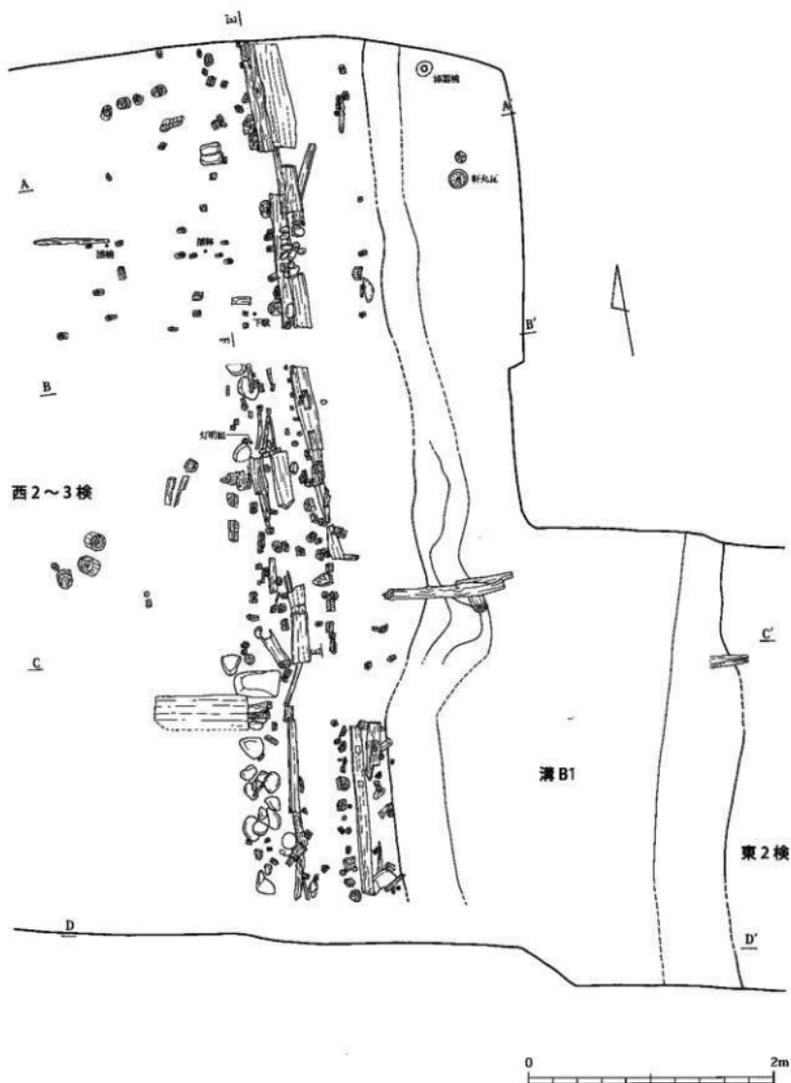
第 8 図 検出遺構 (3)

屋敷境遺構 (1棟)



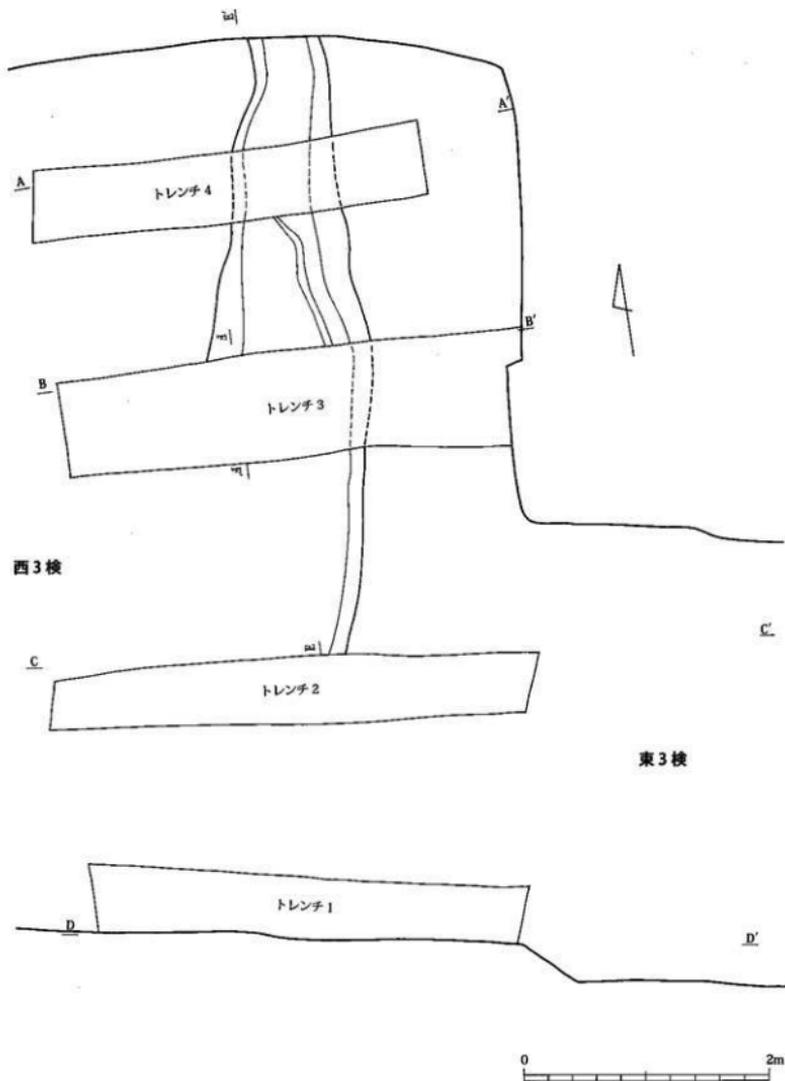
第9図 検出遺構 (4)

屋敷境遺構 (2~3 検)

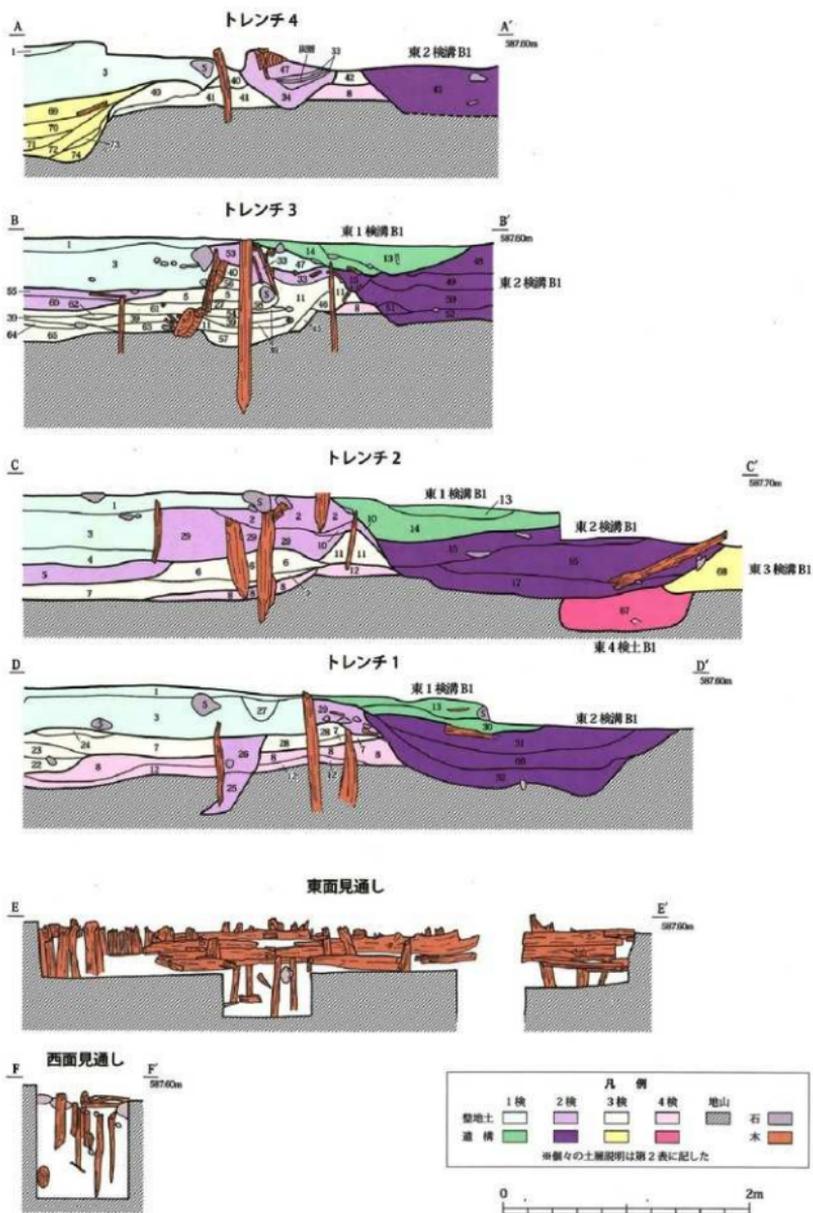


第10図 検出遺構 (5)

屋敷境遺構 (3 棟)



第11図 検出遺構 (6)



第12図 検出遺構 (7)

位置	土質	性状	含有物	備考
	18	暗褐色粘質土	灰色砂塊混入 $\phi 0.5 \sim 3mm$ 、木片少量	第4種粘土
	19	暗褐色粘質土	灰色砂塊混入 $\phi 0.5 \sim 10mm$ 、黑色土塊 $\phi 0.5 \sim 1cm$ 多量、 $\phi 5 \sim 7mm$ 石類植物繊維少量、木屑	第4種以上の膠状土
	20	暗褐色粘質土	新膠泥、植物繊維少量	第4種膠泥
	21	暗褐色粘質土	砂に灰色土多量、黒色土塊 $\phi 1$ 少量	第4種以上の膠状土
	22	暗褐色粘質土	灰色砂塊 $\phi 1 \sim 3mm$ 少量、泥炭層	第4種粘土C1層土
	23	暗褐色粘質土	黒炭層	〃
	24	暗褐色粘質土	灰色土塊少量	〃
	25	暗褐色粘質土	灰砂少量、木片少量	〃
	26	暗褐色粘質土	新膠泥	〃
	27	暗褐色土	灰色粘土塊少量、褐色土塊少量、新膠泥、木屑少量	第1種粘質土
	28	暗褐色粘質土	灰色土塊少量、木屑少量	第4種以上の膠状土
	29	暗褐色粘質土	黒褐色土塊少量、木屑少量	第4種以上の膠状土
	30	灰色粘質土	黒褐色土塊少量、木屑少量	第4種以上の膠状土
	31	赤灰色砂層	砂	第1種粘質土
	32	暗褐色土	灰色砂粒少量、木屑少量、泥炭層	第4種粘土
	33	黒褐色土	灰色土塊少量、木屑少量、 $\phi 1 \sim 3cm$ の膠状土	〃
	34	暗褐色土	木屑少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ の膠状土	〃
	35	暗褐色粘質土	褐色土塊少量、灰色土塊少量、木屑少量	第4種以上の膠状土
	36	暗褐色粘質土	褐色土塊少量、灰色土塊少量、黒褐色土塊少量、木屑少量	第1種粘質土
	37	暗褐色粘質土	褐色土塊少量、木屑少量	第1種粘質土
西1橋遺構 (第6区)				
西1橋南側 A1 D-D'	1	暗褐色土	褐色土塊少量、黒褐色土塊少量、 $\phi 1 \sim 10mm$ 膠泥	粘土
	2	暗褐色粘質土	新土塊少量、灰土、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	〃
	3	暗褐色粘質土	灰褐色土塊中少量、 $\phi 1cm$ 土塊少量、木屑少量	〃
	4	暗褐色粘質土	$\phi \sim 20mm$ 膠状土、灰色土塊 $\phi \sim 10mm$ 少量	粘土
	5	暗褐色粘質土	新土塊少量、植物繊維少量	〃
	6	暗褐色粘質土	新土塊少量、植物繊維少量	〃
	7	暗褐色粘質土	暗褐色土塊植物繊維少量	灰土層 A6層土
	8	暗褐色粘質土	灰色土塊少量	〃
西1橋南側 A3 A-A'	1	暗褐色粘質土	砂 $\phi \sim 50mm$ 多量、灰色土塊少量	粘土
	2	暗褐色粘質土	木屑少量、褐色土塊少量、 $\phi 1 \sim 10cm$ 膠泥	粘土
	3	暗褐色粘質土	灰色土塊少量、灰色土塊少量	粘土
	4	暗褐色土	灰色土塊少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	粘土
	5	暗褐色粘質土	灰色土塊中少量、灰色土塊少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	粘土
	6	暗褐色粘質土	灰色土塊中少量、 $\phi 1 \sim 10cm$ 膠泥、粘土塊少量	粘土
西1橋南側 A3 B-B'	1	暗褐色粘質土	灰色土塊中少量、褐色土塊少量、 $\phi 1 \sim 10cm$ 膠泥、木屑少量 (A統)	灰土層 A3層土
	2	暗褐色土	灰色砂塊少量、木屑少量	灰土層 A3層土
	3	暗褐色土	暗褐色土塊少量、木屑少量	竹管埋方型土
	4	暗褐色土	灰色土塊少量、 $\phi 1 \sim 4cm$ 、黒褐色土塊少量	〃
	5	暗褐色土	灰色砂塊少量	〃
	6	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量	竹管埋方型土
西1橋南側 A1 C-C'	竹管埋方型土	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量	竹管埋方型土
	竹管埋方型土	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量	竹管埋方型土
西1橋南側 A1 C-C'	竹管埋方型土	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量	竹管埋方型土
西1橋南側 A1 C-C'	竹管埋方型土	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量	竹管埋方型土
西1橋南側 A1 C-C'	竹管埋方型土	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量	竹管埋方型土
西3橋遺構 (第6区)				
西3橋土 A3 A-A'	1	暗褐色粘質土		粘土
	2	暗褐色土	灰色砂粒少量	〃
	3	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量、木屑少量	〃
	4	暗褐色土	灰色砂粒 $\phi 1 \sim 2mm$ 少量	〃
西3橋土 A3	1	暗褐色土	灰色砂粒 $\phi \sim 20mm$ 少量	〃
	2	暗褐色粘質土	$\phi \sim 10cm$ 膠泥、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥	粘土
	3	褐色土	$\phi \sim 10cm$ 膠泥、褐色土塊少量、灰色土塊少量	〃
	4	暗褐色土	木屑少量、灰色土塊少量、褐色土塊少量	〃
	5	褐色土	木屑少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	〃
	6	暗褐色粘質土	$\phi \sim 10cm$ 膠泥、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥、木屑少量	〃
	7	暗褐色粘質土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	8	暗褐色土	木屑少量、 $\phi \sim 5cm$ 膠泥	〃
	9	褐色土	木屑少量、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥	〃
	10	暗褐色粘質土	暗褐色土塊少量、褐色土塊少量	〃
西4橋遺構 (第7区)				
西4橋土 A1	1	暗褐色土	灰色土塊 (塊) $\phi \sim 100mm$ 多量、植物繊維少量、砂 $\phi \sim 30mm$ 少量	粘土
	2	暗褐色土	暗褐色土塊少量、木屑少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	〃
	3	暗褐色粘質土	木屑少量、新土塊少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	〃
西4橋溝 A-A'	1	暗褐色土	砂層、 $\phi 1 \sim 10mm$ 膠泥、 $1cm$ 未満の小塊少量、褐色土塊少量	粘土
	2	暗褐色土	$\phi \sim 5cm$ 膠泥、木屑少量、 $\phi 1 \sim 5cm$ 膠泥	第3種土砂層土
	3	暗褐色粘質土	$\phi \sim 10cm$ 膠泥、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥	〃
	4	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量、褐色土塊少量	〃
	5	暗褐色粘質土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	6	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	7	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	8	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	9	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	10	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	11	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量、褐色土塊少量	〃
	12	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	13	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	14	暗褐色粘質土	木屑少量、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥、褐色土塊少量、褐色土塊少量	粘土
	15	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量、褐色土塊少量	〃
	16	暗褐色粘質土	木屑少量、褐色土塊少量、褐色土塊少量	〃
	17	暗褐色粘質土	褐色土塊少量、 $\phi \sim 5cm$ 膠泥	〃
西4橋溝 B1 B-B'	18	暗褐色粘質土	木屑少量、暗褐色粘質土中少量、褐色土塊少量	〃
	19	暗褐色土	木屑少量、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥	〃
	20	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	21	暗褐色土	木屑少量、褐色土塊少量	〃
	22	暗褐色土	木屑少量、 $\phi \sim 5cm$ 膠泥	〃
	23	暗褐色土	木屑少量、 $\phi \sim 10cm$ 膠泥	〃

位置	土種名	土色	含有物	備考
東4検遺構 (第8回)	24	粘褐色土	灰土多量、褐色土塊少量	#
	25	灰色砂質土	灰褐色土塊中少量	#
	26	暗褐色土	木屑微量、黒色土塊少量	#
	27	暗褐色土	木屑中量、灰色土塊少量	#
	28	暗褐色土	灰褐色土塊中少量、赤褐色土塊中少量、黒色土塊中少量	西4検遺構土
	29	灰褐色粘質土	赤褐色土塊少量、木屑少量	#
	30	暗褐色粘質土	赤褐色土塊少量、木屑少量	#
	1	暗褐色土	褐色土塊中量、木屑多量	層土
	2	粘褐色土	褐色土塊少量、木屑微量	#
	3	暗褐色土	灰色土塊少量、褐色土塊少量	#
4	暗褐色土	灰色土塊少量	#	
5	灰色砂	暗褐色土塊中量	#	
東3検遺構 (第8回)				
東3検遺構	1	暗褐色土	灰色砂中量、赤褐色少量	層土
	2	暗褐色粘質土	灰色砂少量、灰少量	層土と砂層土
	3	暗褐色粘質土	暗褐色粘質土塊少量	層土
東4検遺構 (第8回)				
屋敷境遺構 (第12回)				
西側A-C	1	暗褐色土	褐色土多量、赤褐色少量、 $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の礫少量	西1検遺構土
	2	暗褐色土	褐色土塊少量、灰、灰土少量	西側A検遺構土 (2検遺構土に対応)
西側B-D	3	暗褐色土	灰色砂少量、褐色粘質微量、赤褐色、微土粒少量、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の礫少量	西2検遺構土
	4	灰色砂質硬土	#	#
東側A-C	5	暗褐色土	灰色砂微量、木屑多量、灰微量	西2検遺構土
	6	灰色砂土	木屑少量、灰微量	西側A検遺構土 (2検遺構土に対応)
東側D	7	暗褐色粘質土	暗褐色粘質土塊中量、木屑中量	西2検遺構土
	8	暗褐色粘質土	暗褐色粘質土	4検遺構土
西側A-C	9	暗褐色土	木屑少量	西側B検遺構土 (2検遺構土に対応)
	10	暗褐色土	赤褐色粘質中量、灰少量、木屑中量	西側A検遺構土 (2検遺構土に対応)
東側A-C	11	暗褐色土	木屑微量、灰微量	西側A検遺構土 (2検遺構土に対応)
	12	暗褐色粘質土	灰色土塊中量	4検遺構土
東側D	13	暗褐色土	微土多量、炭化物多量、赤褐色少量	東1検遺構土
	14	暗褐色土	赤褐色土塊少量、灰少量、木屑及び木片多量	西1検遺構土
西側A-C	15	暗褐色土	赤褐色土、赤褐色、灰、灰土少量	西2検遺構土
	16	暗褐色土	木屑少量、炭微量、灰 (半割含む) 中量	東2検遺構土
東側A-C	17	暗褐色土	木屑少量、炭微量	#
	18	暗褐色土	木屑少量、灰色砂少量	#
東側D	19	暗褐色土	灰色土塊中量	西3検遺構土
	20	暗褐色土	$\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の礫多量、灰混入	#
西側A-C	21	暗褐色土	木屑、灰多量	4検遺構土
	22	暗褐色粘質土	炭微量	4検遺構土
東側A-C	23	暗褐色粘質土	灰、灰土少量	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)
	24	暗褐色粘質土	灰色砂少量、木屑中量	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)
西側A-C	25	暗褐色粘質土	木屑微量	#
	26	暗褐色粘質土	木屑少量、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の礫少量	4検遺構土
東側A-C	27	暗褐色粘質土	木屑少量	4検遺構土
	28	暗褐色粘質土	木屑少量、炭微量	東1検遺構土
西側A-C	29	暗褐色粘質土	灰色砂少量、木屑中量	東2検遺構土
	30	暗褐色粘質土	木屑微量	4検遺構土 (2検遺構土に対応)
東側A-C	31	暗褐色粘質土	木屑少量、炭微量	東1検遺構土
	32	暗褐色粘質土	木屑少量、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の礫少量	東2検遺構土
西側A-C	33	暗褐色粘質土	炭微量、炭粒、灰、灰土、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の礫	4検遺構土 (2検遺構土に対応)
	34	暗褐色粘質土	木屑微量、炭微量	4検遺構土
東側A-C	35	暗褐色粘質土	木屑中量、木屑多量	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)
	36	暗褐色土	灰色土塊中量、木屑微量、炭微量	東1検遺構土
西側A-C	37	暗褐色土	木屑多量、灰色土塊微量	東2検遺構土
	38	暗褐色土	木屑微量、灰少量、灰色砂微量	東3検遺構土
東側A-C	39	暗褐色土	灰少量、灰土少量、褐色土少量、灰土中量、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の礫少量	東3検遺構土
	40	暗褐色粘質土	木屑微量、灰色土塊微量、炭微量、 $\phi 0.5 \sim 3\text{mm}$ の礫少量	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)
西側A-C	41	暗褐色粘質土	炭微量少量、 $\phi 0.5\text{mm}$ の礫少量	#
	42	暗褐色土	炭微量少量、木屑少量、炭微量、東1有礫、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の礫少量	東1検遺構土 (2検遺構土に対応)
東側A-C	43	暗褐色土	木屑少量、炭微量	東2検遺構土
	44	暗褐色土	灰色土塊中量、灰色土塊微量、木屑微量	#
西側A-C	45	暗褐色粘質土	木屑中量、炭微量	#
	46	暗褐色粘質土	木屑中量、炭微量	#
東側A-C	47	暗褐色土	灰色土塊少量、木屑微量、炭微量	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)
	48	暗褐色土	炭、炭微量	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)
西側A-C	49	暗褐色土	暗褐色土塊多量、木屑多量	西側A検遺構土 (2検遺構土に対応)
	50	暗褐色土	木屑中量、炭微量	西2検遺構土
東側A-C	51	暗褐色土	木屑中量、炭微量	東1検遺構土
	52	暗褐色土	木屑中量、炭微量	東2検遺構土
西側A-C	53	暗褐色土	木屑中量、炭微量	西2検遺構土
	54	暗褐色土	木屑中量、炭微量	西2検遺構土
東側A-C	55	暗褐色土	木屑中量、炭微量	東1検遺構土
	56	暗褐色土	木屑中量、炭微量	東2検遺構土
西側A-C	57	暗褐色土	褐色土塊中量、木屑少量	西3検遺構土
	58	暗褐色粘質土	木屑中量、炭微量	西2検遺構土
東側A-C	59	暗褐色土	木屑中量、炭微量	東1検遺構土
	60	暗褐色土	木屑中量、炭微量	東2検遺構土
西側A-C	61	暗褐色土	木屑中量	西3検遺構土
	62	暗褐色粘質土	暗褐色土塊中量	#
東側A-C	63	暗褐色粘質土	#	#
	64	暗褐色粘質土	木屑少量、 $\phi 0.5\text{mm}$ の礫少量	#
西側A-C	65	暗褐色粘質土	褐色土塊中量、灰色土塊少量、木屑少量	西3検遺構土
	66	暗褐色粘質土	木屑少量、炭少量、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の礫少量	東1検遺構土
東側A-C	67	暗褐色粘質土	暗褐色粘質土塊中量、褐色土塊少量、木屑少量、 $\phi 1\text{cm}$ の礫少量	東1検遺構土
	68	暗褐色粘質土	褐色土塊中量、炭微量、木屑微量	東1検遺構土
西側A-C	69	暗褐色土	木屑50%、灰色土塊混入10%	西3検遺構土
	70	暗褐色土	木屑50%、灰色土塊混入10%	#
東側A-C	71	暗褐色土	木屑50%、 $\phi \sim 10\text{mm}$ の礫5%	#
	72	暗褐色土	木屑50%	#
西側A-C	73	暗褐色粘質土	木屑10%	#
	74	暗褐色粘質土	木屑10%、暗褐色土塊中少量	#
東側A-C	75	暗褐色土	#	屋敷境遺構土 (2検遺構土に対応)

2 出土遺物

(1) 土器・陶磁器・土製品、瓦

ア 土器・陶磁器・土製品 (第3・7表、第13～30図)

非常に多数の遺物が出土している中から残存状態の良いものを中心に712点の遺物を抽出し、597点を図化、145点を写真にて掲載した。種別としては磁器・青磁・白磁・陶器・軟質施釉陶器・妬器・瓦器・土器・土製品の他、少数ではあるが灰釉陶器・須恵器などが出土している。産地ではやはり瀬戸・美濃産や肥前産が中心を成しているが、京・信楽、堺、備前、萬古などの製品も多く見られた。

今回の調査では屋敷境を中心として大きく西検出面・東検出面に区分することができる。屋敷境を中心に区分している以上、当然西と東では屋敷が異なることが想定できるため、これらについては各々全体の様相を概観し、その後個々の検出面、遺構についてみていきたいと思う。

(ア) 西検出面

西検出面に属するものとして234点の陶磁器が出土している。器種としては碗、小杯、天目茶碗、皿、灯明皿、紅血、鉢、片口鉢、搦鉢、段重、香炉、向付、火鉢、灰落し、甕、壺、瓶、小瓶、徳利、神酒徳利、花瓶、急須、水注、水滴、内耳鍋、灯明受け皿、仏飯具、薫、餌猪口、涼炉、陶硯などが見られた。やはり日常的に使用する生活雑器類が多く、碗が18%、皿が16%、小杯が5%、搦鉢が5%を占めている。

碗は若干京・信楽産が見られるものの、肥前産磁器染付碗、瀬戸・美濃産陶器碗が多くの割合を占めている。皿は碗と異なり瀬戸・美濃産陶器が多くの割合を占めており、志野の出土も目立つ。また、灯明皿の多さも特徴のひとつであるといえる。灯明皿は各検出面通じて普遍的に出土しているが、量的にかなりまとまっており、その割合は全体の17%と碗に匹敵するほどである。ほぼ全て在地産であると思われ、その多くにススや灯心痕が見られた。

生活雑器以外では少数ではあるが香炉や茶器も出土している。特に香炉は8点と東検出面に比べて多く出土しており、ひとつの特徴を示しているといえるであろう。

古くは16C末から19C前半代のものまで認められるが、1検と2～4検の間に大きな隔りがあり、2～4検では16Cから17C中葉頃まで段階的に変遷しているのに対し、1検では17・18Cの遺物を多数含むつ、19C前～中葉が主体を成すという結果となっている。

西1検 検出面・整地土 (15～96)

94点と出土量が多く、19C前葉～中葉を中心として多種にわたる遺物が出土している。中でも食膳具として使用された碗・皿類は多く出土しており、22点が碗、15点が皿となっている。碗は磁器・陶器ともほぼ同量出土している。磁器碗はすべて肥前産であると思われ、陶器は瀬戸・美濃産や京・信楽産などが見られる。35の1点のみ土器の碗が出土しているが、これは陶器の釉が全面剥離したものである可能性が高いと思われる。皿は磁器・青磁・白磁が大半を占めており、4点のみ陶器皿が見られる。磁器・陶器共に瀬戸・美濃産が多く含まれており、型紙摺りの染付皿、型打ちの白磁皿なども見られた。

碗・皿類以外のものについては生活雑器を中心に多岐に渡って出土しており、肥前産、瀬戸・美濃産を中心に京・信楽産や堺産のものまで見られる。特に搦鉢は瀬戸・美濃産に加えて堺産・備前産と思われるものが幾つか出土している。17C中葉を下限として17・18C段階のものも多数含まれてはいるが、全体的な様相から19C前葉～中葉に帰属するであろうと思われる。

85は京・信楽産の灰落しであると思われる。やや締まった淡黄白色の胎土で、内面は無釉である。外面には上絵で草文が見られる。口縁部は摩滅しており、外面側には敲打痕が見られる。恐らく煙管による敲打痕であろうと思われる。96は陶硯であると思われる。妬器質の硬く焼き締められた硯で、縁辺部には線刻で模様が描かれている。

水道A1 (1)

1の1点のみ出土している。黄色味がかった灰釉の向付であり、16C末～17C初頭の黄瀬戸向付であると思われる。

井戸A1 (2～9)

肥前産染付を中心に小杯、蓋などが出土している。1点のみ須恵器の片口鉢が出土しているが、これは混入品であろうと思われる。数点を除いてほぼ全てが19C前半に属すると思われる。

井戸A3 (10～14)

18C後半期のもものが多く出土している。12は香炉と思われる。被熱のためかやや白味がかったが、光沢のある黄釉がかけられている。いわゆるぐい呑み手に近い黄瀬戸であると思われる。

西2検 検出面・整地土 (98～114)

18点の遺物が出土している。中でも灯明皿の占める割合が多く、半数程度が灯明皿である。灯明皿はすべて在地産であると思われ、多くにスズなどの付着が見られた。灯明皿の他には碗・皿・播鉢なども見られるが数量はごく少数であり、時期も17C前葉～中葉に属するものが多い。灯明皿の時期が明確には定められないことを考えれば、ほぼ17C前葉～中葉のものを中心として構成されているといえる。

土坑B2 (97)

97のみの出土である。口径11cmの灯明皿であり、全面に褐色の付着物が見られる。この付着物については詳細不明であるが、強い臭いが残存していることから蠟など動物性油に由来する可能性が考えられる。

西3検 検出面・整地土

西3検は遺構からの出土は多数見られたものの、検出面としては土器・陶磁器の出土はみられなかった。

土坑A5 (115～130)

碗・皿・播鉢・香炉などが出土している。若干碗が多いものの、各器種平均的に出土している。磁器はすべて肥前産であり、陶器は瀬戸・美濃産の占める割合が多い。帰属時期には17C中葉～後葉、18C後葉の二つのまとまりが確認される。特に碗・香炉の多くは17C中葉に属しており、皿・灯明皿・灯明受け皿などは18Cに属するものが多い。これが伝世によるものか混入によるものかは定かではないが、17C代のものには伝世するとは考え難い生活雑器類も多く含まれるため、混入である可能性が高いように思われる。

117・119はともに上絵の磁器碗である。双方ともやや軟らかい白色素地に透明釉を施釉し、緑で上絵を施している。119の高台端部には焼成時の砂が付着している。ともに時期・産地等は不明である。

土坑A7 (131・132)

131・132のみの出土である。131は志野菊皿である。型打ちにより成形されており、底面にはトチンが付着している。17C中葉～後葉に帰属するであろう。

土坑B9 (133～161)

出土量が多く35点の遺物が出土している。天目茶碗・小杯以外の碗類の出土はなく、皿・灯明皿が出土の大半を占めている。特に灯明皿は13点と、約3割を占めるほど出土している。144・149などには前述した97の灯明皿と同様の付着物が付着しており、同じく強い臭いが残存している。これらも動物性油の使用を想定できるのであろうか。遺物の時期の中心は17C前葉であるが、18・19C代の遺物も多数見受けられる。西3検土坑A5同様こちらも伝世品であるとは考え難く、混入したものである可能性が高い。

155は志野向付である。口縁部付近には鉄絵で模様を描かれている。16C後葉～17C中葉の向付であろうと思われる。

西4検 検出面・整地土 (177)

177の皿1点のみの出土である。全面被熱しているが、灰釉施釉の折線目であると思われ、16C末～17C

前葉に帰属すると推定できる。

土坑A1 (162～164)

4点出土している。器種はすべて碗である。肥前産染付碗が多いが、1点のみ瀬戸・美濃産陶胎染付碗が出土している。一部18C後葉のものも見られるが、全体的には17C中葉に属すると思われる。

土坑B3 (165・166)

165・166の2点のみである。165は唐津碗であると思われるが、時期等の詳細は不明である。

溝B1 (167～175)

灯明皿を中心に出土している。灯明皿はすべて在地産であり、17C～18Cに属すると思われる。ほかにも碗・小杯などが出土しているが、これらは総じて17C中葉～後葉に帰属すると思われる。

溝B2 (176)

176のみ凶化した。灯明皿であると思われ、外面には灯心痕が見られた。産地は在地産であると思われるが、時期は不明である。

(イ) 東検出面

東検出面に属する遺物は356点である。器種としては碗、小碗、小杯、天目茶碗、皿、灯明皿、紅皿、鉢、片口鉢、蕎麦猪口、猪口、搦鉢、段重、合子、向付、香合、香炉、植木鉢、火入、火鉢、紅猪口、壺、壺、有耳壺、茶入、急須、土瓶、水滴、瓶、小瓶、徳利、神酒徳利、仏花瓶、鍋、内耳鍋、焙烙鍋、灯明受け皿、仏飯具、柄杓、蓮華、蓋、刺猪口、焔炉、風炉、双六駒などが見られ、西検出面に比べて出土量も多く器種も多岐に渡っている。生活雑器である碗・皿・鉢類が多いのは西検出面と同様であるが、東検出面は特に碗の出土量が突出して多いという特徴を有している。碗は105点と実に全体の3割を占めている。主に1～2検から出土しており、それ以下の検出面での出土量は極端に少なくなっている。また、磁器・陶器ともに18C以降のものが多く、17C段階の碗はごく少数出土しているに過ぎない。対して皿はこれとは異なり17C～19C段階まで数量的偏りは特に見られず、普遍的に出土している。これらのことから東検出面の碗にはある段階での一括廃棄が想定できると考えられる。このほか西検出面に比べ天目茶碗、向付などの茶器が多く出土していることも特徴であるといえる。

また、西検出面と同様に帰属時期に大きな隔たりが認められ、東1検では19C前半が中心となっているのに対し、東2検では17C代の遺物が主要を占めている。

東1検 検出面・整地土 (257～301)

総数66点のうち23点が碗と、やはり碗の割合が多くなっている。碗は磁器が多く、瀬戸・美濃産、肥前産共に出土しているが、有田、波佐見、鍋島など肥前産の中でのバリエーションが若干多い傾向がある。17C中葉頃のものから19C中葉まで幅広く見られるが、特に19C前葉に属するものが最も多く見受けられるので、19C前半に帰属するであろうと思われる。

276は陶胎染付の皿である。軟質で淡橙褐色の素地にやや濃い具須で草文を描いている。産地磁器等は不明であるが、中国産である可能性も考えられるであろう。

溝B1 (178～256)

92点の遺物が確認できた。碗と小杯の出土量が多く、26%が碗、12%が小杯となっている。碗は磁器・陶器ともにほぼ同量出土している中で、陶胎染付雨垂れ碗がまとまって出土している。小杯の多くは瀬戸・美濃産磁器であり、薄手のものが多い。帰属時期も19Cのものが多く、分量もほぼ同法量でまとまっている。全体的に18C～19C代に含まれるものが多いが、中でも19C中葉のものが多数含まれるため、18C後葉～19C中葉に帰属するであろうと思われる。参考29は底部のみの出土である。高台内にはやや白濁した灰釉が施釉されている。外面には赤色を帯びた漆が高台肩付に至るまで塗布されている。内面見込み部には指ナ

度底が見られ、その外周にはやや白色を帯びた化粧土が貼られている。

東2検 検出面・整地土 (382～396)

出土点数はそれほど多くはなく、18点の遺物を掲載した。器種には特に偏りもなく、各器種平均的に出土しているが、向付、天目茶碗など茶器が多く含まれているのが特徴といえる。一部18C後葉～19C代の遺物が含まれてはいるものの、17C前葉に属するものが中心を成しているため、この検出面も17C代に属する可能性が高い。

393は灰釉施釉の向付である。壺付には砂が付着し、腰部で折れて立ち上がる。全面被熱はしているがやや黄色味がかかった灰釉が掛けられているため、黄瀬戸であると思われる。395は軟質施釉陶器の香合であると思われる。黄灰褐色の軟らかい素地にやや褐色を帯びた土を塗り掛けし、鉄絵で唐草文様を描いている。施釉が灰釉であるためか、鉄絵にはにじみが生じており、下部に向かって流れ落ちている部分も見受けられる。内面及び外面文様部には部分的に刷緑釉が掛けられている。全体的に酷く被熱しているため詳細は不明であるが、華南三彩系の京焼である可能性が高いと思われる。なお、底部中央には一部打ち欠かれた痕跡が見受けられるため、二次調整的に穿孔された可能性が考えられる。また、壁・排土から出土している577も同様の特徴を有しており、怪もほぼ一致するため、これらはセットで使用されていたものと思われる。

土坑B3 (381)

381・参考61の2点である。参考61は磁器染付碗の小片であった。小片ではあるが底部は残されており、「明嘉」の銘が見られた。

溝B1 (302～380)

出土量が多く、92点の遺物が出土している。やはり碗が多く出土しており、全体の約3割を碗が占めている。その他の器種も多岐に渡って出土しており、搦鉢、片口鍋、徳利のような日常雑器を中心に多くの器種が確認できる。また、この遺構は307～309・321～326・337～338など同器種同法量の遺物のまとまりが幾つか確認できる。これは同型のものをセットで使用・廃棄を行ったためであると考えられるため、短期間での一括廃棄が行われた可能性が極めて高いといえるであろう。これらのセットは18C後半～19C前葉に属するものが多いため、遺構の廃棄年代としては19C前半である可能性が高いと思われる。

357は志野織部向付である。見込みには鉄絵で葡萄が描かれ、口縁部及び外面には團線が巡らされている。17C初頭～中葉に帰属するであろう。371は徳利ではないかと思われる。やや窪んだ底部から腰部で折れ曲がり、胴部はロクロにより凹凸がつけられている。胴部は全体的に歪みを持ち、一部成形後窪ませている。素地はやや含有物を含む暗灰色のものであり、内面には赤褐色、外面には暗紫色の塗りが刷毛塗りされている。18C後葉～19C前葉の備前産であろう。

東3検 検出面・整地土 (398～417)

21点出土している。器種は碗・天目茶碗・皿・灯明皿・搦鉢・茶入・壺であり、種類としてはあまり多くはない。割合としては灯明皿・天目茶碗が多く出土しており、灯明皿は8点、天目茶碗は4点確認されている。灯明皿はほぼ在地産であると考えられるが、412のみ京産の可能性が考えられる。天目茶碗は400～403である。総じて瀬戸・美濃産であると思われる。16C後葉～17C前葉に属するものであろうと思われる。401の破断面には褐色の付着物が見られた。詳細は不明ではあるが恐らく漆継ぎの痕跡であると考えられる。また、天目茶碗と同じ茶器としては398も出土している。398は灰白の素地に漆黒釉が施された、瀬戸黒茶碗である。胴部からほぼ直に立ち上がる筒型碗であり、16C末～17C前葉に属するものであろう。その他、碗・皿・搦鉢なども16C～17C前半代に属するものが多く出土している。

土坑B7 (397)

397のみの出土である。土製の内耳鍋であるが、小片であるため詳細は不明である。

東4検 検出面・整地土 (427)

427のみ確認された。瀬戸・美濃産灰釉折縁皿であり、底面にはトチン痕が見られる。16C後半～17C前葉に帰属するであろう。

土坑C1 (418～426)

10点の遺物を確認できた。磁器・陶器はほとんどなく、土器を中心に構成されている。土器には灯明皿・内耳鍋の他、焙烙鍋と思われるものも出土している。焙烙鍋は2点出土しているが、双方共に明瞭なミガキが見られた。土器の多くは在地産であると思われるが、帰属時期等は不明である。

(ウ) 屋敷境 (428～454)

34点出土している。古くは16C後半のものから19C前半に至るまで特に偏りなく普遍的に出土している。器種は碗・皿・搦鉢など生活雑器が多く見られる。中でも碗は最も多く出土しているが、そのほとんどは陶器であり、磁器碗は1点のみしか見られなかった。陶器碗は瀬戸・美濃産のみでなく、京・信楽産、肥前産なども見られる。442は17Cの瀬戸・美濃産錆軸搦鉢の下半部である。内外面共に褐色の臭気を帯びた付着物が付着している。これは西検出面97・144・149にみられた付着物と同質であると思われ、単に搦鉢だけでなく二次転用品として使用されていた可能性も考えられる。

(エ) 壁・排土 (510～582)

壁・排土からは95点の遺物を掲載した。552は灰釉輪弁鉢である。灰色のやや滑らかな素地に薄く灰釉を施釉しており、輪弁部分は周囲と異なり暗紫色になっている。焼成時に重ね焼きした際ついた痕跡であろう。18C中葉～後葉の瀬戸・美濃産であろうと思われる。

(オ) 試掘 (583～597)

試掘調査で出土した遺物からは23点の遺物を掲載した。591は16C代の瀬戸・美濃産茶入であると思われる。灰白の素地に内外面とも錆釉を施釉しているが、口縁から頸部にかけては釉を拭取っている。内外面共に若干の赤色付着物が見られるが、破断面内部にまで付着しているため、使用によるものではなく、埋没中に弱い被熱を受けたものであると考えられる。

イ 瓦 (第4～6表、第28図)

今回の調査では総重量28.73kgの瓦が出土した。総じて近世に属する瓦であった。ほとんどが小片での出土であるため詳細が判別できないものが多かったが、中でも判別可能である14点について整理し、7点を図化することとした。以下器種ごとに概要を述べていきたいと思う。

平瓦 (1・2) 平瓦は2点のみ整理した。1は残存状態が悪く中心紋様しか判別できないが、中心に桔梗紋が見られる瓦であった。瓦当には砂目が見られ、内面は横ナゲ調整がされていた。2は中心紋様に萼を持つ5葉を配する瓦である。唐草は1回反転し、その外側にトビ唐草が見られる。小片での出土であるため詳細不明であるが、軒棧瓦である可能性も考えられる。

丸瓦 (3～5・7) 丸瓦は9点を整理した。内軒丸瓦は5点である。3は立沢瀉紋の瓦である。瓦当面には砂目が見られ、葉部は陽刻で表現されている。4・5は巴紋瓦である。4の瓦は雲母粒の見られる燻し瓦である。珠文は少なく、尾の短い巴文が左巻きに入れられている。5は瓦当面に砂目が見られ、右巻きで尾の長い巴紋が見られた。

袖瓦 (6) 袖瓦は3点整理できた。総じて器面には雲母粒が吹き付けられ胎土・分量もほぼ同一である。袖部は全て左側にあり、一部に固定のための穿孔が見られる。いずれも近接して出土しているため、恐らく同時に使用されたものであろうと思われる。

番号	供給源	種類	規格	規格	口径	長さ	重量	耐火性	用途	形状	取付、文庫、取付寸法等	取付条件	取付
90	西上線	鉄・鋼	土部	内耳線	22.0	26.8	5.8	可燃				不明	在場
91	西上線	鉄・鋼	土部	内耳線	(26.4)			燃焼				不明	在場
92	西上線	鉄・鋼	鋼線	弘張線	(5.7)	(5.5)	6.5	炭	反折・閉鎖線			18C	取付・交通
93	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	(6.7)	(6.5)	2.3	炭	閉鎖線	取付	閉鎖線あり 内面凸付線	18C	取付・交通
94	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	(12.4)	(11.2)		炭	凸物線	取付	内面線あり 上面凸付線	18C	取付・交通
95	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	7.5	5.5	2.6	炭	凸物線	取付	内面線あり 内面凸付線 鋼込み内付線	18C	取付・交通
96	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	6.5	5.4	2.2	炭	凸物線	取付	内面凸付線	18C	取付・交通
97	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	(8.8)	(8.7)	1.2	炭	反折	取付	閉鎖線あり	18C	取付・交通
98	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	11.0	6.3	3.1	燃焼			全面彩色付線あり	17C	在場
99	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	9.0			炭	凸物線	取付		17C	在場
100	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	5.6	5.6		炭	凸物線			17C	取付・交通
101	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	11.0	5.0	7.3	燃焼	反折線			17C	取付・交通
102	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	8.0	5.4	2.8	炭	反折	反折	全面彩色付線あり	16C	取付・交通
103	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	14.2	6.4	3.6	燃焼	反折	反折	全面彩色付線あり	17C	取付・交通
104	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	10.0			炭	反折	反折	全面彩色付線あり	16C	取付・交通
105	西上線	鉄・鋼	土部	灯明線	8.0	4.8	2.2	燃焼			内外面凸付線	18C	取付・交通
106	西上線	鉄・鋼	土部	灯明線	10.0	5.0	2.2	燃焼・燃焼			内外面凸付線	18C	取付・交通
107	西上線	鉄・鋼	土部	灯明線	10.0	7.8	2.8	燃焼			内外面凸付線	16C	取付・交通
108	西上線	鉄・鋼	土部	灯明線	10.0	5.0	2.2	燃焼			内外面凸付線	18C	取付・交通
109	西上線	鉄・鋼	土部	灯明線	12.0	5.2	2.6	燃焼			内外面凸付線あり 内外面凸付線	17C	取付・交通
110	西上線	鉄・鋼	土部	灯明線	10.0	5.0	2.2	燃焼			内外面凸付線あり 内外面凸付線	18C	取付・交通
111	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	15.1	9.0	2.5	炭	凸物線		全面彩色付線により全面彩色	18C	取付・交通
112	西上線	鉄・鋼	土部	鋼	(26.2)			炭			内面凸付線凸物線あり	16C	取付・交通
113	西上線	鉄・鋼	鋼線	鋼	(8.8)			炭	凸物線		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
114	西上線	鉄・鋼	土部	内耳線	(26.2)			炭			全面彩色付線の付線あり	不明	不明
115	西上線	土流AS	鋼線	鋼	8.0			炭	凸物線	取付		17C	取付・交通
116	西上線	土流AS	鋼線	鋼	4.0			炭	凸物線・凸物線		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
117	西上線	土流AS	鋼線	鋼	(10.1)			炭	凸物線	取付	全面彩色付線あり	不明	不明
118	西上線	土流AS	鋼線	鋼	11.8	5.2	6.0	炭	反折	取付	全面彩色付線	17C	取付・交通
119	西上線	土流AS	鋼線	鋼	6.8	6.8	2.5	炭	反折	取付	全面彩色付線	17C	取付・交通
120	西上線	土流AS	鋼線	鋼	6.7			炭	凸物線	取付	全面彩色付線あり	17C	取付・交通
121	西上線	土流AS	鋼線	鋼	9.4	5.6	2.2	炭	反折	取付	全面彩色付線あり	18C	取付・交通
122	西上線	土流AS	鋼線	鋼	9.4	5.9	1.9	炭	凸物線	取付・反折	全面彩色付線あり	18C	取付・交通
123	西上線	土流AS	鋼線	鋼	8.0	6.2	2.7	炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
124	西上線	土流AS	鋼線	鋼	11.4	6.0	2.7	燃焼			全面彩色付線あり	18C	取付・交通
125	西上線	土流AS	鋼線	鋼	11.8	9.5		炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
126	西上線	土流AS	鋼線	鋼	12.8			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
127	西上線	土流AS	鋼線	鋼	11.8			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
128	西上線	土流AS	鋼線	鋼	12.8			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
129	西上線	土流AS	鋼線	鋼	9.4	5.8	2.3	炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
130	西上線	土流AS	鋼線	鋼	10.0	9.0		炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
131	西上線	土流A7	鋼線	鋼	11.6	6.6	2.1	炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
132	西上線	土流A7	鋼線	鋼	10.4			炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
133	西上線	土流D9	鋼線	鋼	8.0	3.4		炭	凸物線	取付	全面彩色付線あり	18C	取付・交通
134	西上線	土流D9	鋼線	鋼	11.0	3.4		炭	凸物線	取付	全面彩色付線あり	18C	取付・交通
135	西上線	土流D9	鋼線	鋼	12.0	4.2	7.2	炭	凸物線		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
136	西上線	土流D9	鋼線	鋼	13.2	8.4	2.3	炭	凸物線	取付	全面彩色付線あり	17C	取付・交通
137	西上線	土流D9	鋼線	鋼	8.0	3.6	2.1	炭	凸物線	取付	全面彩色付線あり	18C	取付・交通
138	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.0	7.4	3.0	炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
139	西上線	土流D9	鋼線	鋼	9.6			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
140	西上線	土流D9	鋼線	鋼	8.6	6.8	1.5	炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
141	西上線	土流D9	鋼線	鋼	11.6	6.3	2.4	炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
142	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.4	5.9	3.1	燃焼			全面彩色付線あり	18C	取付・交通
143	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.8	6.0	3.0	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
144	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.2	6.3	2.8	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
145	西上線	土流D9	鋼線	鋼	11.4	7.1	3.2	燃焼			全面彩色付線あり	18C	取付・交通
146	西上線	土流D9	鋼線	鋼	11.2	6.3	3.0	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
147	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.6	6.8	2.6	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
148	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.6	6.4	3.0	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
149	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.4	6.2	2.6	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
150	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.4	6.4	2.7	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
151	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.4	6.3	2.8	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
152	西上線	土流D9	鋼線	鋼	10.6	5.8	2.8	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
153	西上線	土流D9	鋼線	鋼	11.4	6.2	2.3	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
154	西上線	土流D9	鋼線	鋼	11.0	8.0	3.2	炭	凸物線		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
155	西上線	土流D9	鋼線	鋼	12.4			炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
156	西上線	土流D9	鋼線	鋼	3.0	3.2	2.2	炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
157	西上線	土流D9	鋼線	鋼				炭	反折		全面彩色付線あり	不明	不明
158	西上線	土流D9	鋼線	鋼	2.8			炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
159	西上線	土流D9	鋼線	鋼	2.8	2.7		炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
160	西上線	土流D9	鋼線	鋼	14.2			炭	反折		全面彩色付線あり	不明	不明
161	西上線	土流D9	鋼線	鋼	4.3			炭	反折		全面彩色付線あり	18C	取付・交通
162	西上線	土流A1	鋼線	鋼	(7.3)			炭	反折	取付	全面彩色付線あり	18C	取付・交通
163	西上線	土流A1	鋼線	鋼	(4.7)			炭	凸物線		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
164	西上線	土流A1	鋼線	鋼	(4.0)			炭	凸物線		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
165	西上線	土流D3	鋼線	鋼	(13.3)			炭	凸物線		全面彩色付線あり	不明	不明
166	西上線	土流D3	鋼線	鋼				炭	凸物線		全面彩色付線あり	不明	不明
167	西上線	土流D3	鋼線	鋼	(10.0)			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
168	西上線	土流D3	鋼線	鋼	(11.6)			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
169	西上線	土流D3	鋼線	鋼	(7.8)	(7.8)	4.6	炭	凸物線		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
170	西上線	土流D3	鋼線	鋼	6.5			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
171	西上線	土流D3	鋼線	鋼	(9.2)			炭	反折		全面彩色付線あり	17C	取付・交通
172	西上線	土流D3	鋼線	鋼	10.2	6.0	3.5	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通
173	西上線	土流D3	鋼線	鋼	(10.1)	(5.7)	2.6	燃焼			全面彩色付線あり	17C	取付・交通

番号	映画名	題名	監督	原簿	出演	時長(分)	形式	上映日	備考	製作	状況、交換、再映の有様	指定年代	備考
174	第4巻	演劇	小原	灯台鬼 (10.8)	(5.6)	2.6	焼肉					17C～18C	在映
175	第4巻	演劇	梅屋	煉獄 (10.2)			焼肉	焼肉				17C～	観劇・美術
176	第4巻	演劇	土部	灯台鬼 (6.8)			焼					17C	在映
177	第4巻	演劇	梅屋	煉獄 (11.0)	(6.2)	1.7	白	空撮				不明	在映
178	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.4	3.5	4.9	白	空撮	空撮		17C～17C	観劇・美術
179	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	10.4	3.5	6.3	白	透明物	空撮		18C～19C	観劇・美術
180	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.9	3.0	4.2	白	透明物	上撮(赤・緑・白)		17C後	観劇
181	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	(10.0)			白	透明物	空撮		18C前～17C	観劇・美術
182	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.5	3.8	5.3	白	透明物	空撮		18C	観劇
183	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	2.6			白	透明物	空撮		18C～19C	観劇
184	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	11.4	4.0	4.6	白	透明物	空撮		18C前～18C	観劇・美術
185	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.2			白	透明物	上撮(白黒)		18C後～19C	観劇・美術
186	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	6.0			白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇
188	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	8.8			白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇
189	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	7.0			白	透明物	空撮		18C後～19C	観劇
190	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	8.6	3.2	6.7	焼肉	新装焼肉			18C前～19C	観劇・美術
191	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	3.3			焼	映			18C前～19C	観劇・美術
192	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	4.2			映	映			18C中～19C	観劇・美術
193	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.2			映	映			18C後	観劇・美術
194	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.2			映	映			18C中～19C	観劇・美術
195	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.2	3.4	4.5	映	映			18C中～19C	観劇・美術
197	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	9.4	3.5	5.8	映	映			18C後	観劇・美術
198	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	8.4	3.6	5.8	映	映			18C後	観劇・美術
199	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	6.8	3.9	4.5	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇・美術
200	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (8.1)			白	透明物	上撮(青・赤)		18C中～19C	観劇・美術
201	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (6.7)			白	透明物	上撮(白黒・赤)		18C前～19C	観劇・美術
202	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (5.8)	2.8	3.1	白	透明物	空撮		18C中～19C	観劇・美術
203	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (6.6)	2.2	2.6	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇・美術
204	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (6.5)	2.2	2.4	白	透明物	上撮(赤・赤)		18C前～19C	観劇・美術
205	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (6.5)	2.2	2.7	白	透明物	上撮(黒保・赤・赤)		18C後～19C	観劇・美術
206	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (6.7)	5.6	3.3	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇
207	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (5.2)			白	透明物	空撮		18C後～19C	観劇
208	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (7.2)	3.1	3.5	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇・美術
209	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (5.9)	3.0	3.7	白	透明物	空撮		不明	在映
210	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	小杯 (6.3)	3.8	4.1	映	映			17C中～19C	観劇・美術
211	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (10.6)	7.3	2.1	映	映			18C後～19C	観劇
212	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (9.7)			映	映			18C中～19C	観劇・美術
213	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (10.1)	(8.4)	3.2	映	映			18C前～19C	観劇
214	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (9.4)	5.3	2.1	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇・美術
215	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (10.1)			白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇
216	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (9.6)	4.0	2.3	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇・美術
217	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (8.2)	3.8	2.4	白	透明物	空撮		18C前～19C	観劇・美術
218	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (6.7)	2.4	1.6	映	映			18C前～19C	観劇・美術
219	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	高 (11.6)	7.5	2.5	映	映			不明	在映
220	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.8)	6.6	3.7	映	映		17C～18C	在映
221	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (11.6)			映	映		18C後～19C	観劇・美術
222	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (10.2)			映	映		18C中～19C	観劇・美術
223	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.9)	3.1	4.0	白	透明物	空撮	18C前～19C	観劇・美術
224	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.8)			白	透明物	空撮	18C中～19C	観劇
225	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.0)	4.0	4.4	白	透明物	空撮	18C中～19C	観劇
226	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (10.4)	1.8	7.8	白	透明物	空撮	18C	観劇
227	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.6)			映	映		不明	在映
228	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (10.5)	11.2	17.8	映	映		18C前～19C	不明
229	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (5.6)	4.0	7.9	映	映		18C前～19C	観劇・美術
230	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (5.8)	4.5	4.5	白	透明物	空撮	18C中～19C	観劇・美術
231	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (8.0)			映	映		18C	観劇
232	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.6)			映	映		18C	観劇
233	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (4.4)			映	映		18C	観劇
234	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.9)			映	映		18C	観劇
235	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (5.6)			映	映		18C	観劇
236	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (8.2)	3.8	2.4	白	透明物	空撮	18C前～19C	観劇・美術
237	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.7)	2.4	1.6	映	映		18C前～19C	観劇・美術
238	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (4.6)			映	映		18C	観劇
239	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (10.8)			映	映		不明	在映
240	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (10.8)	7.6	7.2	映	映		18C前～19C	不明
241	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (22.8)			映	映		18C前～19C	不明
242	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.8)	2.9	1.3	映	映		18C後～19C	観劇・美術
243	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (4.0)			映	映		18C前～19C	観劇
244	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (5.7)			映	映		18C前～19C	観劇
245	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.2)			映	映		18C前～19C	観劇・美術
246	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.4)	3.8	3.1	白	透明物	空撮	18C後～19C	観劇
247	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.2)	3.8	2.6	白	透明物	空撮	18C後～19C	観劇・美術
248	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (2.8)			映	映		18C前～19C	観劇
249	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (5.1)	1.4	2.8	白	透明物	空撮	18C前～19C	観劇・美術
250	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (12.2)			映	映		18C中～19C	観劇
251	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (13.0)			映	映		18C中～19C	観劇・美術
252	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (9.8)	4.4	2.1	映	映		18C中～19C	観劇・美術
253	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.5)			映	映		18C前	観劇
254	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (4.2)	1.5	2.1	映	映		18C	観劇
255	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.8)	2.9	1.3	白	透明物	空撮	18C	観劇
256	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (11.0)			映	映		不明	在映
257	第1巻	演劇	梅屋	煉獄	土部	灯台鬼 (6.0)	(5.5)	5.4	映	映		18C前～19C	観劇・美術

番号	採出地	産種	種類	産地	数量 (kg)	品位	用途	加工名	物種	取引	異物、欠陥、有害物の特異	鑑定年代	産地
430	原産地	海綿	乾	紀	8.4	2.9	5.4	炭素	炭粉	上取 (陸・洋)		18C	原・美濃
431	原産地	海綿	乾	紀	4.0			炭素	炭粉			18C前～18C	原・美濃
432	原産地	海綿	乾	紀	6.0	4.03		炭素	炭粉	陸産		18C前～18C	原・美濃
433	原産地	海綿	乾	紀				炭素	炭粉	上取 (陸)		17C前～18C	原・美濃
434	原産地	海綿	天然乾燥	紀	11.5			炭素	炭粉			16C前～後	原・美濃
435	原産地	海綿	乾	紀	12.8	0.9	3.0	炭素	炭粉	取引	見込小五ヶ所 産額者あり	17C前～18C前	原・美濃
436	原産地	海綿	乾	紀	14.0	8.1	3.4	炭素	炭粉	取引	見込小五ヶ所	17C前～18C前	原・美濃
437	原産地	海綿	乾	紀	8.9			炭素	炭粉	取引		17C前～中	原・美濃
438	原産地	海綿	乾	紀	9.6			炭素	炭粉	取引	見込小五ヶ所より 取引の可能性あり	18C前～17C	原・美濃
439	原産地	土器	灯篭皿	紀	8.0	6.0	2.1	炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～19C	原・美濃
440	原産地	土器	灯篭皿	紀	9.8	6.0	3.2	炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～19C	原・美濃
441	原産地	磁器	磁器片	紀	4.7	4.2	5.4	炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～後	原・美濃
442	原産地	海綿	練絲	紀	8.2			炭素	炭粉	取引	内産可能性あり (二次物用か)	17C	原・美濃
443	原産地	海綿	練絲	紀	9.9			炭素	炭粉	取引	内産使用による厚薄	18C前～18C	原・美濃
444	原産地	海綿	練絲	紀	15.1			炭素	炭粉	取引	内産可能性あり	18C前～18C	原・美濃
445	原産地	骨董	骨董	紀	5.4			炭素	炭粉	取引	丸ノ目	18C前	原・美濃
446	原産地	海綿	練絲	紀	6.5			炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～18C	原・美濃
447	原産地	磁器	磁器	紀	1.8			炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～後	原・美濃
448	原産地	土器	内耳輪	紀	28.5	22.4	7.3	炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～後	原・美濃
449	原産地	土器	内耳輪	紀	28.8			炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	不明	在産
450	原産地	海綿	行字織	紀	11.7			炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	18C前～中	原・美濃
451	原産地	海綿	乾	紀	7.8			炭素	炭粉	取引		18C前～後	原・美濃
452	原産地	海綿	乾	紀	3.1	2.9	2.6	炭素	炭粉	取引		不明	在産か
453	原産地	海綿	乾	紀	2.8	2.6	2.8	炭素	炭粉	取引		不明	在産か
454	原産地	土器	磁器	紀				炭素	炭粉	取引		不明	在産
455	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	4.2			炭素	炭粉	取引	コンテナ付 産額者あり	18C前～中	原・美濃
456	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	0.9			炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
457	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	0.8			炭素	炭粉	取引		18C前～18C	原・美濃
458	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	18.0			炭素	炭粉	取引		18C前～17C	原・美濃
459	その他	西1～4 陸・陸	磁器	小研	(5.3)			炭素	炭粉	取引		17C前～中	原・美濃
460	その他	西1～4 陸・陸	海綿	小研	(7.4)			炭素	炭粉	取引		不明	原・美濃
461	その他	西1～4 陸・陸	海綿	小研	(5.8)			炭素	炭粉	取引		不明	原・美濃
462	その他	西1～4 陸・陸	海綿	天然乾燥	(8.3)			炭素	炭粉	取引		17C前～後	原・美濃
463	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	(5.4)	(4.3)	(1.8)	炭素	炭粉	取引		18C前～18C	原・美濃
464	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(16.3)			炭素	炭粉	取引		17C前～中	原・美濃
465	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(3.9)			炭素	炭粉	取引	見込小五ヶ所 産額者あり	17C前～18C	原・美濃
466	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(16.0)			炭素	炭粉	取引	見込小五ヶ所 産額者あり	18C前～後	原・美濃
467	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(16.5)	(5.7)	2.2	炭素	炭粉	取引	見込小五ヶ所	18C前～中	原・美濃
468	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(11.4)			炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
469	その他	西1～4 陸・陸	土器	灯篭皿	(11.4)	(6.4)	2.7	炭素	炭粉	取引	付否不明より 内産可能性あり	不明	在産
470	その他	西1～4 陸・陸	土器	灯篭皿				炭素	炭粉	取引		18C	原・美濃
471	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾				炭素	炭粉	取引		18C前～18C	原・美濃
472	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(14.3)			炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
473	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(10.7)			炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
474	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	(9.9)			炭素	炭粉	取引		18C	原・美濃
475	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾				炭素	炭粉	取引		18C前～18C	原・美濃
476	その他	西1～4 陸・陸	磁器	水筒				炭素	炭粉	取引		17C前～後	原・美濃
477	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	4.7			炭素	炭粉	取引		18C前～18C	原・美濃
478	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(4.0)			炭素	炭粉	取引		18C前～後	原・美濃
479	その他	西1～4 陸・陸	土器	内耳輪	(26.8)			炭素	炭粉	取引		不明	在産
480	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(5.0)			炭素	炭粉	取引		18C前～後	原・美濃
481	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	10.7			炭素	炭粉	取引		18C前～後	原・美濃
482	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	8.1			炭素	炭粉	取引		17C前～18C	原・美濃
483	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	(8.2)	(3.6)	4.7	炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
484	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	5.1			炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
485	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	4.2			炭素	炭粉	取引		18C前	原・美濃
486	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	(10.0)			炭素	炭粉	取引		18C前～中	原・美濃
487	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	11.1	6.4	6.1	炭素	炭粉	取引		18C前～18C	原・美濃
488	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(13.0)			炭素	炭粉	取引		18C前	原・美濃
489	その他	西1～4 陸・陸	海綿	乾	(2.4)			炭素	炭粉	取引		18C	原・美濃
490	その他	西1～4 陸・陸	磁器	小研	6.6	3.0	4.5	炭素	炭粉	取引		17C前～18C	原・美濃
491	その他	西1～4 陸・陸	磁器	小研	(2.1)			炭素	炭粉	取引		17C前～中	原・美濃
492	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	(26.8)			炭素	炭粉	取引		17C前	原・美濃
493	その他	西1～4 陸・陸	磁器	乾	14.0			炭素	炭粉	取引		17C前～中	原・美濃

番号	築造時期	建群	用途	用途	形状	高さ (m)	口幅	底辺	高さ	土の色	地質	地付	状況、文様、彫刻の特徴	指定年代	現状
484	その他	第1～4 層・壁	陶器	瓦	四角	(20.5)				白	透明物	地付	基部に彫刻あり	18C前半～1	彫刻
495	その他	第1～4 層・壁	陶器	石積瓦	10.9					灰緑	灰緑		1層壁スラブ・タール付着	不明	扉戸・瓦葺
496	その他	第1～4 層・壁	陶器	灯明瓦	10.0	5.8	2.1	灰	灰緑	灰緑	灰緑		内瓦 内瓦裏スラブ付着	17C前	扉戸・瓦葺
497	その他	第1～4 層・壁	土壁	石積瓦	(4.9)					灰緑	灰緑		金庫スラブ付着	不明	在席
498	その他	第1～4 層・壁	土壁	灯明瓦	11.4	6.6	3.1	焼	灰緑	灰緑	灰緑		内瓦裏スラブ付着	18C後	在席
499	その他	第1～4 層・壁	磁器	浴室出口	8.0	5.0	2.1	灰	透明物	灰付	透明物	地付	彫の基門部内寄 内面四角 外面凸文	18C後～19C前	彫刻
500	その他	第1～4 層・壁	磁器	大鉢か	10.2					白	透明物	地付	彫の基門部内寄 見込み彫刻あり	18C後～19C前	彫刻
501	その他	第1～4 層・壁	陶器	漆鉢	(33.6)					灰黄灰	緑地			17C前	彫刻・瓦葺
502	その他	第1～4 層・壁	陶器	漆鉢	11.4					灰白	透明物	地付	基部彫刻あり 彫部・彫刻彫刻あり	18C中～後	不明
503	その他	第1～4 層・壁	陶器	漆	8.2					灰	灰緑			18C前半	不明
504	その他	第1～4 層・壁	瓦葺	瓦	10.2					焼	焼			18C前半	瓦葺
505	その他	第1～4 層・壁	陶器	土瓦	8.4	6.6	11.4	灰黄灰	灰緑	灰緑	灰緑		外面文様 下扉部スラブ付着	18C後～19C前	扉戸・瓦葺
506	その他	第1～4 層・壁	陶器	神楽巻物	2.4					灰白	灰緑			18C後～19C前	扉戸・瓦葺
507	その他	第1～4 層・壁	陶器	漆	8					灰	灰緑	地付	内面地付 彫りも彫部 見込み凸文	18C後	扉戸・瓦葺
508	その他	第1～4 層・壁	磁器	紅皿	8.4	1.6	1.4	白	透明物	地付	透明物	地付	外面彫刻半文	18C中	彫刻
509	その他	第1～4 層・壁	磁器	紅皿	(4.5)	(1.6)	1.3	白	透明物	地付	透明物	地付		19C前	彫刻
510	その他	壁・障子	磁器	瓦	4.0					白	透明物	地付	見込み瓦葺	19C前半	彫刻・瓦葺
511	その他	壁・障子	磁器	瓦	3.4					灰白	透明物	地付	見込み瓦葺	18C後～19C前	彫刻
512	その他	壁・障子	磁器	瓦	9.5					白	透明物	地付		18C前半	彫刻・瓦葺
513	その他	壁・障子	磁器	瓦	8.4					白	透明物	地付	基部(彫) 彫	18C前半	彫刻・瓦葺
514	その他	壁・障子	磁器	瓦	8.5					白	透明物	地付	透明物 内面彫刻あり	19C前	彫刻
515	その他	壁・障子	磁器	瓦	(11.8)					白	透明物	地付		18C中～後	彫部
516	その他	壁・障子	磁器	瓦	(9.5)	3.4	4.7	白	透明物	地付	透明物	地付	外面瓦葺	19C中～後	彫部・瓦葺
517	その他	壁・障子	磁器	瓦	(5.4)					灰	透明物	地付	外面瓦葺 共同透明物付着	19C前半	彫部
518	その他	壁・障子	磁器	瓦	(7.9)	3.7	6.3	白	透明物	地付	透明物	地付	透明物 内面凸文 見込み瓦葺	18C後半	彫部
519	その他	壁・障子	磁器	瓦	(7.0)					白	透明物	地付	透明物 透明物あり 高台彫刻付着	18C前半	彫部
520	その他	壁・障子	白磁	瓦	(11.8)					灰白	透明物	地付		不明	彫部
521	その他	壁・障子	陶器	瓦	(9.0)	(3.2)	6.3	灰黄灰	灰緑	灰緑	灰緑		1層壁スラブ付着	18C中～後	彫部・瓦葺
522	その他	壁・障子	陶器	瓦	9.5					灰白	灰緑	1層(敷・壁)	金庫彫刻	18C	瓦・瓦葺
523	その他	壁・障子	陶器	瓦	(8.9)					焼	灰緑		見込み瓦葺	18C後～19C前	彫部・瓦葺
524	その他	壁・障子	磁器	小鉢	6.4	3.3	4.2	白	透明物	地付	透明物	地付	外面瓦葺・高台 高台彫刻付着	18C前半	彫部・瓦葺
525	その他	壁・障子	磁器	小鉢	8.4					白	透明物	地付		18C前半	彫部・瓦葺
526	その他	壁・障子	磁器	小鉢	3.0					白	透明物	地付	内瓦内面凸文あり 見込み(彫) 内瓦内面凸文	19C前半	彫部
527	その他	壁・障子	磁器	小鉢	8.8	3.0	4.3	白	透明物	地付	透明物	地付	高台透明物 内面瓦葺(敷・壁)	17C前半	彫部
528	その他	壁・障子	磁器	小鉢	2.6					白	透明物	地付	彫部あり 外面凸文	18C後半	彫部・瓦葺
529	その他	壁・障子	陶器	小鉢	(6.4)	(2.6)	3.4	灰	透明物	地付	透明物	地付	透明物	18C前半	彫部
530	その他	壁・障子	陶器	瓦	10.0	6.0	2.1	灰	透明物	地付	透明物	地付	彫部あり	17C中～後	彫部
531	その他	壁・障子	陶器	瓦	7.4					灰	透明物	地付	基部見込み彫刻あり	19C前半	彫部・瓦葺
532	その他	壁・障子	陶器	瓦	6.8					白	透明物	地付	見込み凸文	18C前半	彫部・瓦葺
618	その他	壁・障子	磁器	瓦	7.6	2.2	2.4	白	透明物	地付	透明物	地付	内面彫刻あり 金庫彫刻 全体石積している 基部彫刻あり	不明	彫部・瓦葺
534	その他	壁・障子	磁器	瓦	(13.3)	(7.8)				白	透明物	地付	内面透明物 基部彫刻あり 高台彫刻付着	18C前半	彫部
535	その他	壁・障子	磁器	瓦	(10.0)	(6.7)	3.8	白	透明物	地付	透明物	地付	口部 見込み透明物	18C前半	彫部・瓦葺
536	その他	壁・障子	白磁	瓦	(7.3)	(3.3)	2.0	白	透明物	地付	透明物	地付	基部 瓦葺の可能性あり 見込み彫	19C前半	彫部
537	その他	壁・障子	白磁	瓦	(7.6)	3.4	3.4	白	透明物	地付	透明物	地付	見込み凸文	18C前半	彫部・瓦葺
538	その他	壁・障子	青磁	瓦						灰	青磁	地付	透明物	17C前半	彫部
539	その他	壁・障子	陶器	瓦	19.6					灰白	灰石物	地付		17C後～18C前	彫部・瓦葺
540	その他	壁・障子	陶器	瓦	11.4					緑地	灰石物	地付	透明物	18C後～17C中	彫部・瓦葺
541	その他	壁・障子	陶器	瓦	(9.2)	(4.3)	1.7	緑地	灰石物	灰石物	灰石物		外面透明物	18C後～19C前	彫部・瓦葺
542	その他	壁・障子	瓦葺	瓦	(13.6)	(7.7)	2.5	焼	灰石物	灰石物	灰石物		内瓦裏スラブ付着	不明	不明
543	その他	壁・障子	土壁	灯明瓦	(9.7)	(6.1)	2.8	焼	灰石物	灰石物	灰石物		内瓦裏スラブ付着	18C	在席
544	その他	壁・障子	土壁	灯明瓦	9.7	4.8	3.6	焼	灰石物	灰石物	灰石物		金庫彫刻	18C後～17C前	在席
545	その他	壁・障子	土壁	灯明瓦	(6.8)	2.5	焼	焼	灰石物	灰石物	灰石物		外面スラブ付着	18C後～19C	在席
546	その他	壁・障子	土壁	灯明瓦	(10.7)	(6.9)	2.6	焼	焼	灰石物	灰石物		内瓦裏スラブ付着 内面タール付着	18C	在席
547	その他	壁・障子	土壁	灯明瓦	(12.1)	(6.9)	2.3	焼	焼	灰石物	灰石物		内瓦裏スラブ付着	17C	在席
548	その他	壁・障子	陶器	鉢	17.8					白	透明物	地付	内面凸文	18C前半	彫部・瓦葺
549	その他	壁・障子	陶器	鉢	(7.0)					白	透明物	地付	基部彫刻あり	18C後～19C前	彫部
550	その他	壁・障子	陶器	鉢	(8.1)					白	透明物	地付	内面タール彫刻彫部	17C後半	彫部
551	その他	壁・障子	陶器	鉢	7.0					白	透明物	地付	彫の基門部内寄 見込み凸文 鏡子彫刻	18C前半	彫部
552	その他	壁・障子	陶器	鉢	(7.3)					灰	灰緑			18C前半	彫部・瓦葺
553	その他	壁・障子	陶器	鉢	(20.5)					灰緑	灰緑	灰緑	灰緑	18C前半	彫部・瓦葺
554	その他	壁・障子	陶器	香炉	16.0					灰	透明物	地付	透明物	19C前半	彫部・瓦葺
555	その他	壁・障子	陶器	香炉	(10.7)	(9.3)	12.8	白	透明物	地付	透明物	地付	彫の基門部内寄 外面凸文(上下)・正凸文 スラブ付着 透明物あり	18C後～19C前	彫部
556	その他	壁・障子	青磁	香炉	(10.4)					白	青磁	地付		18C前半	彫部・瓦葺
557	その他	壁・障子	青磁	香炉	(5.9)					白	青磁	地付	外面凸文	18C前半	彫部・瓦葺
558	その他	壁・障子	陶器	燈籠口	(3.6)	(3.6)		灰	灰緑	灰緑	灰緑			18C	彫部・瓦葺
559	その他	壁・障子	陶器	大鉢か	(13.8)					灰	灰緑			不明	不明
560	その他	壁・障子	陶器	漆鉢	(13.9)					灰	灰緑	灰緑		18C前半	彫部・瓦葺
561	その他	壁・障子	陶器	漆鉢	瓦	(6.4)				焼	焼	地付		18C	彫部
562	その他	壁・障子	陶器	土瓦	(11.0)					灰～青磁	灰緑			18C中～後	在席
563	その他	壁・障子	陶器	土瓦	不明					灰	灰緑			不明	不明
564	その他	壁・障子	陶器	漆鉢	(3.3)					白	透明物	地付		18C前半	彫部・瓦葺
565	その他	壁・障子	陶器	漆鉢						白	透明物	地付		18C前半	彫部・瓦葺
566	その他	壁・障子	磁器	香炉	(6.1)					灰	透明物	地付		不明	不明
567	その他	壁・障子	陶器	漆鉢	2.1					灰黄灰	灰緑			18C後～19C前	彫部・瓦葺
568	その他	壁・障子	陶器	仏瓦	6.5					灰	焼			18C	彫部・瓦葺

番号	築造年	築造地	築造	階層	柱間 (cm)			耐土色	骨格	耐久	説明	調査・文書・外部の特徴	備考等内	備考	
					口幅	底幅	間隔								
569	その他	壁・積土	海部	仏舎利	0.1	4.0	5.3	灰土	灰積		念珠焼	19C前～中	扉戸・瓦葺		
570	その他	壁・積土	海部	石平焼か	(16.3)			灰土	灰積		念珠焼 外部使用よりヌメ付	19C	扉戸・瓦葺		
571	その他	壁・積土	1階	内瓦焼	20.0	28.0	16.0	高灰			外周ヌメ付	不明	石葺		
572	その他	壁・積土	海部	瓦		3.2		白	透骨焼	灰行		19C前～中	扉戸・瓦葺		
573	その他	壁・積土	福部	瓦	4.3	11.0	3.1	白	透骨焼	灰行	上段(白灰)	19C前～後	扉戸・瓦葺		
574	その他	壁・積土	福部	瓦か		4.9		白	透骨焼	灰行	上段(白灰) 上段(白灰) 結	19C前～中	扉戸・瓦葺		
575	その他	壁・積土	海部	瓦	5.8		2.1	透灰土	灰積	灰積	踏み部文 上段焼跡 内面焼跡の散り	19C前～中	扉戸・瓦葺		
576	その他	壁・積土	海部	瓦	7.0			透灰土	灰積	灰積	踏み部より散跡 成形性瓦土。99と セツト	不明	瓦葺		
577	その他	壁・積土	杖見海部海部	瓦	11.6		2.2	透灰土	灰積	灰積・透骨焼		不明	瓦葺		
578	その他	壁・積土	海部	瓦	(9.5)		3.2	赤褐色			踏み部跡出し	19C前～中	不明		
579	その他	壁・積土	海部	瓦焼18か	(6.2)	(1.6)	2.7	白	透骨焼	灰行		19C後～19C前	扉戸		
580	その他	壁・積土	土部	透骨か		(11.8)		灰	灰		内周ヌメ付	不明	不明		
581	その他	壁・積土	土部	瓦	4.8	4.8	3.7	高灰			子母心部分 内面焼跡は出	不明	不明		
582	その他	壁・積土	瓦部	不明		(10.0)		灰	灰		外周ヌメ付(上よりキチ)	不明	不明		
583	試掘	トロンク1	福部	瓦	17.4	11.1	3.1	白	透骨焼	灰行	上段(赤・赤・赤) セツト	不明	17C後～19C前	扉戸	
584	試掘	トロンク1	海部	透骨	21.8			灰土	灰積		骨目使用による露筋	17C前	扉戸・瓦葺		
585	試掘	トロンク1	海部	透骨口	4.7	3.6	2.3	灰土	灰積		内面付骨あり	18C前～後	扉戸・瓦葺		
586	試掘	トロンク3	海部	瓦		4.4		透灰土	灰積		瓦土層認定	17C前	瓦葺		
587	試掘	トロンク4	海部	瓦	10.8			透灰土	灰積			18C前～後	扉戸・瓦葺		
588	試掘	トロンク4	海部	瓦	9.2	2.4	1.8	透灰土	灰積			18C前～後	扉戸・瓦葺		
589	試掘	トロンク4	1階	打明焼	8.7	6.1	2.1	透				18C前	石葺		
590	試掘	トロンク4	海部	透骨	20.8	14.0	13.0	灰土	灰積		内面及び後面はさみ肌あり	19C前	扉戸・瓦葺		
591	試掘	トロンク4	海部	瓦	8.8	6.8	6.5	灰土	透骨焼		外周ヌメ付 後付け段石積跡あり取り 部土色付骨あり	16C	扉戸・瓦葺		
592	試掘	トロンク5	海部	瓦	8.8			透灰土	灰積		瓦葺	19C前～中	扉戸・瓦葺		
593	試掘	トロンク5	海部	瓦	10.0			透灰土	透骨焼			18C前～中	扉戸・瓦葺		
594	試掘	トロンク6	海部	瓦	4.1			灰土	透骨焼	灰行		19C前～中	扉戸		
595	試掘	トロンク6	海部	瓦	12.8	4.6	6.4	白	透骨焼	灰行	瓦行焼 内周ヌメ付	19C前～中	扉戸・瓦葺		
596	試掘	トロンク6	海部	透骨	13.0			赤	透骨焼		外周透骨焼	18C後～19C前	扉戸		
597	試掘	トロンク6	海部	透骨	4.2	4.4	3.4	透灰土	灰積			19C後～19C前	扉戸・瓦葺		

第4表 平瓦一覽

調査番号	調査地	調査年	調査者	調査内容	瓦葺部			調査			備考
					瓦葺	瓦葺	瓦葺	調査	調査	調査	
1	7	21	佐々木 幸・田中 邦夫	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺
2	6	4	佐々木 幸・田中 邦夫	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺

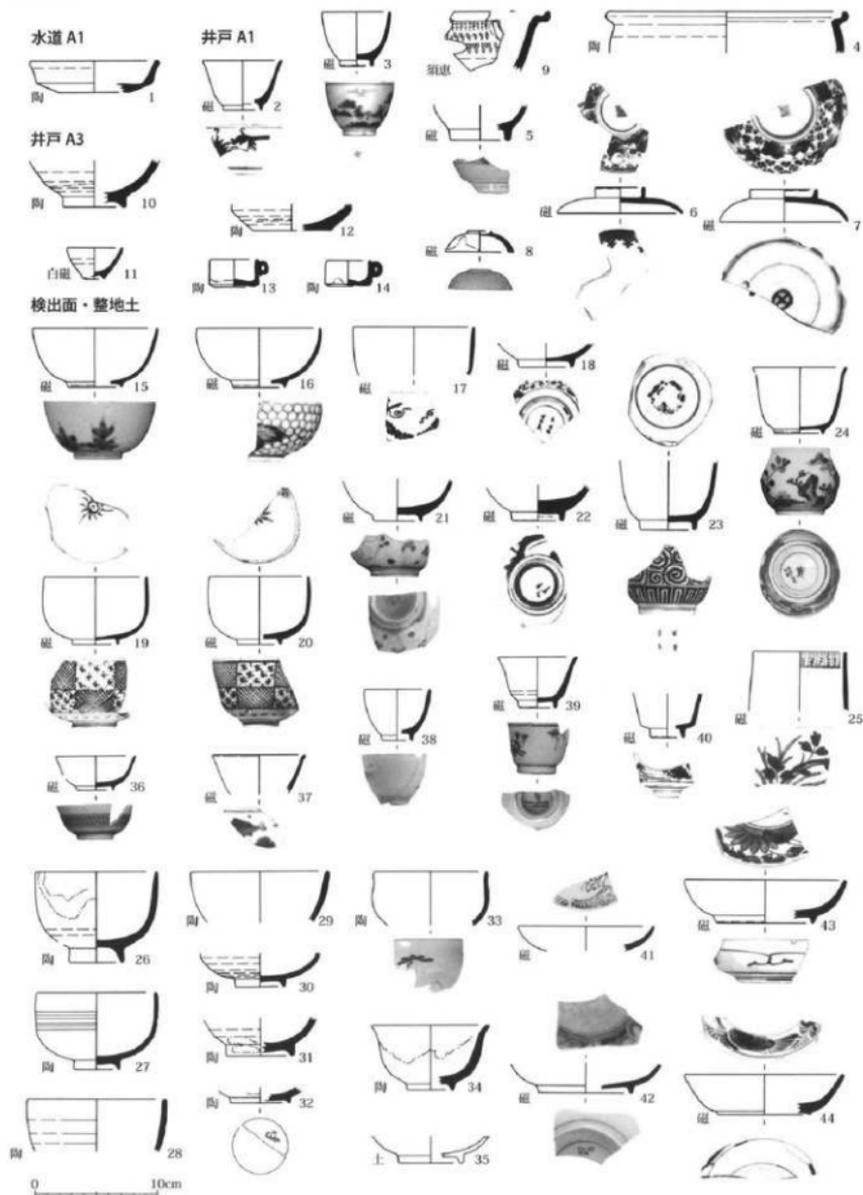
第5表 丸瓦一覽

調査番号	調査地	調査年	調査者	瓦葺部							備考						
				瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺							
2	1	第2階	福部	15.5	11.5	1.0	2.4	7				瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺					
4	3	第2階	福部	14.0	8.4	11.4	0.6	1.9	12			瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺					
5	2	西1階	福部	14.4		10.8	0.8	2.0	7			瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺					
7	8	西1階	福部							98.5	15.0	2.1	2.6	3.0	6.8	9	瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺
9	9	西2階	福部							(20.0)	15.0	2.3	4.3	2.9	(8.7)	8	瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺
4	第3階	1階部分	福部	15.0		12.6	0.7	2.0	3	瓦葺部or瓦葺						8	瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺
11	西4階	福部								17.8	14.6	2.3				9	瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺
5	第2階	福部	11.4		10.8	0.4	1.4	2		巴文						10	瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺
10	第2階	福部								(14.4)	13.9	1.9	3.9	3.7	8.7	9	瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺 瓦葺・砂葺

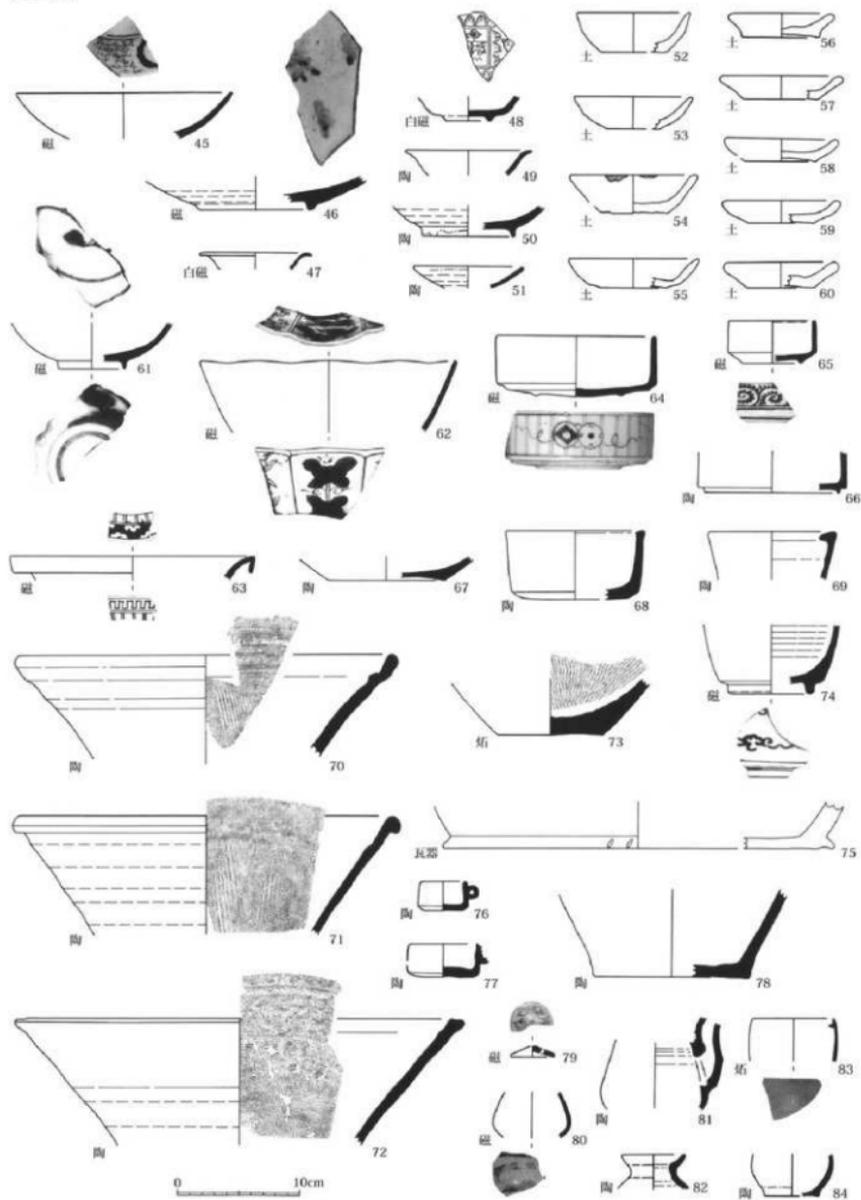
第6表 袖瓦一覽

調査番号	調査地	調査年	調査者	調査内容	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	備考
6	12	西1階	福部	透骨	29.3	38.0	1.9	18.2	5.4	7.7	2.0	透骨焼	瓦葺あり
12	第1階	井戸A1	福部	透骨	29.4	36.2	1.8	17.6	5.3	7.2	2.1	透骨焼	瓦葺あり
14	第1階	井戸A1	福部	透骨	29.7	35.7	2.0	18.5	5.4	7.9	1.7	透骨焼	

西1棟

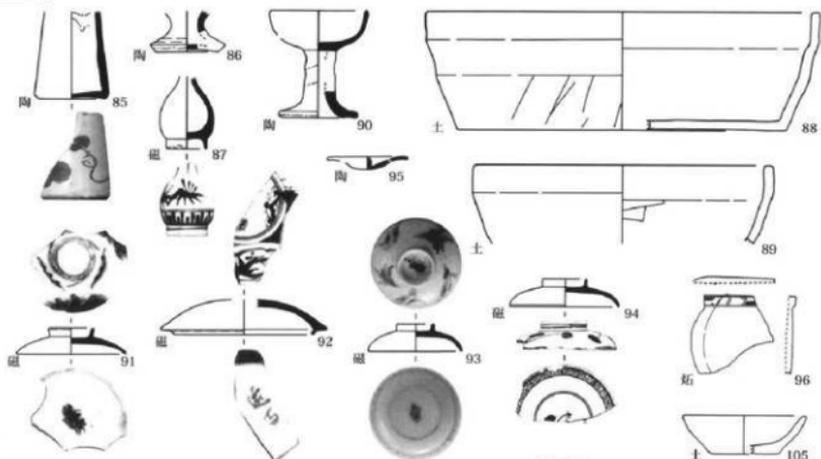


第13図 土器・陶磁器・土製品 (1)

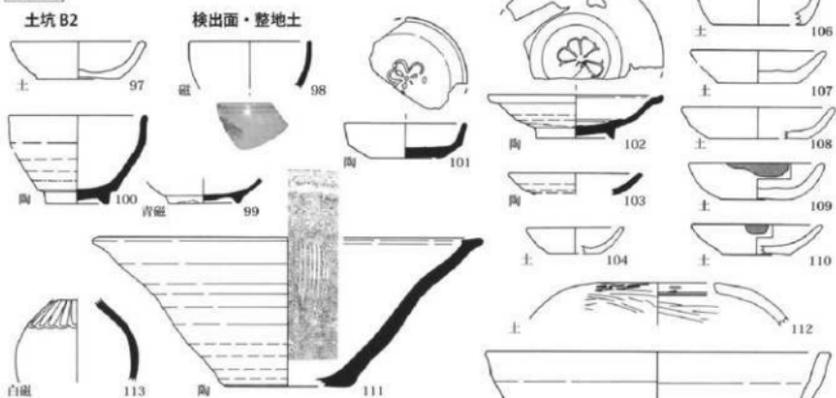


第14図 土器・陶磁器・土製品(2)

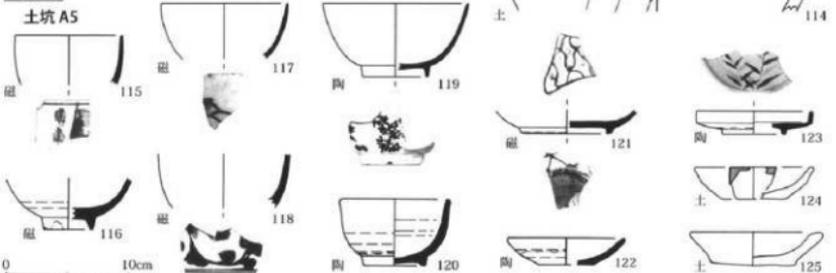
西 1 棟



西 2 棟

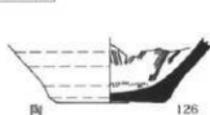


西 3 棟



第 15 圖 土器・陶磁器・土製品 (3)

西3検



陶

126



陶

127



陶

129



陶

130

土坑 A7



陶

131

土坑 B9



磁

133



白磁

134



陶

135



磁

136



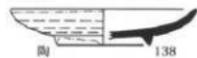
白磁

137



陶

132



陶

138



陶

139



陶

155



陶

156



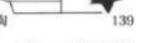
土

142



陶

141



陶

140



陶

157



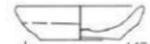
磁

158



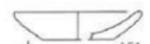
土

143



土

147



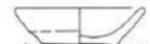
土

151



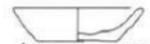
土

144



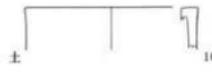
土

148



土

152



土

160



磁

159



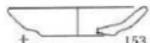
土

145



土

149



土

153



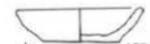
灰胎

161



土

146



土

150

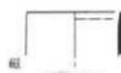


土

154

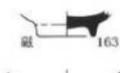
西4検

土坑 A1



磁

162



磁

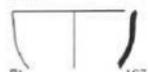
163



磁

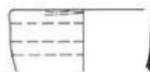
164

溝 B1



陶

167



陶

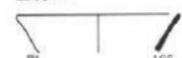
168



白磁

169

土坑 B3



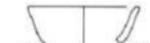
陶

165



土

170



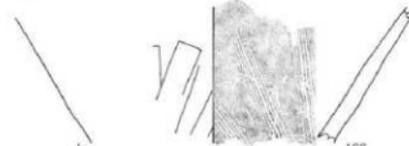
土

171



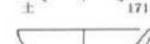
土

173



土

166



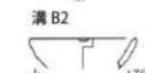
土

172



土

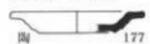
174



土

176

検出面・整地土



陶

177



0

10cm

陶

175

第16図 土器・陶磁器・土製品 (4)

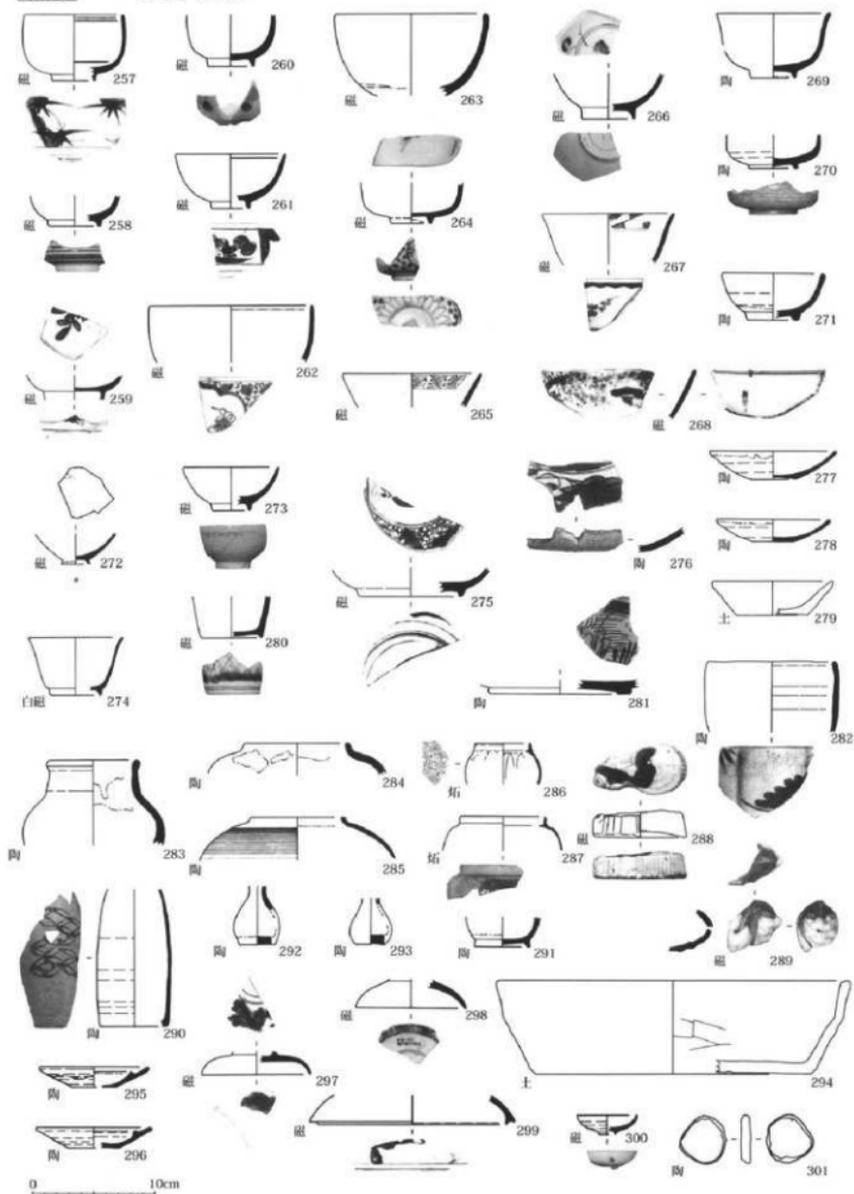


第17図 土器・陶磁器・土製品 (5)

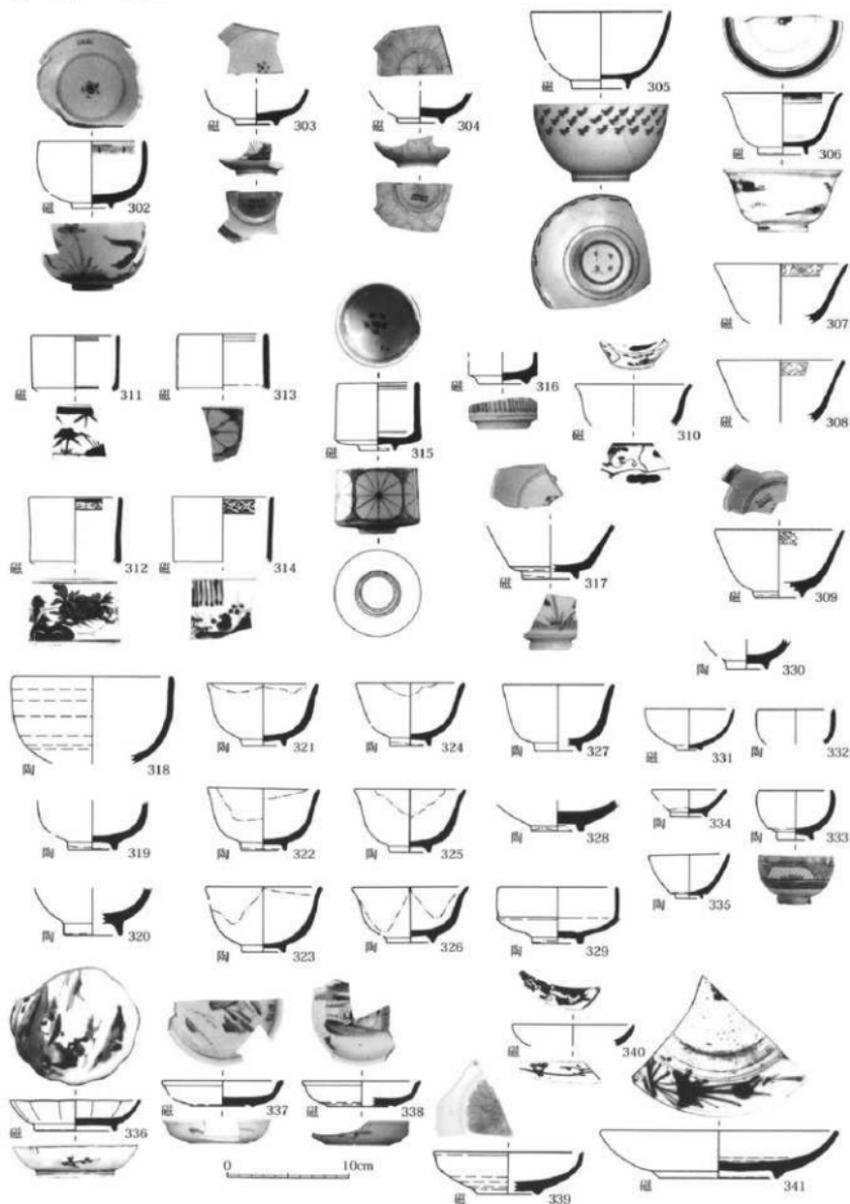
東1棟



第18圖 土器・陶磁器・土製品 (6)

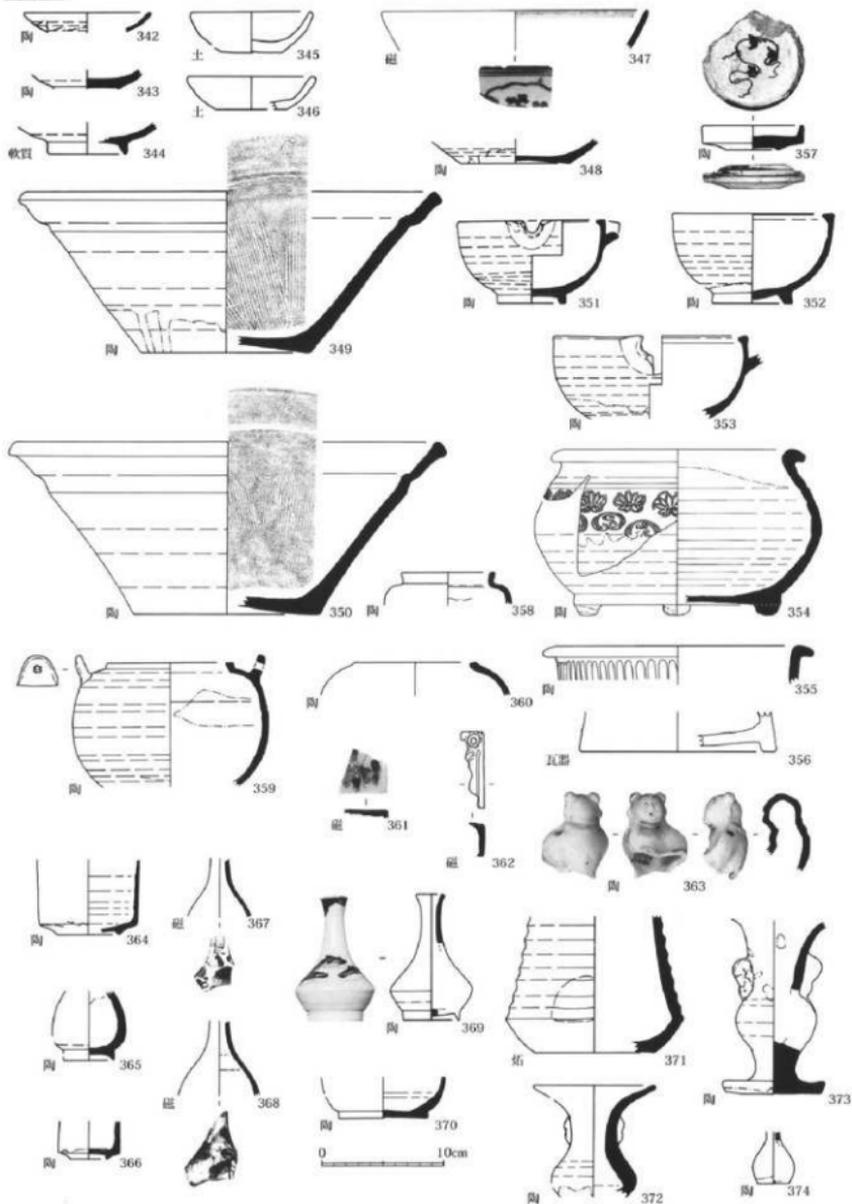


第19図 土器・陶磁器・土製品 (7)



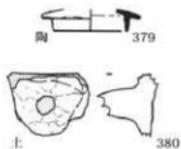
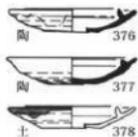
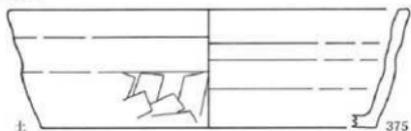
第20図 土器・陶磁器・土製品 (8)

東 2 棟

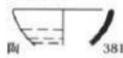


第21図 土器・陶磁器・土製品 (9)

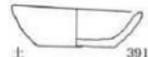
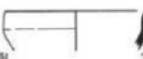
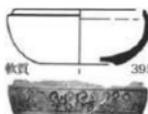
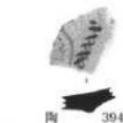
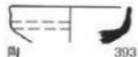
東2棟



土坑 B3



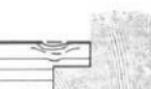
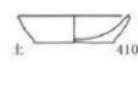
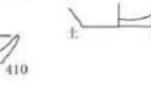
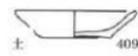
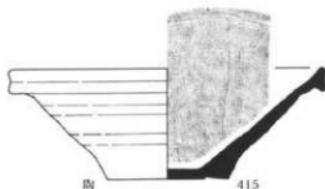
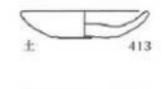
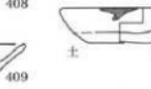
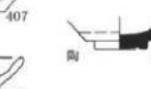
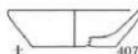
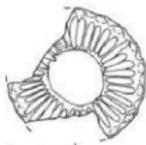
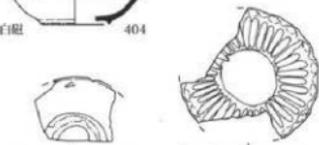
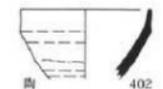
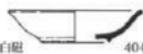
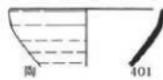
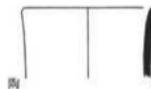
検出面・整地土



東3棟

土坑 B7

検出面・整地土

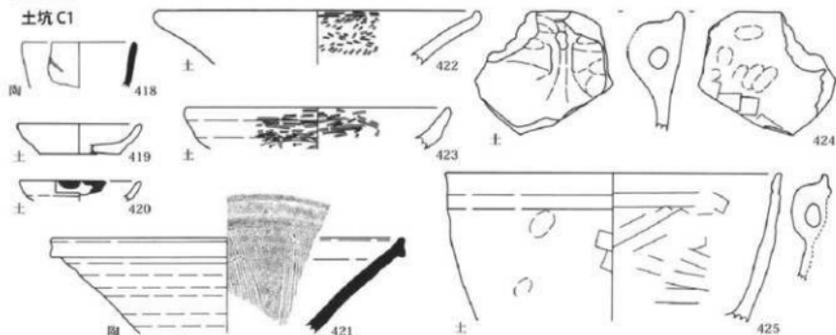


0 10cm

第22図 土器・陶磁器・土製品 (10)

東 4 棟

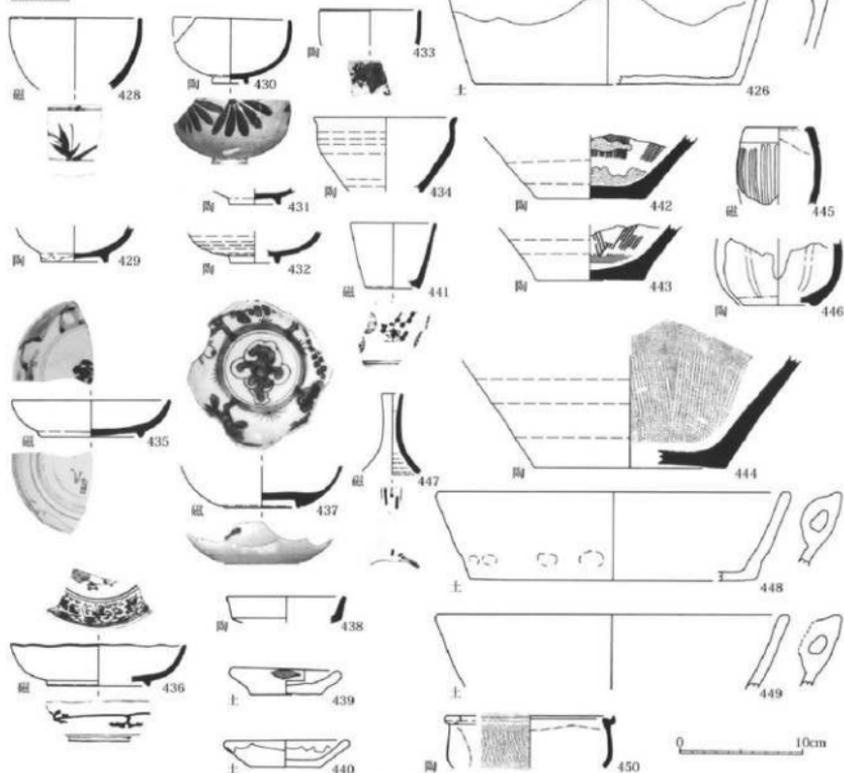
土坑 C1



検出面・整地土

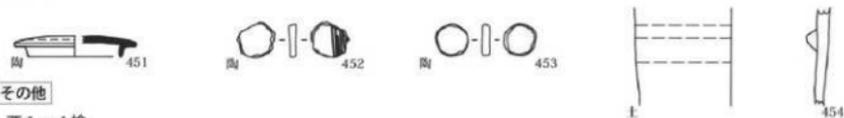


屋敷境



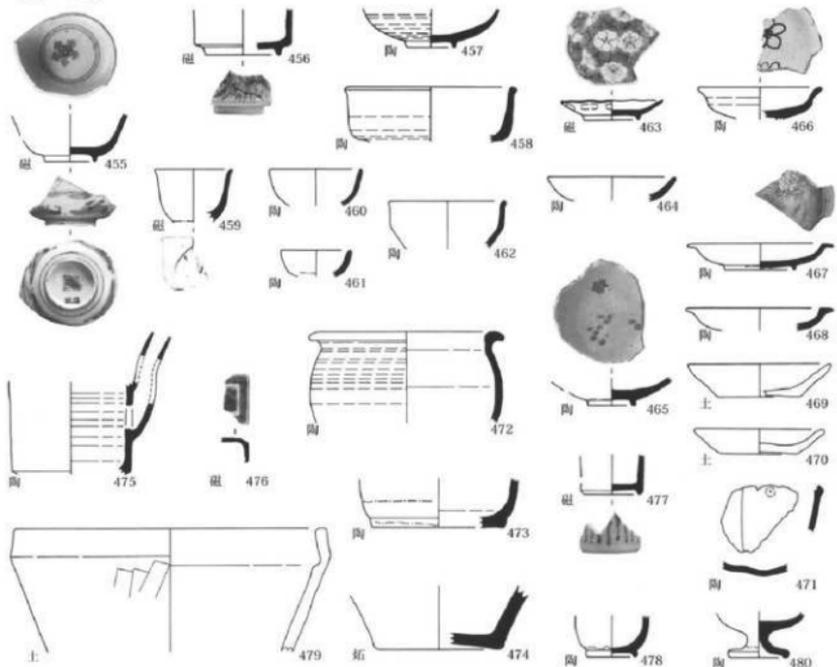
第 23 図 土器・陶磁器・土製品 (11)

屋敷境

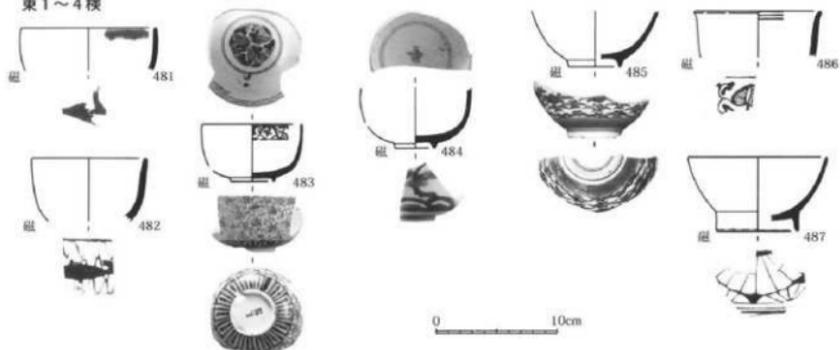


その他

西 1~4 棟



東 1~4 棟

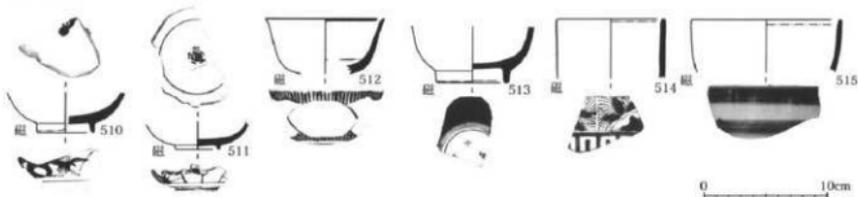


第24図 土器・陶磁器・土製品 (12)

その他



壁・排土



0 10cm

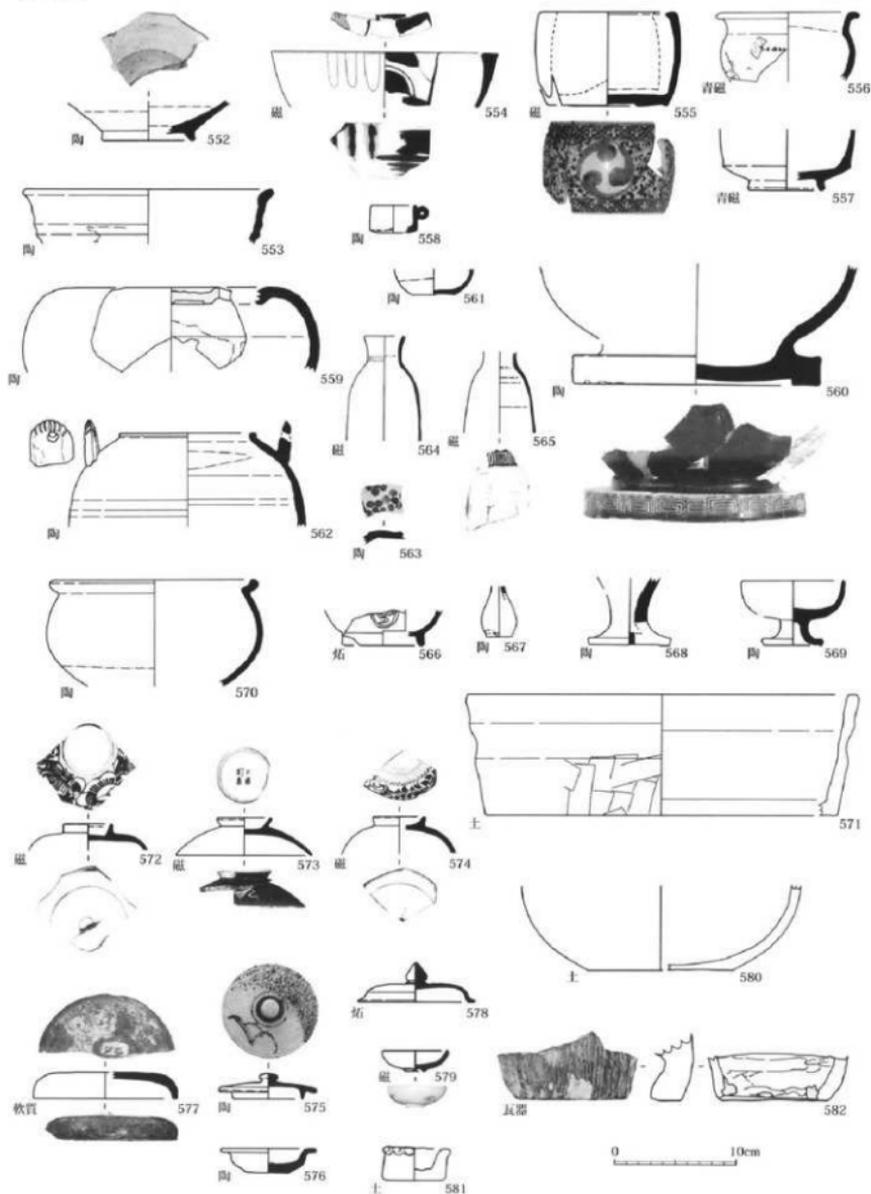
第25図 土器・陶磁器・土製品 (13)

その他



第26図 土器・陶磁器・土製品 (14)

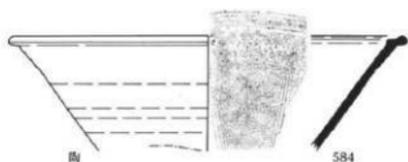
その他



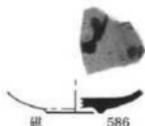
第27図 土器・陶磁器・土製品 (15)

試掘

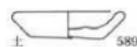
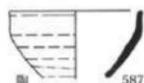
トレンチ1



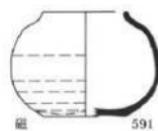
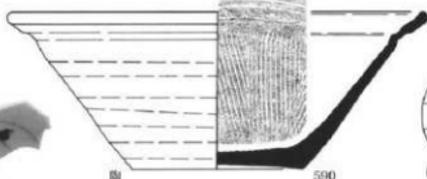
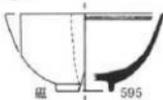
トレンチ3



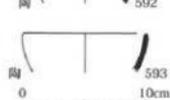
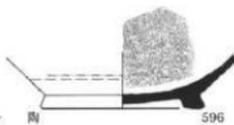
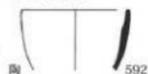
トレンチ4



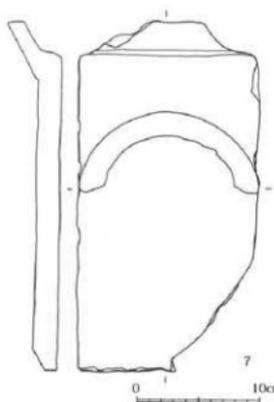
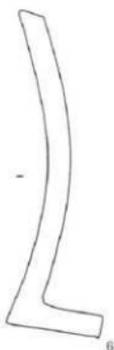
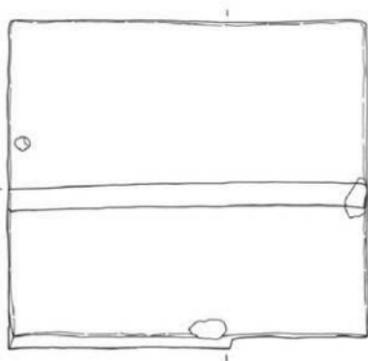
トレンチ6



トレンチ5

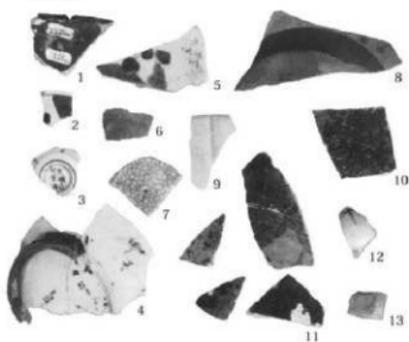


瓦

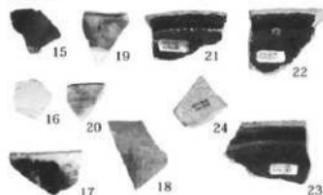


第28図 土器・陶磁器・土製品 (16)、瓦

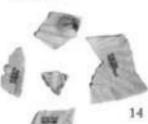
西1検



西3検



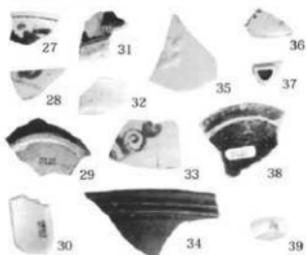
西2検



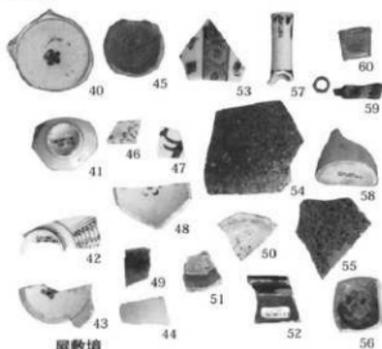
西4検



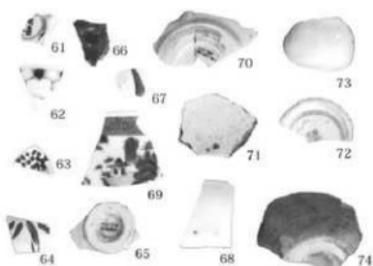
東1検 溝B1



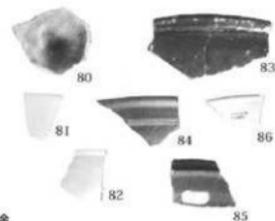
東1検



東2検 溝B1



屋敷境



東2検



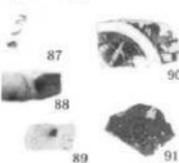
東4検



東3検

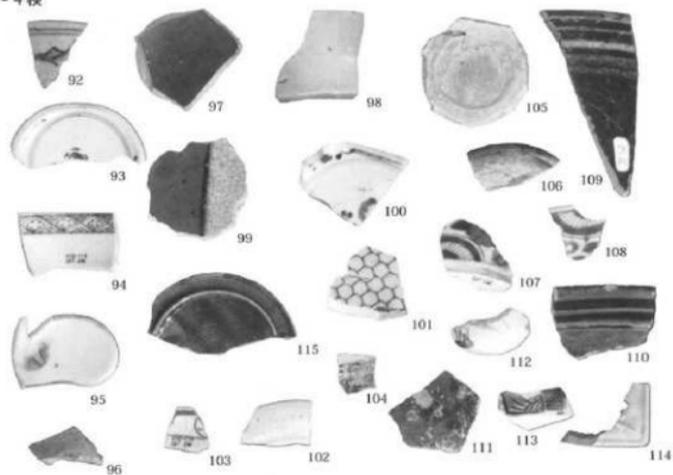


西1~4検

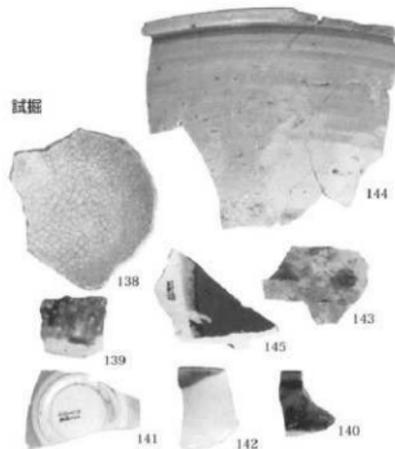


第29図 土器・陶磁器・土製品 (参考資料1)

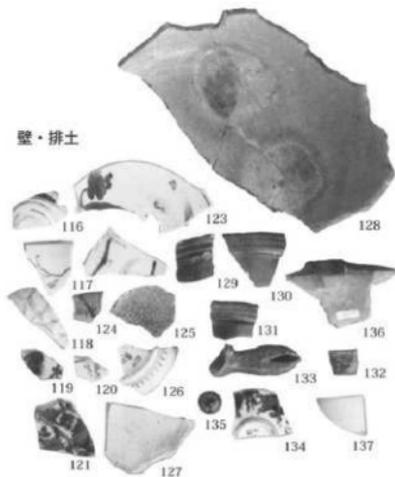
東1~4棟



試掘



壁・排土



0 10cm

第30圖 土器・陶磁器・土製品 (參考資料2)

(2) 石器 (第8表・第31図)

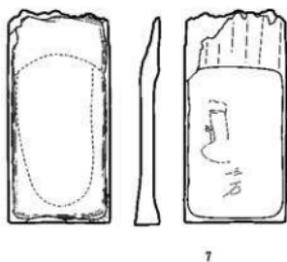
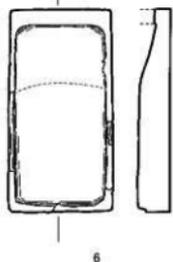
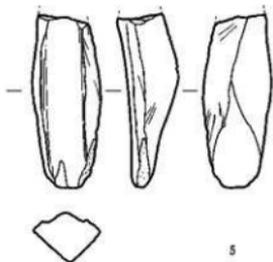
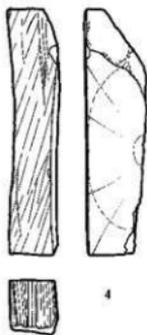
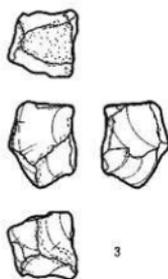
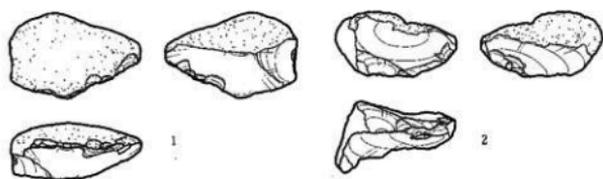
本項では小柳町2次調査にて検出された石器及び石製品を扱う。該当資料は29点でUF1点を除き、いずれも近世以降に属するものと考えられる。火打石9点・砥石9点・硯6点・石盤3点・研磨礫1点が出土し、7点を図示した。

1～3は火打石である。鋭角な縁辺に、潰れを伴った剥離痕が確認できる。1はチャートの円礫を半削し素材とする。2は玉髓を素材とする。周辺河川で採取可能なチャートと異なり玉髓は調査地周辺では採取できず、遠隔地から搬入されたものと考えられる。3は石英を素材とし、サイコロ形状を呈する。今回の調査では石英製の個体が多く見られた。碎片も検出しており遺跡内で分割作業を行っている可能性がある。検出された火打石は伝世品に比べ概して小型である。使用・再生を繰り返すうちに小型化し、役目を終え廃棄されたと考えられる。火打石は調査時に注意していないと廃棄しかねない。火打石はチャート・玉髓・石英等の硬質な石材を素材とする為、これらの石材には注意を払う必要がある。4・5は砥石である。4は泥岩を素材とする置き砥石である。小口面には鋸による切断痕及び折り取り痕が確認される。側面の一部に研磨痕跡が確認できるが、性格は不明である。5は凝灰岩製を素材とする鎌砥石である。平坦な砥面の他に幅の広い断面三角形の研磨痕跡が確認され、鎌以外の使用が予想される。石材から上野砥石の可能性があるが、上州産であることを示す莫莖目と呼ばれる鑿痕は確認できない。6・7は粘板岩製の硯である。産地等の刻印は見られない。7は使用により陸が窪む。筆を置く為であろうか、小口には意図的に凹が付けられている。裏面には覆手があり線刻が多数見受けられる。

第8表 石器一覧

図 番	記号	地区	遺構名	器種	石材	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	
001	A	西1棟	井戸A3	UF	黒曜石	1.7	12.7	26.8	6.3		
009	B	西3棟	土坑B9	研磨礫	砂岩	180.5	70.7	127.4	12.9		
005	A	西1棟	井戸A1	硯	粘板岩	7.5	(42.2)	(21.7)	(5.2)	磨面破片	
007	B	東2棟	溝B1	硯	凝灰岩	35.4	(36.4)	63.2	(10.1)	磨面破片	
011	B	東1棟	溝B1	硯	粘板岩	41.0	(80.0)	53.8	9.4	磨面破片 付着物有り	
025	B	B東	礎トレンチ4	硯	粘板岩	11.1	(31.0)	(40.0)	(9.2)	磨面破片	
5	026a	B	B西	礎トレンチ7	硯	粘板岩	315.6	125.3	63.9	21.5	
7	026b	B	B西	礎トレンチ7	硯	粘板岩	194.5	(127.7)	60.2	17.4	裏面環丁あり 線刻多数 陸形加工
004	A	A西1棟	東平	石盤	粘板岩	21.4	(51.9)	(69.8)	4.4		
013	B	東1棟	溝B1	石盤	粘板岩	49.4	(73.2)	(50.9)	4.8		
018	B	B	1棟	石盤	粘板岩	19.7	(42.6)	(58.6)	4.7	線刻「木」	
5	005	B	東2棟	溝B1	卵石	凝灰岩	126.9	106.7	42.0	36.9	研面7面 上州産?
010	B	東1棟	溝B1	砥石	粘板岩	137.5	(108.4)	(19.0)	42.5		
021	B	B東1棟	塾地土	砥石	凝灰岩	68.4	(80.4)	61.0	(10.7)	筒砥石	
4	022	B	B東1棟	塾地土	砥石	泥岩	303.9	152.0	(28.3)	(38.0)	
023	B	B東1棟	塾地土	砥石	凝灰岩	41.8	(79.6)	43.5	(11.4)		
027	C	C 東照		砥石	凝灰岩	80.6	(57.1)	40.0	26.0	砥面2面 面取り	
004	A	A西1棟	東平	砥石?	凝灰岩	4.1	(59.1)	(19.6)	(4.4)	硯? 破片	
014	B	犀塚		砥石?	砂質片岩	9.3	(98.9)	(24.5)	(2.9)		
023	B	B東1棟	塾地土	砥石?	泥石	2.8	(19.3)	(38.5)	(3.9)	硯? 破片	
002	A	西1棟	検出面 (井戸A3周辺)	破砕礫	石英	11.2	36.4	40.3	9.8		
017	B	屋敷境トレンチ3		火打石	石英	8.8	27.4	20.3	13.0		
1	008	B	東2棟	溝B1	火打石	チャート	17.0	26.4	40.2	18.1	
012	B	東1棟	溝B1	火打石	石英	18.1	20.2	22.6	20.2		
3	015	B	屋敷境		火打石	石英	13.6	26.8	21.1	21.1	
2	019	B	B東1棟		火打石	玉髓	10.5	20.2	37.0	22.9	
024	B	B西1棟	塾地土		火打石	石英	37.5	47.6	26.0	22.0	
006	B	東2棟	溝B1		火打石?	石英	3.1	16.9	20.3	10.9	
016	B	B西1～4棟	塾地土 (屋敷境拡張トレンチ)		火打石?	チャート	75.0	44.6	55.9	27.2	
020	B	B西1棟			火打石?	石英	3.5	16.7	21.4	8.4	

() は残存長を示す



第31圖 石器

(3) 金属製品 (第9表・第32～34図)

今回の調査では、合計79点の金属製品が出土している。器種は多く、キセル、刀具類、釘、吊り金具、ジョウロ、把手、箆筒の錠、鎖、鍋、塵取り、銭貨、針金、銅線、銅板、鉄滓があり、その他に不明品もある。金属種別は鉄と銅(銅を含有する真鍮などの合金を含む)である。実測、拓影は全形をうかがわれるもの、特徴的なものを中心に行い、56点を掲示した。全てが近世以降に使用されたものと思われ、比較的残存状態の良いものが多い。このため、同一製品の木製部分が残存しているものや複数の金属部品が使用時の状態で接しているものも含まれる。以下代表的なもの、特徴的なものについて器種ごとに記述したい。

ア キセル (1～20)

吸口12点、雁首6点、吸口及び雁首1点の合計19点がある。全て金鍍金が施される。このうち5は特徴的な形態をもつ水口キセルの吸口で、断面形は八角形を呈し、背面に「□次(工次・正次?)」の銘をもつ。5を除く他の吸口は肩の付かない形態で、小口に向かって徐々に太くなるものが多い。4は中央部で急に幅が広がり、小口際で僅かにつぼむ。雁首の形状は脂返が大きく湾曲して高く持ち上がるものが4点(14・16・17・19)と、小さく湾曲し、高く持ち上がらないもの4点(13・15・18・20)がある。火皿と首部の接合部に補強帯があるものは2点(17・19)である。雁首の線刻装飾は13・15・17の3点に施されている。15は背面に梅の小枝と思われる彫刻、13・17の2点には連続する線刻が認められる。13は雁首のラウ側に、17は火皿と首部の接合部補強帯にある。13は残存状態がよく、雁首内部には差し込まれたラウの竹管が残る。特徴的な状態で出土した17は吸口部に雁首部が挿入されていたため、分離せず掲示している。法量・形状などから同一製品の可能性が高く、廃棄の際に意図的に組み合わせたものと思われる。

イ 刀具類 (21～25)

7点出土し、柄付刃物(24)、小柄(25)、刀装具(21～23・31)を提示した。24は木製の柄に装着された状態で出土した。25の片面には巴紋を配した唐草文が陽刻される。23は切羽で一部が欠損している。外縁側面には細かな刻みが施されていたものと思われる。

ウ 箆筒の錠 (34)

34は施錠時の状態で出土した。残存状態が良好で、現状でも表面のつまみ部分、裏側構造部の二枚ばねが僅かに可動する。変形箇所を歪みを直せば開錠時の状態に作動する可能性が高い。金鍍金が施される。

エ 鎖 (36)

36は4つの環が連結され、中央部がくびれた楕円環3連の片端に円環1つが繋がる。中央部がくびれた楕円環は、振れや絡みを避けるための形状と思われるが、用途は不明である。

オ 鍋 (54・55)

55は鋳物製品である。木製の蓋を被せ正位の状態出土した。鍋の蓋は木製品の59である。54の鍋つる部品が本体口縁部の円孔に差し込まれていた。発見時、鍋の中には土や砂の堆積はほとんど無く、水が溜まっていた。出土状況からする付の鍋に木製の蓋を被せたままの状態に廃棄したものと思われる。

カ 塵取り (56)

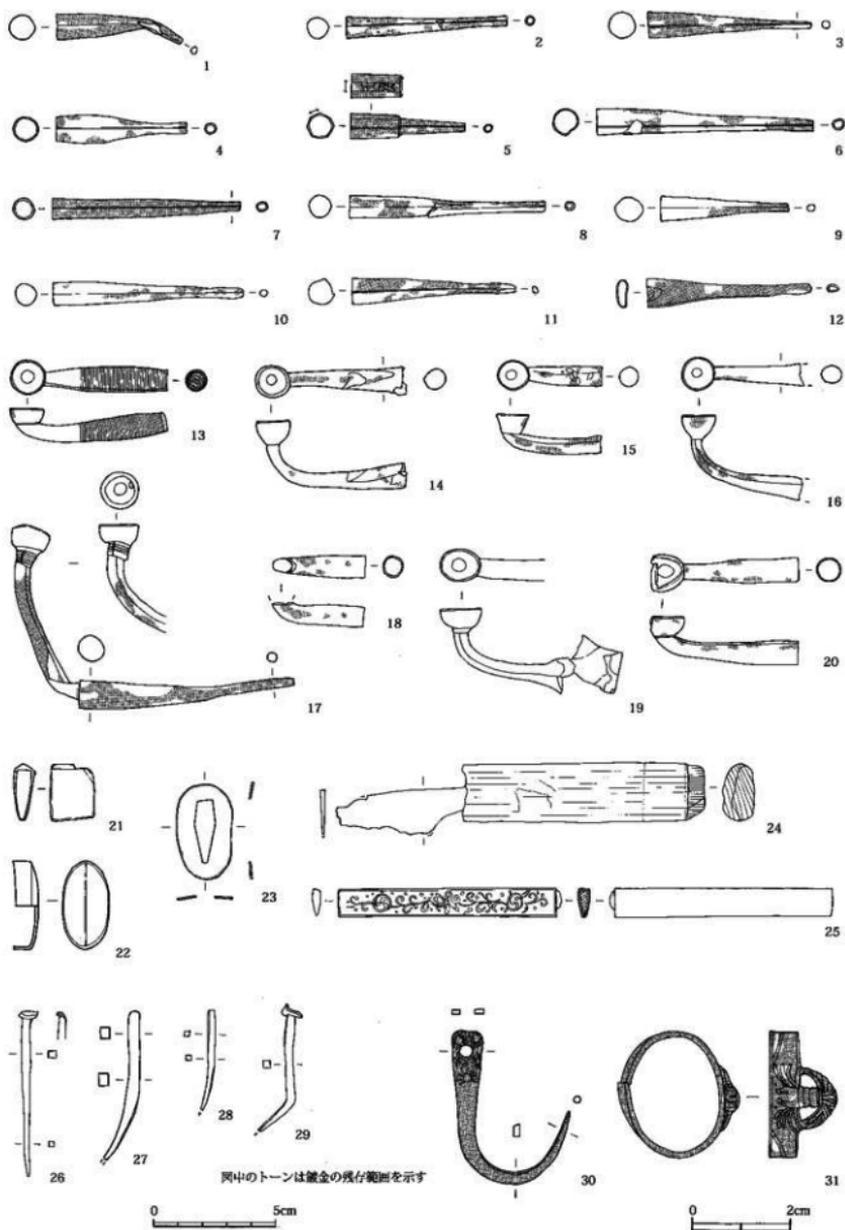
56は竹製の柄が装着された状態で出土している。部品の接合は、本体側は円筒状接続部品の片側を潰し折り曲げて3ヵ所を糸で留め、竹柄側では竹の柄を差し込み、1ヶ所を糸で留めている。

キ 銭 (46～53)

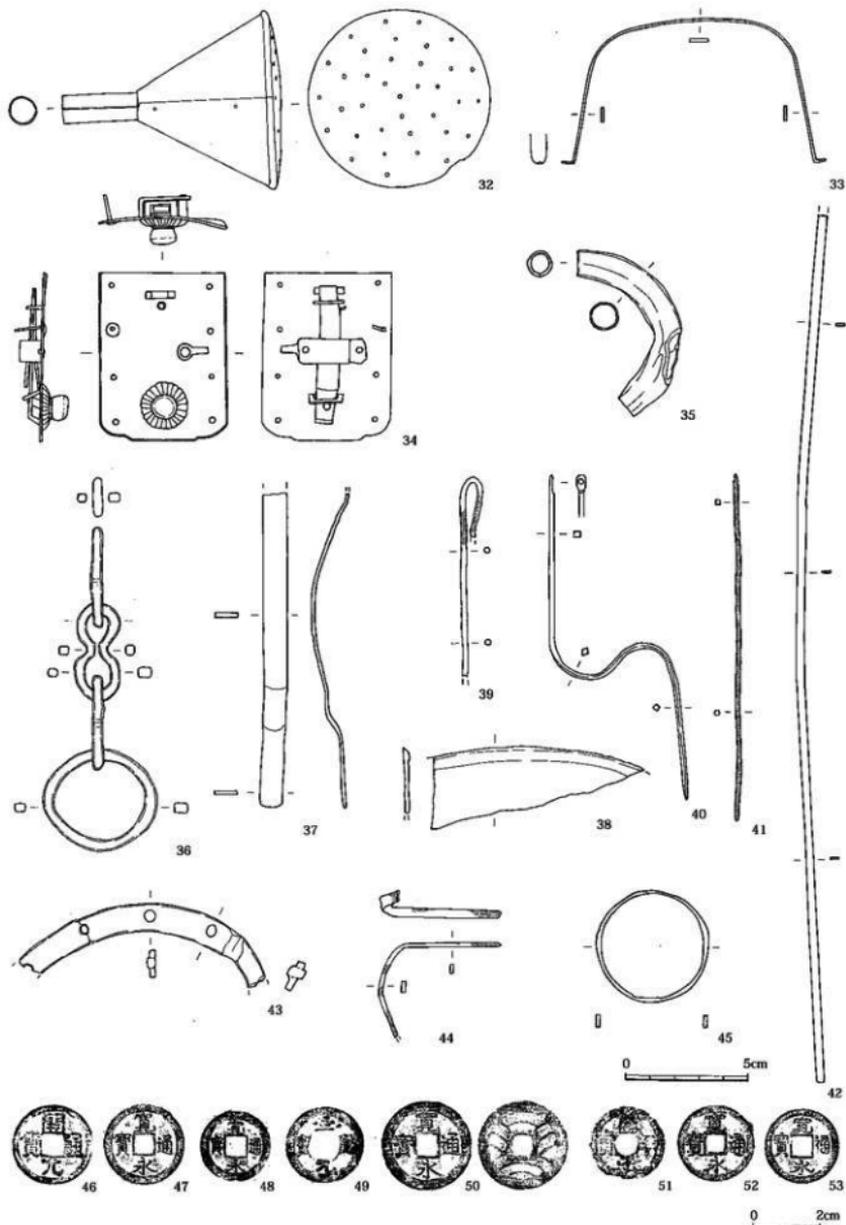
8点が出土し、拓影を提示した。うち5点が寛永通寶(47・48・50・52・53)、開元通寶(46)、咸平元寶(51)、景德元寶(49)が各1点ある。

第9表 金属製品一覽

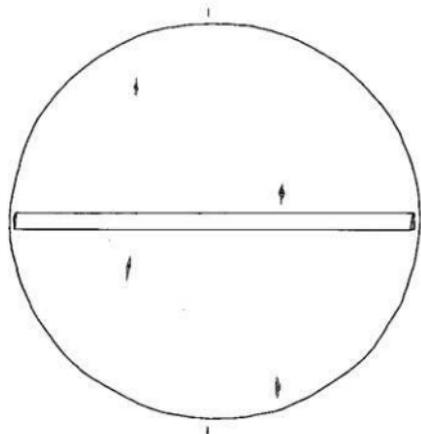
№	割合	検出箇所	出土地点1	出土地点2	材質	器名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備 考
1	32	西1棟	井戸A1		銅	ジョウロの口	88.5	7.6	74.2	47.2	完全 破状の部品を成形して接合
2	33	西1棟	井戸A1		銅	把手	106.4	60.0	7.6	13.8	
3	1	西1棟			銅	キセル取口	(53.3)	9.8	10.3	2.1	金鍍金 兜形
4	13	西1棟	西6		銅	キセル覆首	63.5	13.6	14.6	8.0	金鍍金 背面に装飾 内部にラウ状残存
5	26	西1棟			銅	取口	(71.8)	7.6	3.3	3.4	
6	7	西1棟			鉄	子刺	56.4	29.5	0.7	2.0	
7	8	西1棟	豊地土		銅	小銅	(229.7)	4.2	4.2	18.2	長大径は片端部で一方の端部は尖る
9	2	西2棟	豊地土		銅	キセル取口	65.2	9.1	8.9	2.8	金鍍金 兜形
10	14	西2棟	豊地土		銅	キセル覆首	60.3	13.9	29.6	5.9	金鍍金 背面の一部に切刃痕あり
11	30	西2棟	豊地土		銅	取り金品	31.7	23.1	1.1	1.9	金鍍金 上部部に装飾あり
12	46	西2棟	豊地土		銅	開元通貫	24.7	24.6	1.2	3.3	兜形
13	3	西3棟	土坑A7		銅	キセル取口	65.7	10.5	10.4	2.9	金鍍金 口付短欠損
14	27	西3棟	土坑B9		鉄	釘	(84.0)	4.9	4.9	6.0	部欠損
15	21	西4棟	溝B1		銅	刀身	23.6	17.6	8.4	7.5	兜形 扁
16		西1~4棟	豊地土	屋敷境放棄トレンチ3	銅	銅板	25.4	24.4	0.8	2.6	銅板を片面に折りかえす
17	4	東1棟	溝B1		銅	キセル取口	53.1	11.5	11.4	9.8	金鍍金 兜形
18	5	東1棟	溝B1		銅	キセル取口	46.9	10.0	10.0	6.1	金鍍金 兜形 水口キセル
19	6	東1棟	溝B1		銅	キセル取口	87.2	11.1	10.2	7.5	金鍍金 兜形
20	7	東1棟	溝B1		銅	キセル取口	76.6	8.7	8.7	9.9	金鍍金 兜形
21		東1棟	溝B1		鉄	釘	24.3	3.5	1.3	0.2	断面は基部に土塊に繋ぎ入れ折り曲げる
22	28	東1棟	溝B1		鉄	釘	(42.0)	3.1	2.1	1.0	部欠損
23		東1棟	溝B1		銅	不明	63.9	38.1	33.1	20.5	クワの口金？調整ネジが残存し可動
24	34	東1棟	溝B1	№4	銅	籠筒の錠	69.1	61.8	19.6	47.9	金鍍金 背面に二枚穴が残存
25	54	東1棟	溝B1	№5	鉄	錘のつら	342.0	157.0	6.3	97.1	27と同一製品
26	56	東1棟	溝B1	№5	鉄	錘	276.0	143.0	3.7	115.6	28と同一製品 水鉋の歯を伴って出土
27		東1棟	溝B1		銅	不明	23.6	23.1	0.5	0.5	
28	32	東1棟	溝B1		銅	刀身	36.1	19.8	9.6	10.9	兜形 扁？
29		東1棟	溝B1		鉄	不明	(112.5)	15.4	0.7	4.6	兜形 刀身扁
30		東1棟	溝B1		銅	不明	37.2	27.9	6.2	5.6	レンズ状ガラス製部品と一体化
31		東1棟	溝B1		銅	不明	35.5	14.4	12.9	2.2	穿孔あり
32	8	東1棟			銅	キセル取口	79.4	9.3	9.3	7.1	金鍍金 一部欠損
33		東1棟	東		銅	銅板	(97.6)	(92.5)	(7.2)	33.8	
34	47	東1棟	№3		銅	覆元通貫	25.1	28.1	0.8	3.1	兜形 新 初跡年1668年
35	45	東1棟	№3		銅	覆元通貫	21.8	21.8	1.9	2.7	兜形 新 初跡年1668年
36	49	東1棟	№3		銅	籠筒のつら	22.7	22.7	1.9	2.9	兜形
37	50	東1棟			銅	覆元通貫	27.8	27.7	0.9	3.9	兜形 新 初跡年1668年
38	19	東1棟	豊地土		銅	キセル取口	73.0	29.8	36.9	8.3	金鍍金 背面は破断し欠損
39	18	東1棟	豊地土		銅	キセル覆首	37.8	9.5	9.8	5.9	金鍍金 火皿は欠損
40	56	東1棟	豊地土		鉄	籠筒のつら	311.0	143.0	20.9	45.6	竹製の柄に装飾
41	37	東1棟	豊地土		鉄	不明	(133.0)	9.6	1.7	17.3	片端は装飾
42	43	東1棟	豊地土		鉄	不明	121.0	11.7	6.8	12.6	5つ穿孔の口金2つに銅製の籠筒
43		東1棟	豊地土		銅	銅板	(138.0)	6.1	1.4	2.6	
44		東1棟	豊地土		銅	針金	(260.0)	0.8	0.8	1.6	
45		東1棟	豊地土		銅	針金	(120.0)	0.7	0.7	0.5	両端を折り返し、おびて結束
46		東1棟	豊地土		銅	不明	37.6	9.1	10.7	3.2	金鍍金 円形の孔2、長方形の孔1あり
47	10	東2棟	溝B1		銅	キセル取口	77.0	8.6	9.4	5.4	金鍍金 兜形
48	11	東2棟	溝B1		銅	キセル取口	66.1	9.9	9.7	3.5	金鍍金 兜形
49	38	東2棟	溝B1		鉄	不明	85.1	29.0	2.6	15.3	
50	44	東2棟	溝B1		銅	不明	(81.5)	5.0	2.4	2.1	金鍍金
51	39	東2棟	溝B1		鉄	不明	(111.5)	2.7	2.1	3.7	金鍍金
52		東2棟	溝B1		鉄	押	69.3	38.2	32.6	55.2	
53	15	東2棟			銅	キセル覆首	42.6	12.0	12.6	5.8	金鍍金 背面に飾りの文様
54	16	東2棟			銅	キセル部分	51.8	13.0	34.9	5.2	金鍍金 円形・部欠損
55	9	東2棟			銅	キセル取口	51.7	10.9	9.9	3.2	
56	24	東2棟	豊地土		鉄	竹付芳物(刀柄)	51.0	18.3	2.6	(15.0)	短元通貫 芳物 木製の柄装飾
57	25	東2棟	溝B1		銅	小銅	92.1	12.1	5.1	15.6	片端に穿孔ありの装飾あり
58	51	東2棟	検出面		銅	浅平光背	23.5	22.9	0.9	1.6	扁鏡
59	17	東1~2棟			銅	キセル	(178.0)	15.3	23.4	18.7	金鍍金 裏口に欄干が挿入された状態
60	23	東1~2棟			銅	刀身	39.0	22.7	7.0	9.5	9と同一・部欠損
61	49	東1~4棟	豊地土	溝B1北棟トレンチ1	鉄	不明	(186.3)	3.7	2.0	3.9	9と同一？ 片端に円形の孔、他端は尖る
62	35	東1~4棟	豊地土	溝B1北棟トレンチ1	鉄	不明	(90.0)	43.6	12.6	18.0	兜形
63	43	東1~4棟	豊地土	溝B1北棟トレンチ1	銅	不明	356.0	3.5	0.8	7.6	片端は籠筒 色黒め金品
64	51	東1~4棟	豊地土	溝B1北棟トレンチ1	銅	不明	141.6	30.4	1.4	3.3	片端は尖り、他端は面をなす
65	31	東1~4棟	東	トレンチ2西側	銅	刀身	36.7	34.7	13.0	1.5	薄手の扁鏡
66	36	東1棟	東	トレンチ2西側	鉄	籠筒	134.5	46.4	15.7	85.9	4層が残存
67		東1棟	東	トレンチ2西側	銅	籠筒	77.3	49.8	1.5	18.6	
68		東1棟	東	トレンチ2西側	鉄	籠筒	59.8	35.5	3.9	7.6	
69	45	東1棟	東	トレンチ2西側	鉄	不明	45.6	46.4	5.3	6.4	リング状製品
70		東1棟	東		鉄	釘	65.4	3.7	2.9	2.9	部欠損
71	20	東1棟	北		銅	キセル覆首	69.7	15.4	20.4	9.4	金鍍金 火皿一部欠損
72	29	東1棟	北		鉄	釘	(60.6)	8.6	4.7	2.6	断面は基部に土塊に直を嵌せたもの
73		東1棟	北	東	鉄	釘	(57.5)	5.8	2.6	1.9	断面は基部に土塊に繋ぎ入れ折り曲げる
74		東1棟	北	西	銅	刀身	40.9	14.0	4.4	3.6	帯の装飾
75		東1棟	北	東	鉄	不明	235.9	(10.2)	4.9	14.8	両端部欠損
76		東1棟	北	西	銅	不明	17.7	13.4	5.2	0.9	金鍍金 筒状製品の破片
77	12	東1棟	溝B1		銅	キセル取口	66.5	12.1	8.6	6.3	金鍍金 兜形
78	52	東	東		銅	瓦水通貫	23.6	23.6	1.8	4.1	兜形 古 初跡年1668年
79	53	東	東	トレンチ5	銅	覆元通貫	23.2	23.1	1.0	2.3	兜形 新 初跡年1668年



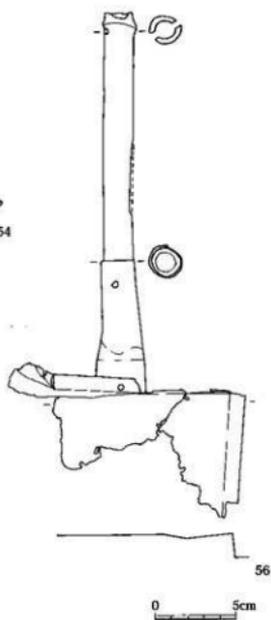
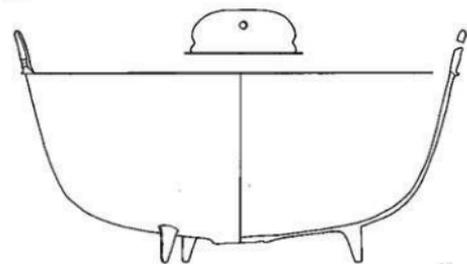
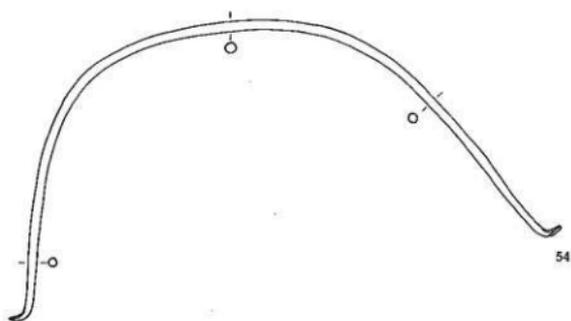
第32図 金属製品 (1)



第33圖 金屬製品 (2)



木製品 59



第34図 金属製品 (3)

(4) 木製品・骨角器 (第10表・第35～41図)

今回の調査では386点の木製品と4点の骨角器が出土した。この内漆器19点、木器67点、骨角器4点を図示報告する。漆器は椀と椀蓋である。木器は栓・狭匕・匙・箸・杓子・竿秤入れ・櫛・傘・曲物(含柄杓)・指物・円板・蓋・下駄・膳・都知・荷札・紐締め具・人形・鉞・その他不明品がある。骨角器は櫛払い・笠鞆・筥・歯牙製品が見られる。

漆椀(1～13) 内面は下塗りを黒漆で上塗りを赤漆、外面は黒漆のものが目立つ。朱および朱色の漆で文様が描かれたものが5点(1・3・5・6・11)ある。また、12の東契斗の変形文様は金によって描かれたものと推定される。底部・高台内に文字の書かれたものが4点(6・7・8・11)ある。この内7は「余仕入」と判読できる。これはこの椀の仕入先が「余」であったことを示すもので、伊勢町の発掘調査の際出土した木簡に「余」の文字が記されたものがある。また6は「□□仕入」と判読できるが、仕入先を示す文字が不明である。8・11の文字は判読できていない。

漆椀蓋(14～19) 椀同様に、内面を下塗り黒漆で上塗りを赤漆、外面は黒漆のものが多く、15は巴文様、16は菊花文様、17はススキの文様がそれぞれ描かれている。また19は丸に抱茗荷と推定される文様がある。14は内面に漆が付着しており、漆入れに転用された可能性が高い。18はつまみ(高台)部分がない。胴部に稜線があり、そこから垂直に立ち上がるなど他と形状が異なり、蓋であるかは断定できない。

栓(20～27) 削り出しによって製作された徳利等の栓を主とする。ただ27のみ丸木芯持ちで、一端を削りにより尖らせている。20には墨書が認められ「丸口」と判読される。

狭匕(28・29) 『和漢三才図会』の「庖厨具」に載せられている、味噌をこそぎすくう道具である狭匕(せかい)と形状が同じものである。

匙(30・31) 30は小型で食事に使用されたものと推定される。31はやや大型であるがすくう道具として捉えられる。この点杓子との区別が難しい。

箸(32～38) 削り出しによる棒状のものが主であるが、36のように柾目の角材状のものもある。この他にも多数の箸が出土しているが全て白木で、漆を塗ったものは見られず、使い捨ての箸と推定される。

杓子(39) 長さが30cmを超える大型の完形品で、把手下方に△状の孔があけられている。用途としては多量の飯を混ぜるおよびすくうなどに使われた飯匕(いいかい)であると推定される。

竿秤入れ(40) 竿秤を入れるナスビ型の箱の蓋である。表面は黒く変色しているが、赤外線照射により墨書がなされていることが確認できた。一文字であるが判読はできなかった。

櫛(41・42) とともに横櫛である。41は棟形状を呈する。42は小片であるが朱で下塗りをし、黒漆で上塗りをしており、篋状の文様が描かれている。

傘(43) 手法は朝物で、番傘の先端部分と推定される。骨を入れる部分に漬れがみられる。

曲物・柄杓(44～47) 44はクレゾコの曲物で、底板と木釘で接合されている。全体に黒漆が塗られている。45は柄杓の柄を装着する部品である。46は柄杓で柄が残存している。47は径が14×13.5cmあるが側面に柄の孔がありやや大きめの柄杓と推定される。

指物(48) 側板は5片を数える。周囲にタガの痕跡が認められる。柄装着の孔があり樽型の柄杓と推定される。

円板(49～58) 49・51・54は小型の円板で椀皮の留め具が認められる。52は蒸籠の底板で、中央に孔があり周辺が焦げている。53は花卉状の焼印がある。50・56は接合式の大型の円板である。56には栓を装着したと推定される孔があり、大型の樽の蓋であった可能性が高い。55も接合式円板である。側面に木釘痕があり、曲物の底板と判断される。57には2～3文字の墨書があるが判読はできていない。58は栓が装着されており、小型の樽などの蓋であったと推定できる。

蓋 (59～62) 59は鉄鍋(54・55)の蓋である。鉄鍋に被さった状態で出土している。60～62は外周を削り段差をつけていることから蓋と判断した。60は径8mmの栓が装着され、側面に小孔が2箇所ある。61・62は中央に小孔がある。

下駄 (63～74) 台楕円形連歯下駄(63・66・67)、台方形連歯下駄(64・65・69・70・73)、台方形割り下駄(68)、台楕円形差歯下駄(71・72)に分類できる。74は連歯下駄であるが、後緒孔部から側面を斜めに加工している。連歯下駄は奈良時代、差歯下駄は平安時代までにその存在が確認でき、伝統的な手法の下駄である。ただ、連歯下駄で台より幅の広い歯をもつものは、差歯の類例は平安時代以降にあるが、連歯下駄は確認できていない。よって69は江戸期になってから生産された高下駄の可能性がある。また差歯下駄は歯装着のホゾ孔が貫通しないタイプであることから陰卯下駄に分類できる。68の割り下駄は16世紀末以降に出現する、近世の特徴的な下駄である。連歯下駄の64・66は台上面から前歯を貫通する小孔がみられ、折れた歯を補修したものと推定される。65は踵の部分に「X」の刻書がみられる。

膳 (75・76) 75は膳の天板で脚装着用の溝がある。ほぼ正方形であるが四隅をカットしている。外周に木釘の跡が多数認められ、転用されていた可能性がある。両面に黒漆が塗られている。76は脚板で前面に黒漆が塗られている。

都知 (77) 横楕である。叩きによる目減りが認められる。

荷札 (78) 四隅が隅切りされている。「四百枚」と判読できる。この両脇に文字の痕跡があるが、消されており判読できない。裏面にも墨書がある「仕入」と読めそうだが断定はできない。

紐締め具 (79) 8の字形を呈する。紐を通し締めるための道具と推定される。

人形 (80・81) 80は顔～首のみで、胴体に装着されたものと推定される。目の部分を切り込みで表現しているが、はっきりとした顔の表現がみられない。81は全身像である。目と口を切り込みしている。胴体は東帯風の着物を着用した表現となっている。

鍬 (82～84) 全て鍬先で、鉄製の刃部は残存していない。82は方形、83はU字形を呈し、中央やや上寄りに柄を装着する方形孔があげられている。83には鍬先刃部の装着圧痕が明瞭に残っている。84は2又の鍬先である。柄の装着孔がみられず装着方法は不明である。鉄分が付着している。

不明品 (85・86) 85は8の字形を呈し中央に孔がある。裏面2箇所に脚がつく。86は柄の把手の可能性もあるが、やや薄手である。

櫛払 (89) 板状に作られ、上部に刷毛を通す1.0cmの透かしが一つあり、中央部は透かしによって七曜紋が開けられている。全体を丁寧に磨いており、中央部透かしは縁を調節するために若干削られている。ほぼ完形だが、上端の一部は刃物による切り取り痕が認められ、櫛部の一部は欠損している。

櫛払の形状には2種類あり、板状と歯ブラシ状がある。本次調査で出土したものは前者にあたり、透かし等の装飾意識が強く婚礼調度品であると考えられる。その透かしは家紋である可能性が高く、両家の家紋を施す場合、嫁ぐ側の家紋のみを施す場合など形態は様々である。

笠鞆 (90) 楕円形状を呈し、ほぼ完形である。片面の一部に粗雑な加工が認められ、全体は平滑に仕上げられている。中央に0.9cmの孔が2つあり、一つの孔は使用により一部変形している。

鞆 (こはぜ) は笠鞆と鞆鞆が対になって機能するもので、箒手等を留めるために使用していたものである。鞆を使用することは紐を結ぶことよりは容易であり、一人でも締められ、解けることもない。

篋 (87) 角製で、内外面ともに黒色。断面は蒲鉾状で片刃がつけられており、片面にはススのような付着物がある。全体の形状は不明であるが、断面の形状や材質から載縫用の篋と推測される。

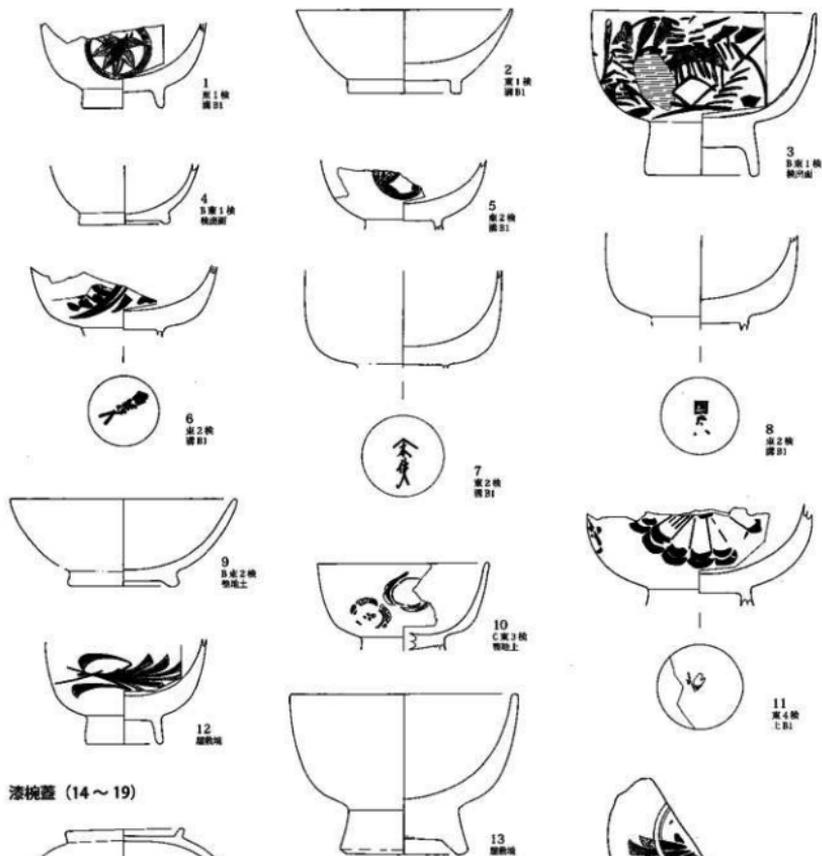
歯牙製品 (88) 外面は暗褐色～黒色、内面は黒色。材料は中大型犬の上顎中切歯だと推測される。端部は共に欠損しており、一部打ち欠いた痕跡が認められる。製品としての種類、用途は不明である。

第10表 木製品・骨角器一覽

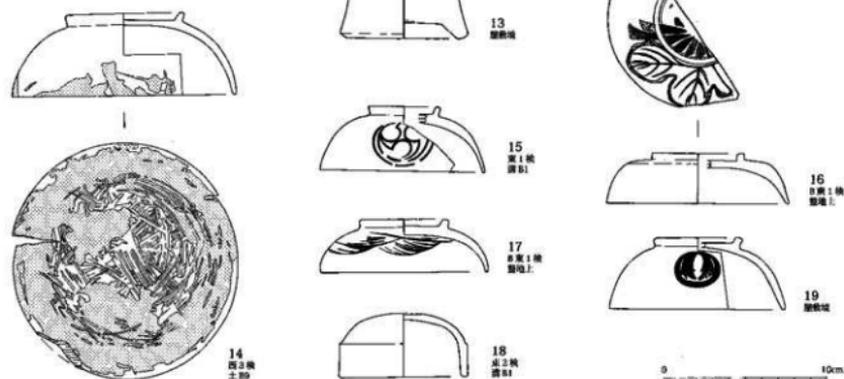
國産地	種別	種出	産地	登録番号	種名	手法	寸法(㎝)	備考
1	B	東1棟	講B1	A-EI-112	板		底5.0	内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆の棧 米で文様3箇所
2	B	東1棟	講B1	A-EI-110	板		底5.2	内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆
3	B	東1棟	物出函	A-B1-269	板		口13.2・底6.8	高5.2 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆
4	B	東1棟	物出函	A-B1-308	板		口13.6・底7.0	高10.1 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
5	B	東2棟	講B1	A-E2-189	板		底7.0	高台部 口縁部 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
6	B	東2棟	講B1	A-E2-192	板			口縁・つまみ文様 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
7	B	東2棟	講B1	A-E2-190	板			高台部 口縁部 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
8	B	東2棟	講B1	A-E2-188	板			高台部 口縁部 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
9	B	東2棟	聖徳寺	A-E23-342	板		口部13.8・底6.7	高5.4 口縁大あく文様 内面下張り黒漆 上張り赤漆の棧 外面黒漆
10	C	東3棟	聖徳寺	A-E23-367	板		口14.0	高台文様 内外面下張り黒漆 上張り赤漆の棧 外面黒漆 赤色の棧で文様
11	B	東4棟	七柱B1	A-E24-313	板			口縁部・高台部文様 内面下張り黒漆 上張り赤漆の棧 外面黒漆 赤色の棧で文様
12	B			A-E25	板		底4.7	口縁部 高台部文様 内面下張り黒漆 上張り赤漆の棧 外面黒漆 赤色の棧で文様
13	B			A-E26	板		底4.7	口縁部 高台部文様 内面下張り黒漆 上張り赤漆の棧 外面黒漆 赤色の棧で文様
14	A	西3棟	土坑B9	A-W3-59	蓋		口13.7・つまみ6.9	高10.0 蓋 高台部 口縁部 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
15	B	東1棟	講B1	A-EI-111	蓋		口10.1・つまみ4.4	高5.1 蓋 高台部 口縁部 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
16	B	東1棟	聖徳寺	A-B1-359	蓋		口11.0・つまみ5.5	高3.1 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
17	B	東1棟	聖徳寺	A-B1-307	蓋		口10.3・つまみ5.5	高5.3 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
18	B	東2棟	講B1	A-E2-173	蓋		口17.8	高4.4 蓋 高台部 口縁部 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
19	B	東2棟	聖徳寺	A-E25	蓋		口10.8・つまみ5.4	高3.2 内面下張り黒漆 上張り赤漆 外面黒漆 赤色の棧で文様
20	A	西1~4棟	聖徳寺	A-W1-1	柱		上3.2・下2.5	高8.7 内面 使用痕あり 継ぎ付蓋? 蓋蓋? 丸口
21	A	西2~4棟	聖徳寺	A-AW2~4-266	柱		上3.1×3.3・下2.2×2.0	高3.0
22	B	東1棟	講B1	A-EI-121	柱		上2.8・下2.0	高3.9 継ぎ付蓋? 使用痕あり
23	B	東1棟	物出函	A-B1-302	柱		上2.6×2.5・下1.7×1.7	高6.7 蓋
24	B	東2棟	講B1	A-E2-146	柱		上3.2・下2.7	高4.4 蓋
25	B	東3棟	講B1	A-E2-148	柱		上2.9・下2.2	高4.1 蓋
26	B	東2棟	講B1	A-E2-168	柱		上3.2・下1.8	高5.1 継ぎ付蓋
27		試掘トレンチ1		A-EI-1-379	柱?		上3.5×3.1	高5.1 継ぎ付蓋
28	A	西3棟	土坑B9	A-W3-60	竪石		長(20.1) 2.6	高4.0 3 一編文様
29	B	東1~4棟	聖徳寺	A-EI-1~4-332	竪石		長(14.0) 2.8	高0.8 継ぎ付蓋のたまり一編文様
30	B	東2棟	聖徳寺	A-BW2-205	竪石		長(15.0) 2.7	高1.1 継ぎ付蓋のたまり一編文様
31	B	東2棟	講B1	A-E2-167	竪石		長(20.8) (6.9)	高1.0 継ぎ付蓋のたまり一編文様
32	A	西1棟	物出函	A-AW1-239	蓋		長24.9	高0.8×0.7 山山 蓋文様
33	A	西1棟	物出函	A-AW1-240	蓋		長25.2	高0.8×0.6 山山 蓋文様
34	A	西1棟	物出函	A-AW1-248	蓋		長(18.0)	高0.7×0.5 山山 蓋文様
35	A	西3棟	土坑AS	A-W3-15	蓋		長(26.5)	高0.7×0.5 山山 蓋文様
36	A	西3棟	土坑AS	A-W3-16	蓋		長27.9	高0.7×0.5 山山 蓋文様
37	A	西3棟	土坑AS	A-W3-18	蓋		長27.9	高0.6×0.6 山山 蓋文様
38	A	西2~4棟	聖徳寺	A-AW2~4-285	蓋		長(19.2)	高0.7×0.5 山山 蓋文様
39	C	東3棟	聖徳寺	A-AW2-988	仰子		長13.7 11.0	厚0.8 状態 形跡下方への孔
40	B	東2棟	講B1	A-E2-178	仰子		長(20.6) 9.1	厚1.3 アス状の形跡 蓋蓋あり 平射入れの蓋
41	B	東2棟	上坑B9	A-W3-60	仰子		長2.5 7.3	厚1.2 状態 継ぎ付
42	B			A-E27	蓋		長(1.3) (2.3)	厚0.4 状態 継ぎ付の片 下張り米 上張り黒漆 米で文様の文様
43	A	西3棟	土坑B9	A-W4-82	蓋		径2.0×6.5	高4.0 内面 全体に黒漆
44	A	西3棟	土坑B9	A-W3-51	蓋		径8.5	高4.0 内面 全体に黒漆
45	B	東1棟	講B1	A-EI-127	柄杓		長(12.0) 3.2	高1.8 柄杓 蓋の蓋

地区	抽出頭	遺構	整理番号	種類	手法	尺・口幅・寸法	厚・高	備考
46 B	東4棟	土坑B1	A-E4-215	甕	収材(収目)	径8.9	高さ6.6	植物柄 柄の残存
47 B	土坑B1	A-E4-216	甕	収材(収目)	径14.0×13.5		高さ5.0	柄の孔あり 柄付?
48 A	試掘トレンチ	A-E4-228	動物	骨	L118.8・底15.3		高さ0.6	1/2穴横 タガの痕跡 明瞭な孔 柄付
49 A	西1棟	A-AW1-353	掘物	収材(収目)	径(12.0)		高さ12.6	5片の痕跡 タガの痕跡 明瞭な孔 柄付
50 B	東1棟	A-AW1-245	円板	収材(収目)	径27.5		高さ0.1	接合面に木釘の跡あり
51 B	西2棟	A-BW1-273	円板	収材(収目)	径27.5		高さ0.9	中心に段差あり
52 A	東1棟	A-BW2-291	円板	収材(収目)	径21.0		高さ0.8	中央に孔 横切面が 高さ低く 方形痕
53 B	東3棟	A-W3-43	円板	収材(収目)	径12.0		高さ0.6	中央に孔 横切面が 中央部小孔
54 B	東1棟	A-E1-116	円板	収材(収目)	径19.4		高さ1.0	竹葉 中央に段差あり 3箇所に孔 植物葉?
55 C	東2棟	A-E2-331	円板	収材(収目)	径12.9×13.4		高さ0.9	厚不均等
56 B	東2棟	A-E2-138	円板	収材(収目)	径29.0		高さ1.5	接合面不明木釘 径3.4Cmの孔 植物の葉?
57 B	東1棟	A-E1-318	円板	収材(収目)	径(10.4)		高さ0.7	厚不均等
58 B	東1～4棟	A-BE1～4-339	円板・枠	収材(収目)	径:上2.8・下2.9		高さ1.0	円板周囲に木釘 径3.4Cmの孔 植物の葉? 高さ0.7
59 B	東1棟	A-E1-125	甕	収材(収目)	径24.9		高さ1.0	厚3.3
60 B	東1棟	A-E1-120	甕?	収材(収目)	径33.6		高さ1.2	径8mmの匙 表面に2箇所に小孔 植物の葉?
61 B	東4棟	A-E4-214	甕	収材(収目)	径18.7		高さ1.0	段差あり 表面黒黒 中央に径0.4Cmの孔
62 B	東1棟	A-E1-220	甕	収材(収目)	径35.6		高さ1.5	中央に径0.25Cmの孔 遺葉の痕?
63 B	西2棟	A-BW2-290	下駄	角材(収目)	長さ20.4		高さ1.0	高さ3.5
64 B	西2棟	A-BW2-292	下駄	角材(収目)	長さ21.4		高さ1.1	高さ3.2
65 B	西3棟	A-W3-46	下駄	角材(収目)	長さ20.8		高さ1.9	高さ7.9
66 B	西3棟	A-W3-76	下駄	角材(収目)	長さ21.9		高さ1.8	高さ3.6
67 B	西4棟	A-W4-85	下駄	角材(収目)	長さ22.5		高さ1.0	高さ7.6
68 B	西4棟	A-W4-88	下駄	角材(収目)	長さ23.0		高さ1.3	高さ3.5
69 B	東1棟	A-E1-307	下駄	角材(収目)	長さ16.0		高さ1.0	高さ6.3
70 B	東1棟	A-E1-108	下駄	角材(収目)	長さ22.5		高さ1.1	高さ3.3
71 B	東1棟	A-E1-24	下駄	角材(収目)	長さ20.7		高さ2.6	高さ6.5
72 B	東1棟	A-E1-126	下駄	角材(収目)	長さ20.6		高さ3.4	高さ6.3
73 B	東1棟	A-BE1-315	下駄	角材(収目)	長さ22.6		高さ1.9	高さ3.5
74 C	東2棟	A-E2-357	下駄	角材(収目)	長さ22.5		高さ1.7	高さ3.5
75 B	東2棟	A-E2-154	脚の脚	収材(収目)	長さ19.8		高さ1.7	高さ4.1
76 B	東2棟	A-E2-197	脚の脚	収材(収目)	長さ28.0		高さ1.0	高さ0.6
77 B	東2棟	A-BW2-288	砂利	収材(収目)	径7.3		高さ0.6	高さ1.0
78 B	東2棟	A-E2-187	砂利	収材(収目)	径7.3		高さ0.6	高さ1.0
79 B	東2棟	A-E2-187	砂利	収材(収目)	径7.3		高さ0.6	高さ1.0
80 B	東1棟	A-E1-314	人形	骨	身長9.9		高さ0.7	高さ2.1
81 B	東1棟	A-BW1-314	人形	骨	身長9.9		高さ0.7	高さ2.1
82 A	西3棟	A-W3-271	人形	骨	身長10.8		高さ0.7	高さ2.1
83 B	西4棟	A-W4-40	人形	骨	身長17.7		高さ0.7	高さ2.1
84 B	西4棟	A-W4-40	人形	骨	身長20.7		高さ0.7	高さ2.1
85 B	東2棟	A-E2-156	不明	骨	身長18.6		高さ0.5	高さ2.7
86 B	東2棟	A-E2-319	不明	骨	身長18.6		高さ0.5	高さ2.7
87 A	西3棟	A-W3-391	骨角器	骨	身長19.2		高さ0.5	高さ2.9
88 A	西3棟	A-W3-382	骨角器	骨	身長19.2		高さ0.5	高さ2.9
89 B	東2棟	A-BE2-300	骨角器	骨	身長21.2		高さ0.3	高さ2.9
90 C	東3棟	A-CE3-389	空枠	骨	身長17.1		高さ0.6	高さ2.9

漆碗 (1~13)

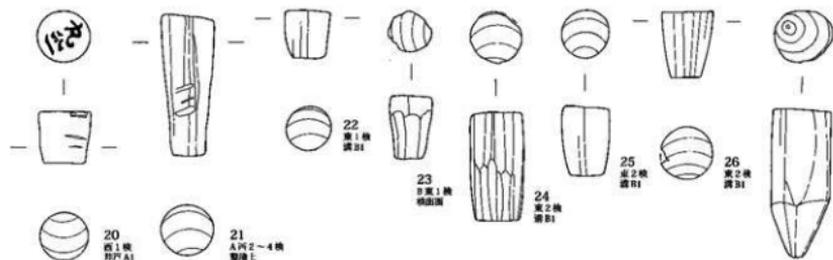


漆碗蓋 (14~19)

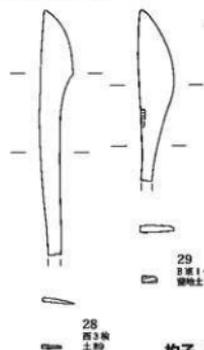


第35圖 木製品 (1)

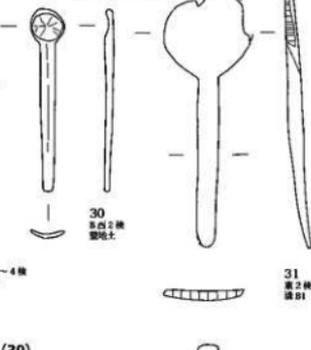
栓 (20~27)



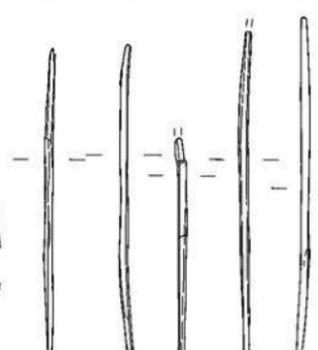
狭匕 (28~29)



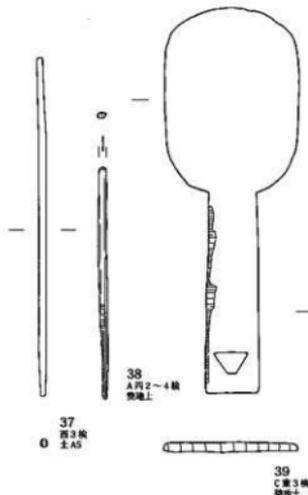
匙 (30~31)



箸 (32~38)



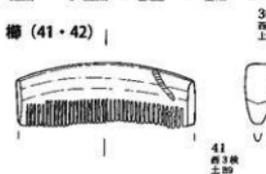
杓子 (39)



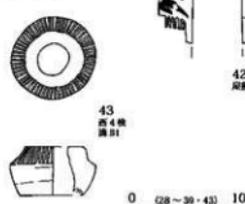
芋秤入れ (40)



櫛 (41~42)



傘 (43)



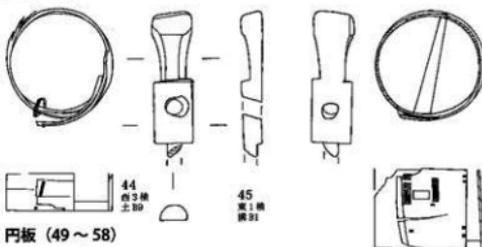
0 (28~30+43) 10cm

0 (20~27+40) 10cm

0 (41+42) 10cm

第36図 木製品 (2)

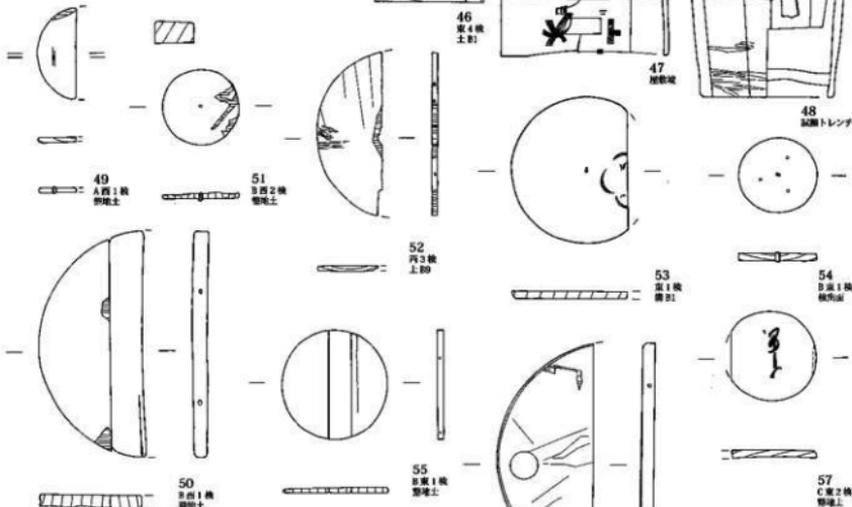
曲物・柄杓 (44~47)



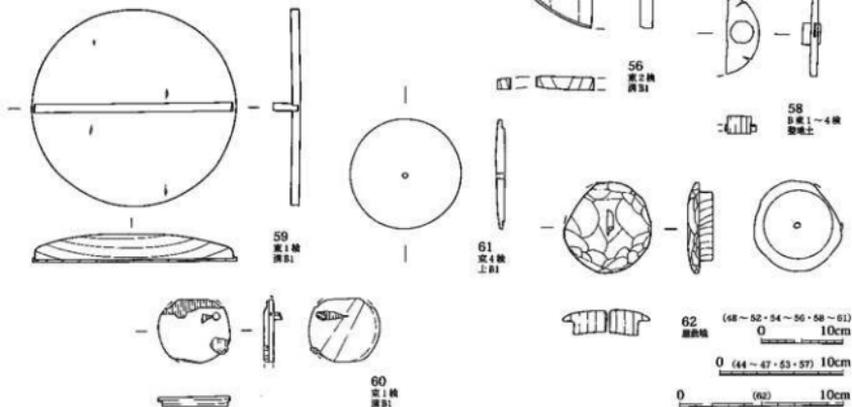
指物 (48)



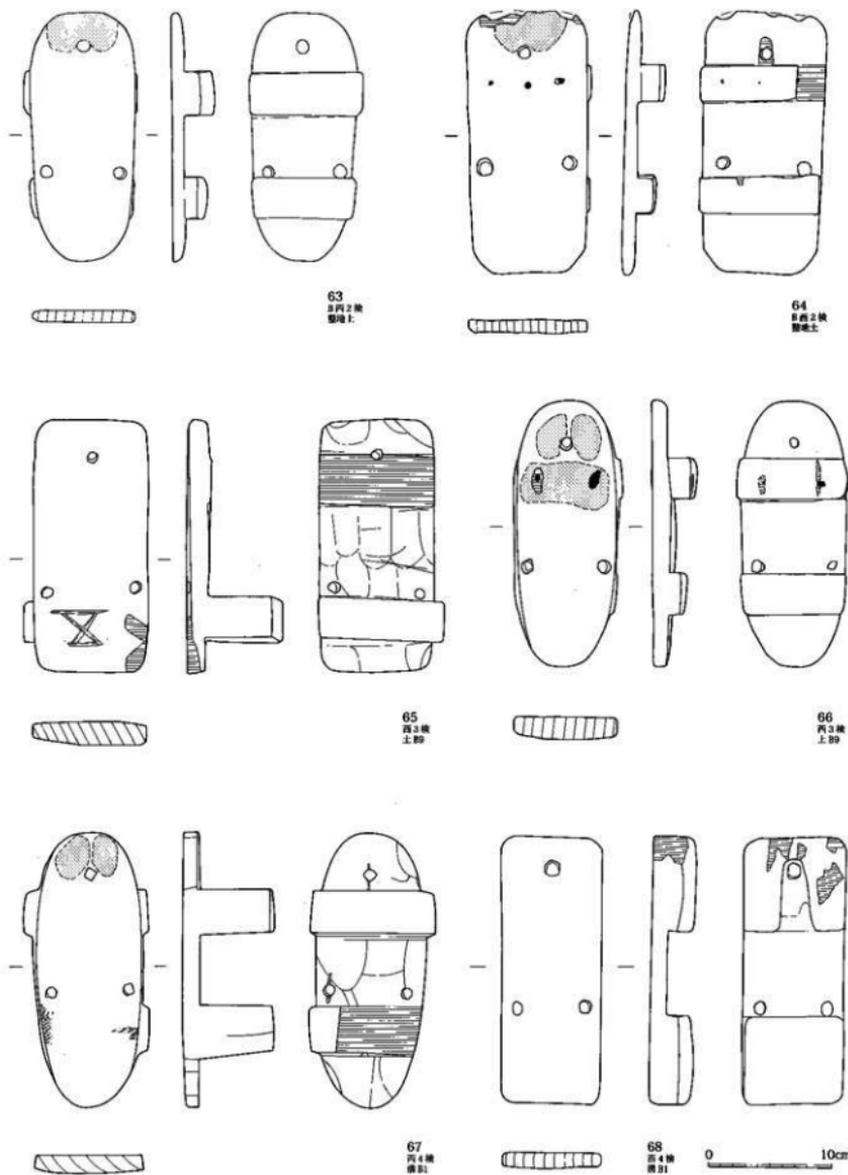
円板 (49~58)



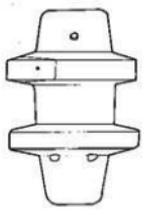
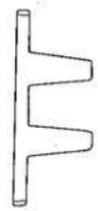
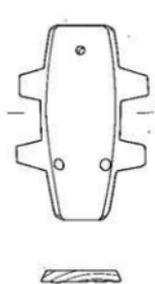
蓋 (59~62)



第37図 木製品 (3)



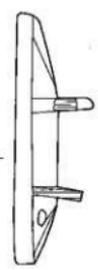
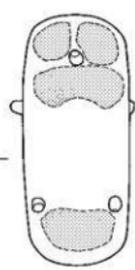
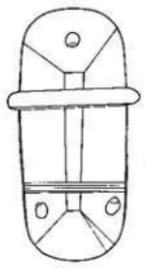
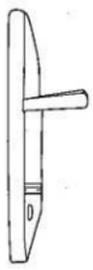
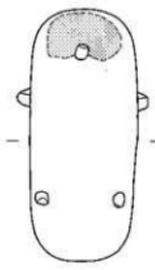
第38図 木製品 (4)



69
第1缺
横切面

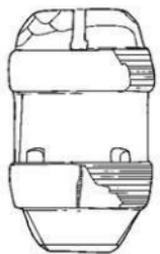
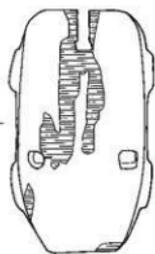
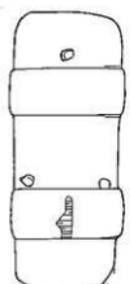
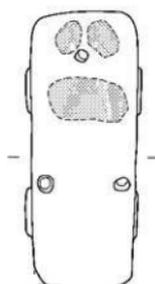


70
第1缺
横切面



71
第1缺
横切面

72
第1缺
横切面



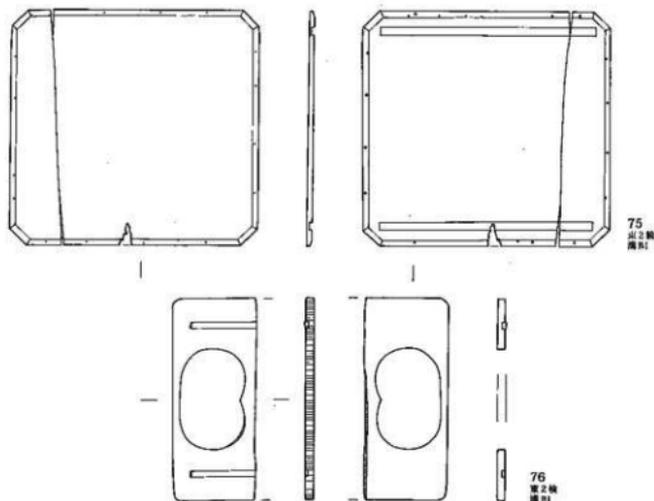
73
第1缺
横切面

74
C第2缺
横切面

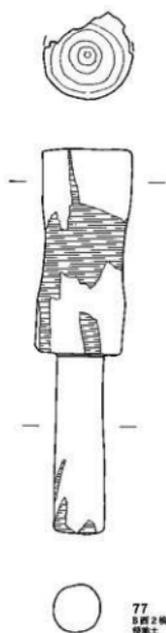


第39图 木製品 (5)

膳 (75・76)



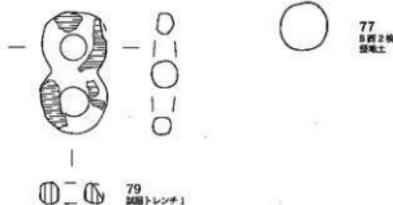
都知 (77)



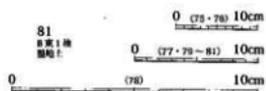
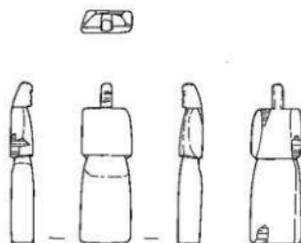
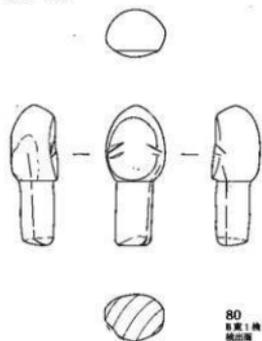
荷札 (78)



紐締め具 (79)

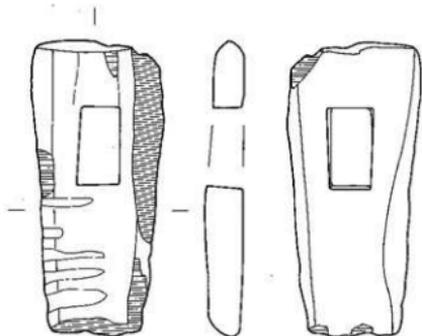


人形 (80・81)

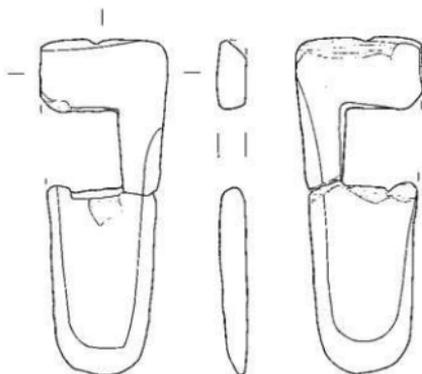


第40図 木製品 (6)

鎌 (82・83・84)



82
刃3枚
土A5



83
刃4枚
土B1

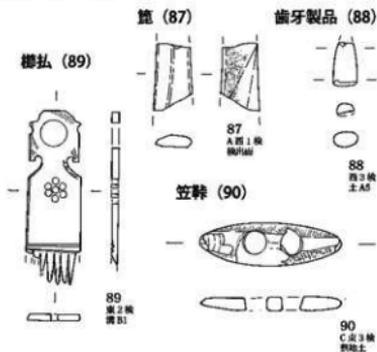
0 (80) 10cm

0 (82~84) 10cm

0 (85) 10cm

0 (87~90) 10cm

骨角器 (87~90)

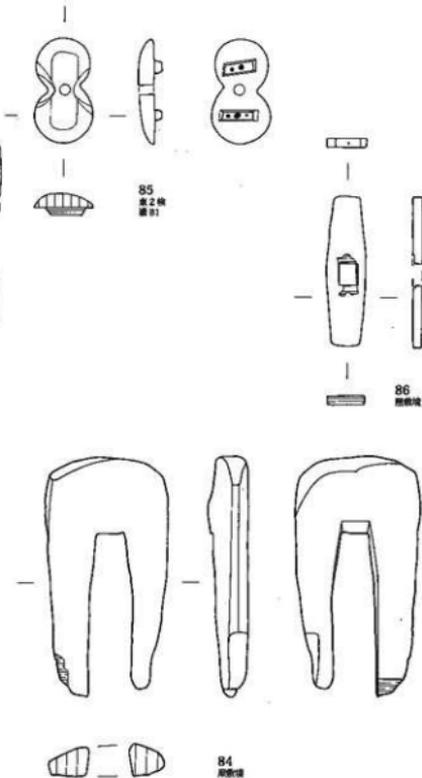


櫛払 (89)

筈 (87)

歯牙製品 (88)

不明品 (85・86)



85
刃3枚
土B1

86
櫛歯

84
櫛歯

第41図 木製品 (7)、骨角器

(5) 自然遺物 (第11・12表・第42図)

ア 動物遺存体

今次調査において、出土骨の同定標本数 (NISP) は37個体を数える。個々の出土位置・同定種・遺存部位・計測値・解体痕・推定体高については第12表を参照されたい (1)。

出土資料は主に獣骨であり、イヌ13点・シカ16点を回収した。最小個体数 (MNI) はイヌ6匹、シカ7体を数える。他、魚骨と鳥類骨が各2点、種不明骨が4点出土している。

計測値によるイヌの推定体高はいずれも45～48.5cmで中大型犬に相当する。現生では中型犬の紀州、秋田、甲斐犬といった犬種の大きさであり、残存していた歯の摩耗や萌出からいずれの個体も壮年であると推測される。愛玩や使役を目的として飼育することが一般的ではあるが、埋葬されていないことと解体痕が確認出来ることから食用として扱われ、下顎骨が出土していることから屋敷内にて解体されていたと考えられる (2)。

出土骨にみられる解体痕については切痕・打割痕・切断痕・咬痕があり、以下に特徴的なものを述べる。

- ・刃物による明瞭な切痕はいずれも端部に入っており、これは解体時に韌帯除去を行なった痕跡である。
- ・1～2mm程度の浅い切痕が無数に入る部位は、筋肉等を剥ぎ取る際についたキズと推測される。
- ・打割痕は骨幹の端部寄りに打撃を加えているものが多い。これは骨髄食を行なう目的のほか、複雑に絡み合った韌帯をはずす手間を省くために打撃を加えたものである。
- ・鋸による明瞭な切断痕が確認できる資料として枝角の角座部が出土している。角座は骨角器利用に適していないために廃棄品だと考えられる。

他の目立った痕跡が確認できない資料も、出土状態から埋葬や遊離骨の可能性が極めて低いため、食用後の廃棄や骨細工として使われない部位・箇所であったための廃棄と考えることが適当である。

遺構内出土骨の内、東3検溝B1の1点、西3検土坑A5の2点、西4検溝B1の7点は遺存状態が大変良好であった。10点の中には骨細工に適している部位 (シカの後肢骨) も存在するが、食材としての利用にとどまっている。特に西4検溝B1からのシカの後肢骨 (大腿骨・脛骨・中足骨・踵骨) と西4検土坑B3からのイヌの後肢骨 (大腿骨・脛骨・踵骨) は同一個体であると思われ、屋敷に1個体丸々持ち込んでいたわけではなく、部分的に肉を入手していた可能性を示唆するものである。

【遺構内より出土した骨に解体・調理後に廃棄したことを示唆する痕跡があることから、ゴミ穴として利用していたことが窺えるが、出土骨の総数が少ないことや部分的に出土しているものが多いことから長期にわたって利用していた穴ではなく一過性のゴミ捨て用の穴であったと考えられる。】

イ 植物遺存体

植物遺存体の出土数は15点を数える。オニグルミが9点 (核)、ヒメグルミが2点 (核)、モモが2点 (核)、マツ科1点 (結果)、イチョウ科1点 (種子) が出土している。遺存体の利用については第11表を参照されたい。

クルミにはネズミが齧って中身を食べる前で止めてしまったものが1点、長1.5cm・巾1.0cmの穿孔が2箇所にあるものが1点出土している。

第11表 植物遺存体の利用方法一覧

同定種	食材利用	その他の利用方法
イチョウ	種実を食用	庭木や生垣に用いられる
クルミ	種実を食用	染料 (葉及び樹皮の黄色の色素が含有)
モモ	果実を食用	薬用・植栽
マツ	非食用	鍾食用植栽・樹木は建築材として利用

第12表 動物遺存体一覧

部位	種	写真 番号	出土地点	左右	L	B	H	欠損部	解体痕	同一性	推定体長	備考	
前肢骨	マダイ	1	東2棟 土坑B3	—	40	29	15		□		300以上	横方向に切断	
	魚類		西3棟 土坑B9	—	—	—	—					魚骨 他骨片多数	
胸骨	鳥類	2	B区東1棟	—	<34>	<11>	—	近位				小破片2点 同一個体	
			東2棟 溝B1	—	<74>	39	11						
部位	種		出土地点	左右	L	B	H	欠損部	解体痕	同一性	推定体高	備考	
枝角	シカ	3	B区1棟 整地土	—	<66>	58	—		□			角底から枝部にかけて遺存 角底骨は無い	
白歯	シカ	4	東2棟 溝B1	—	—	—	—					歯冠高15mm	
歯骨	哺乳類	5	東1棟 溝B1	—	48	45	44	突起部					
部位	種		出土地点	左右	GL	BP	Cr-Gov	欠損部	解体痕	同一性	推定体高	備考	
下顎骨	イヌ	6	西4棟 溝B1	L	139	56	P3-4 M1-2		×	A	485	遺存状態良好。若干の摩耗あり	
			東4棟 土坑C1	L	127	53	M1-2					454	歯冠エナメル質部は白色
			屋敷塚	L	131	<36>	M2			□	B	465	前突起の一部に欠損痕?あり
			B区西2棟 整地土	R	130	<43>	P4 M1-2					462	大歯部より遠位欠損 全長は復元推定値
		7	屋敷塚 №7	R	135.5	<51>	P3-4 M1-2				B	477	若干の摩耗あり
部位	種		出土地点	左右	GL	BP	BD	BT	解体痕	同一性	推定体高	備考	
上顎骨	イヌ	8	西4棟 溝B1	R	152	24	28	14	○	A	465	遠位部欠損所に切断(1mm程度)	
	シカ		C区東3棟	L	<49>	—	38	20				遺存状態良好。遠位の1mm遺存	
部位	種		出土地点	左右	GL	BP	BD	BT	解体痕	同一性	推定体高	備考	
肩胛骨	シカ	9	B区東1棟 整地土	L	<156>	—	45	近位	×			遠位に咬痕か	
		西3棟 土坑B9	R	<141>	—	41	近位						
尺骨	イヌ	10	C区東2棟 北トレンチ	L	180	25	7		×		472	遠位寄りの腕所に咬痕あり	
	イヌ	11	B区東1棟	R	166	27	8				446		
橈骨	イヌ	12	C区 南壁	R	218	37	34		×			遠位部に切断痕あり	
	シカ		掘削中	R	<125>	—	32	近位	○			数箇所に切断痕あり	
大腸骨	イヌ	13	西4棟 土坑B3	R	<139>	—	28	近位	◎△	C		骨幹、遠位端に切断 近位付近は打割	
	シカ	14	西4棟 溝B1	R	275	64	54		◎	D		近位端内側に2箇所切断あり	
	イヌ	15	西3棟 土坑B9	L	<124>	54	—	遠位	△			打割痕あり 全長は残存値	
	イヌ	16	西4棟 土坑B3	R	<57>	—	21	近位	△	C	457	同一個体。打割により2個体になった	
		西4棟 土坑B3	R	<104>	31	—	—	遠位	△	C			
脛骨	シカ	17	西4棟 溝B1	R	312	56	33		◎	D		遠位端、近位端ともに1ヶ所ずつ切断あり	
		東3棟 溝B1	R	283	50	34		◎				遠位端に3箇所、解体痕あり	
腓骨	イヌ	18	B区西2棟	R	259	—	84		△?			近位端は打割か	
	シカ	19	西4棟 土坑B3	R	<37>	10	<15>	遠位端	△?	C		欠損部は打割した可能性がある	
中足骨	シカ	20	西4棟 溝B1	L	221	23	26		△?	D		遠位端部欠損(打割か)	
	シカ	21	西3棟 土坑A5	R	142	24	30.5			E		幼獣	
趾骨	シカ	22	西3棟 土坑A5	R	38	20	16			E		幼獣 中趾骨	
	哺乳類		西4棟 溝B1	—	<94>	—	—	近遠位	○			数箇所に切断痕あり	
中足骨?	哺乳類		B区 杭列1トレンチ2	—	<128>	—	—	近遠位	○			2cm程の切痕が7~8箇所あり	
	哺乳類		西4棟 溝B1	L	<70>	31	—	遠位	△			打割痕あり。ウシの幼獣か	

単位:(mm) <数値>=現存値 L=最大長、B=最大幅、H=最大高、GL=全長、BP=近位端最大幅、BD=遠位端幅、BT=骨中幅、GL-Gov=下顎骨全長、Cr-Gov=下顎枝高
 解体痕⇒◎=切痕、○=浅い切痕、□=切断痕、△=打割痕、×=咬痕

動物遺存体学名表

- 哺乳類 Class Mammalia
 食肉目 Order Carnivora
 イヌ Family Canidae
 Canis familiaris
 Order Canis/iodactyla
 シカ科 Family Cervidae
 シカ Cervus nippon
 硬骨魚綱 Osteichthyes
 Perciformes
 スズキ目 Family Sparidae
 マダイ Pagrus major
 鳥綱 Class Aves

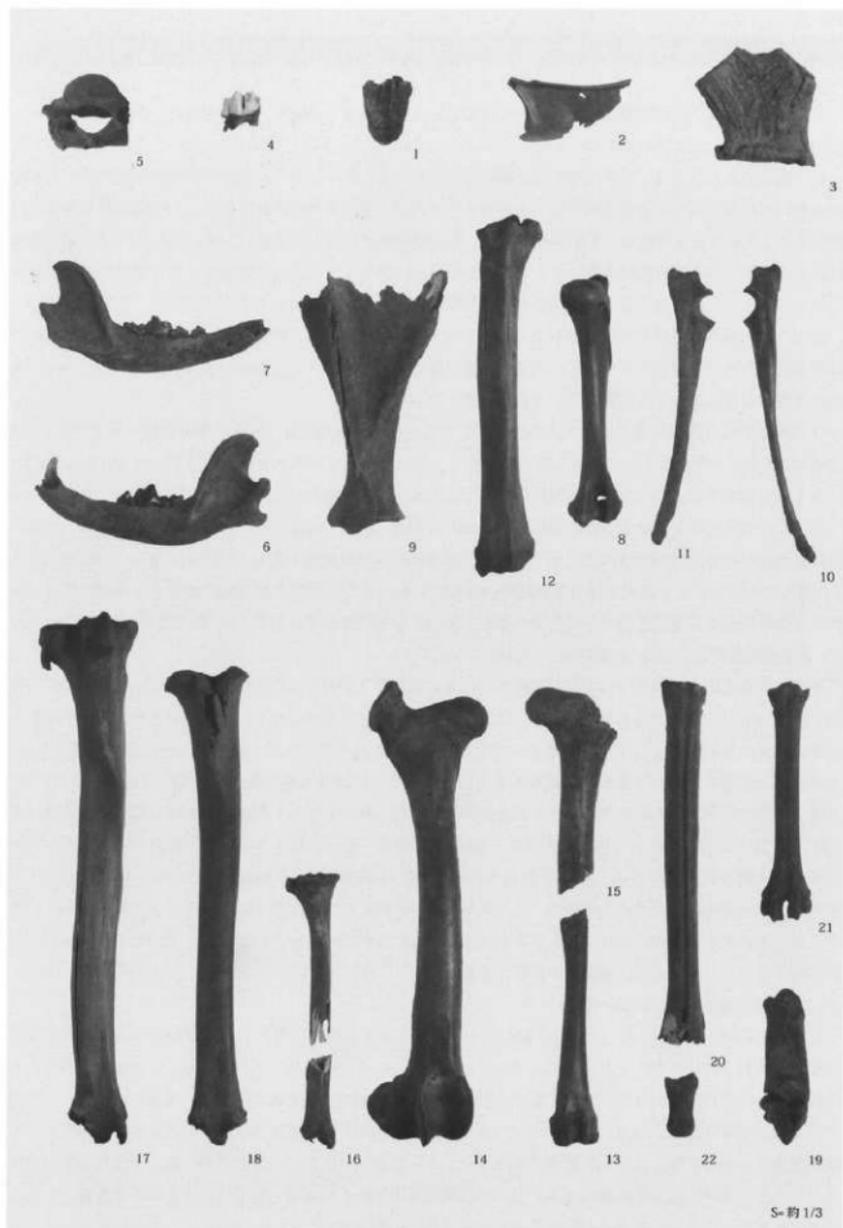
- クマ科 Juglandaceae
 Juglans mandshurica Maxim.varsieboldiana (Maxim.) Makino
 オニグルミ
 ヒメグルミ
 マツ科 Pinaceae
 イチョウ科 Ginkgoaceae
 バナナ科 Rosaceae
 モモ Amygdalus perica

注1 計測方法は「動物考古学の手引き」による

2 山内氏(1958)の直式を用いた

参考文献

- 山内定平『犬における骨長より体高の推定法』(1958)
 江戸産物研究会『江戸の文化史』(1992)
 松本市史編さん室『松本市史 第1巻 自然編』(1996)
 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター『動物考古学の手引き』(2006)



第42図 動物遺存体

Ⅳ 調査のまとめ

今回の調査では三の丸武家地に関わる多くの知見を得た。最後に特記すべき点を挙げ、まとめたい。

1 屋敷境遺構について

松本城三の丸の丸の一番は、道路や地割等に藩政時代の姿をよく残しており、現存する城下町絵図の中でも精度が高い「享保十三年秋改松本城下図」との整合性が高い。第2章でも触れたように、今回の調査地は同絵図によると2筆の武家屋敷地にまたがっており、敷地境界線は絵図とほぼ整合していた。従って、発掘調査においてはB区中央に屋敷境遺構存することが予想され、果たして絵図、現地割と一致して境界遺構を検出することとなった。これにより、絵図に示された屋敷割が正確なものであることが裏付けられた。

検出された屋敷境遺構は、後に触れる4検～3検段階の周辺遺構との関係から、おそらく17C中葉までには構築されたものと推定している。この時期を境に遺構のあり方が大きく変化しており、三の丸武家地の本格的な整備が進んだことを示唆しているものと受け取られる。

今回検出された遺構は盛土により土手状の高まりないしは段差を設け、地上に塙を設置したとみられる。遺構は3検から1検段階まで、整地に伴う生活面の上昇に連動して数次の改修を受けていたが、その位置を大きく変えることはなかった。藩政時代を通じてこの地点の屋敷境が厳密に路襲されていたことがわかる。

こうした武家屋敷における境界の遺構は、一般的に生垣、堀溝、塙等からなっているとされるが、松本城の武家地における調査事例は大変少なく、今回の調査事例は大変貴重である。ちなみに同じ三の丸の土井尻1次調査地点では土止め杭列を伴う溝状遺構が検出された。また史跡松本城の追加指定を受けた土井尻の西総堀土塁跡東接の武家屋敷地では屋敷境の南北で整地土の堆積に大きな変化が見られ、石列が並走していた。

2 武家地屋敷割成立以前（4検段階）の遺構について

今回の調査範囲では4面の生活面が確認され、そのうち最下層の4検に帰属する遺構のいくつかは出土遺物の様相から16C代まで遡る可能性がある。この段階はまだ屋敷境遺構がなく、絵図に示されるような屋敷割はまだ成立していなかったと考えられる。小笠原貞慶による女鳥羽川以南への移設以前、松本城（深志城）の町人町は惣構の内側である市辻、泥町にあったとされる。市辻は後の地藏清水、泥町は柳町であるから、泥町との関連も考慮する必要があるであろう。調査段階では溝状遺構とした長く掘り込みの深い堅穴状の遺構（溝B1）や、堅穴建物的な平坦な底面を有する土C1等の遺構は、その形態や方向など、近世の武家屋敷や町屋に関わる遺構とは異質である。溝B1に類似する長大な堅穴状遺構は続く3検段階にも残る（土B9）。位置・方向を見ても4検からの連続性が窺え、この点からも3検段階での大きな変化を認めることができる。今回は把握しきれなかったが、あるいは3検はさらに2面以上の生活面に分けて捉えなくてはならないのかもしれない。その点は今後の周辺調査での課題である。

3 1・2検の遺構と遺物について

C区では4検から1検まで、いずれの整地土も西に向かって傾斜して落ち込む姿が観察された。本報告では窪地状地形と称したが、それぞれの上面すなわち生活面も等しく傾斜しており、もともと水平に構築された面が何らかの原因で不等沈下した可能性も否定できない。本来建物遺構が存していてもおかしくない空間だが明確な遺構も認められず、その性格は不明と言わざるを得ない。窪地状地形の影響もあり、遺構の分布は屋敷境遺構周辺に限られた。屋敷境の東西はいずれも屋敷地としては真手にあたる。そのため建物遺構は見られず、井戸・水道等の施設が集中し、屋敷境の側溝が塵芥廃棄場として利用された様子を窺うことができた。廃棄された遺物を見ると陶磁器や木器類は日常の生活雑器が中心となるが、一方で鍍金を施したキセルや刀装具など、武家の生活を勞働とさせるものも少なからず存在する。



屋敷境遺構 1 検段階 全景
(南から)



同上 1 検段階 北部南面
(東から・手前は東 1 検溝 B1)



同上 2・3 検段階 中部～南部
(南から)



屋敷境遺構 2 検段階 南部西面
礎敷きの状況 (西から)



同上 2 検段階 中部東面
土止め板および杭列の状況
(東から・手前は東 2 検溝 B1)



同上 3 検段階 中部西面
杭列の状況 (西から)



屋敷境遺構 土層断面(トレンチ3北壁・南から)



西4検土坑A1 土層堆積状況(北から)



西1検井戸B1 側面の状況(北から)



西1検井戸A1 遺物出土状況(南から)



同上 西1検水道B1 井戸B1への竹管接続状況(北から)



西1検井戸A3・水道A1 完掘状況(南から)



東3検ピットC1 掘出土状況(西から)



東3 検集石 B1・溝 B1・土坑 検出状況 (東から)



東4 検土坑 C1 完掘状況 (西から)



C区北壁 土層堆積状況 (東4 検土坑 C1 断面・南から)



同上 炭化物・内耳鏝出土状況 (西から)



C区窪地状地形 東部掘り下げ状況 (東から)



東1 検溝 B1 遺物出土状況 (鉄鍋・蓋・軍笥錠)



発掘調査の状況 (B区屋敷境の調査・南から)



西3 検土坑 B9 遺物出土状況 (漆椀蓋)



3



64



93



102



125



135



141



155



182



210



229



242 · 218



288



305



315



333



349



357



369



389



395 · 577



398



406



411



440



430



437



533



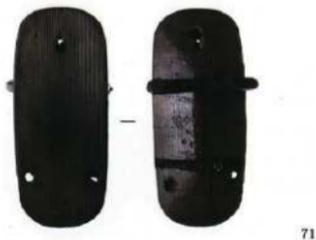
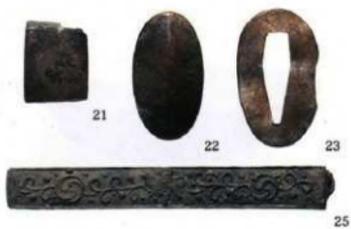
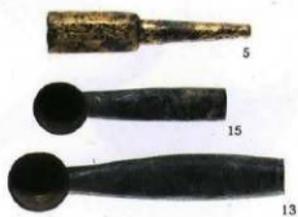
530



555



533 底面



報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしまつもとじょうさんのまるあとこやなぎちようだい2じはつくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県松本市松本城三の丸跡小柳町第2次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.199							
編者名	小山貴広、竹原 学、三村竜一、宮島義和、横井 奏、吉井 理							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 松本市大手3丁目8番13号(5F) TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2009(平成21)年3月27日(平成20年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながのけんまつもと 松本城三の丸跡	ながのけん 長野県 まつもと 松本市 あまて 大手3丁目	20202	494	137度 58分 15秒	36度 14分 9秒	20070918～20071218	508㎡	民間業者 によるマ ンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松本城三の丸跡	城館跡	戦国～近代	土坑 ピット 溝状遺構 屋敷境遺構 井戸 水道管 築石	17基 9基 5基 1基 3基 2基 1基	土器・陶磁器、土製品、瓦、石器、 金属製品、木製品、骨角器、自 然遺物			
要約	松本城三の丸小柳町は中級武家の屋敷が連なっていた。調査地点では建物こそ検出できなかったものの、屋敷地を構成する井戸、水道などの各種遺構を検出した。中でも総図上の位置と整合する屋敷境遺構が検出された点が注目される。なお、下層では屋敷境構築以前の遺構が分布しており、深志城時代の城下町である泥町との関連が想起される。							

松本市文化財調査報告 No.199
長野県松本市

松本城三の丸跡 小柳町

—第2次発掘調査報告書—

発行日 平成21年3月27日

発行 松本市教育委員会

〒390-0674 長野県松本市大子3-8-13

印刷 精美堂印刷株式会社

